
Parfum

響かほり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Parfum

【Nコード】

N3185X

【作者名】

響かほり

【あらすじ】

榊紫苑は自分の職業（俳優）を隠して、従兄弟である榊健斗のクリニックへ不眠治療に通っていたが、症状は徐々に悪化するばかり。二年間、ずっと自分の診療介助についてくれる年上看護師の吉良は優秀で、それなりに気に入っていて、なんとなく気になる存在。

愛や恋という感情を否定し、女性と深く付き合う事なかった紫苑は、従兄弟の口説きテクすら通用しない吉良に強く興味を惹かれはじめ。

それは恋愛感情ではなく、玩具を手に入れるような、自分にも靡かない彼女を口説き落とす遊びの様な感覚だった…

一方の吉良あげはは、高時給につられた特別診療（榊紫苑の診療介助）で時間外手当をゲットして、倏しく貯蓄生活をしながら恋愛ナシのおひとり様生活を満喫中だった。それが、これまで挨拶程度の口説き文句しか言わなかった榊紫苑の変化により一転。過度なエロスキンシップをする榊紫苑に彼女のアイデンティティは崩壊寸前！榊紫苑への評価はダダ下がり。

そんな二人の間に恋は芽生えるの！？

『Sweet hug』の吉良あげはと榊紫苑が付き合う前のお話。

紫苑と吉良の視点が交互に展開する一人称表記の小説です。他HPにて連載掲載している物を、改稿・転載しています。

1 〽紫苑side〽 (前書き)

二人の付き合う前のお話を、改稿掲載開始しました。
ゆっくりペースでの更新になりますが、Sweet hugとは
違った二人を楽しんで居たければ幸いです。

1 〔紫苑 side〕

第一章 華麗なる榊一族

はじめに気になったのは、彼女の香り。

近付いて微かに分かる程度の、淡いハーブの芳香。

その香りに触れる時だけ、俺は不思議な安息感に包まれる。

恐らくラベンダーと、何かが混ざっているはずなのだけれど、俺にはそれが何の香りかは分からなかった。

ずっと気になっていたけれど、一度も相手に確かめたことはない。彼女に出会って二年になるが、挨拶程度の会話か、必要最低限の会話以外はした事がない。相手も俺も、私情で話しかけるようなことのない仲だ。

相手は、俺が通う睡眠治療専門のクリニックの看護師。

苗字は吉良、名前は知らない。

ケーシーとかいうツーピースのパンツタイプの機能的な白衣の胸元に、そう苗字が書いてあった。

身長は一七〇？前後で、細身だがメリハリのある女性らしい体型をしている。

顔は卵型で、ダークブラウンの目は大きめでくりっとし、睫毛も長い。鼻梁はすっきりしていて、唇は少し厚め。

俺より年齢は四、五歳年上だと聞いているけど、肌理細かく張りのある色白な肌や、幼く見える顔は、どう見ても俺と同じくらいにしか見えない。

容姿を評価するなら、中の上。

顔自体は特に目立った美人ではないし、色気は皆無。

身だしなみには気を配っているようで、化粧品に手抜きはなく、いつみてもナチュラルメイクで清楚な印象を受ける。

まあ、仕事中の看護師に女の色気をふりまかれても困るけど、接客と言うか俺への応対は丁寧で女性特有の媚を売る様な裏が見えない。

徹底して看護師としての立場を崩さず、俺が挨拶程度に口説いた言葉もあっさりかわして、業務をしつかりとこなす。

かといって、つんけんしてもいないし、どちらかと言えば笑顔を良く見せて人を和ませる雰囲気がある。気配り上手で俺は彼女が付いた診療中に不快感を覚えたことはない。

俺が口にするよりも早く、空調一つ、照明一つにしても調節してくれる。かゆい所に手が届く、というのは彼女の様な配慮の事を言うのだろう。

彼女は一個人としても有能だ。

自分で言うのも何だけれど、俺は女に不自由したことはない。常に言い寄って来る女がいる事に同性から羨望を抱かれる事が多いが、結構、鬱陶しい。

馴れ馴れしく自分を売り込むのはまだいい。

許せないのは、交際していようとしていなくなるのと、節度もなく我が物顔で図々しく俺の仕事や私生活を根掘り葉掘り聞いてくる女。仕事だろうと私生活だろうと、土足で踏み込んでくるような女には嫌悪感しかない。

その点、彼女は何も言わなくても、俺が侵してほしくない絶対領域に踏み込んでこない。

他愛ない会話だけで、俺の事には一切触れて来ない。だから、診療中の居心地は良い。

最近、このクリニックに来ると、いつも彼女の姿を眼で追っつてしまう。

理由は良く解らない。何となく、目が離せない。

「…榊さん、やめてもらえませんか」

呼ばれて、ふと我に返る。

ティーブラウンの短い髪の彼女は、困ったように俺を見下ろしていた。

「あ…俺、何かしていましたか？」

「そんなにガン見なされると、わざと針を刺し間違えますよ？」

治療室の寝台で横になっていた俺は、俺の腕に点滴を刺そうとしていた彼女を凝視していたらしい。

「…わざと？え？わざとって、何？」

なんでもないフリをしているけど、本当は俺、注射の類が大嫌いなんだ。

なのに、わざと打ち損じるつもりなのかと、内心で冷や汗をかいた。

が、彼女は既に点滴の針を刺し終えていて、テープで管の固定も終えて、道具を片付けていた。

痛みすら感じさせない彼女の注射の腕前は、俺が知る医者や看護師の中で一番だ。

いつもながら、手際が良く鮮やかすぎて感服する。

「貴方が少し院長に似ているので、ちょっと苦手というか…日頃の恨みが…」

彼女が勤務するクリニックの院長は、俺の十二歳年上の従兄弟、榊健斗。

兄弟と疎遠な俺には兄貴みたいな存在で、向こうも何かとかまっ

てくれる。

が、天上天下唯我独尊な性格で、女癖が異常に悪い。彼女は健斗好みのフェロモン系ではないが、プロポーションは完璧に好みの部類だ。

「もしかして貴女、健斗の愛人？」

吉良の形の良い柳眉が片方、ピクリと動く。表情が心なしに険しくなる。

“もしかして、地雷を踏んだか？”

俺の想像とは裏腹に、ぷつと、彼女は吹き出し、横を向いて必死に笑いをこらえる。

「ないない」

しばらくして笑いを収めた彼女は、手をひらひらとさせて軽く答える。

いつもは理知的な彼女の顔が、少し幼く見えた。

「院長と出会って八年経つけど…愛だの恋だのって、一度も感じたことないなあ…」

独り言のように彼女の口から洩れた言葉は、いつもの丁寧な口調ではない。きつとこれが素の吉良の喋り方だろう。

「そんなに長い付き合いなのに、何も無いの？」

傍に居る女に手を出さないなんて、正直、従兄弟の手癖からいつて考えられない。

吉良は困った様に首を竦める。

「自分の部下に手を出す様な男の下でなんて働けないし」

そう断言した吉良は、あわてて口元を押える。

「すみません。患者さまに、失礼な言い方を…」

「ああ、気にしないで。俺、堅苦しいのは嫌いだから」

「そういう訳にはいきません」

俺が紳姓だからなのか、吉良は終始言葉遣いが丁寧だ。

医療法人『聖心会』を運営する紳一族絡みの人間は、医療業界の人間にとっては、かなり怖い存在らしい。

『聖心会』というのは、日本でも五本の指に入る巨大総合病院『いずみ病院』が母体となり、福祉施設や老人保健施設などをいくつ

も抱える。

財界人や政界人も良く利用するため、太いパイプもいろいろあるようだ。

事實はどうか知らないが黒い噂もある。

敵に回すと、日本中の病院で雇ってもらえなくなる…とか。

それだけ、『聖心会』が医療業界で力を持っていると、いうことのようにだけれど。

従兄弟の健斗が経営するこの榊クリニックも、無論『聖心会』の法人名が付いている。

その『聖心会』の創始者であり、一代で『聖心会』を大きくしたのが、榊虎之助。

従兄弟の健斗と俺の祖父に当たる人で、俺が五、六歳のころに、老衰で大往生ともいえる年齢で亡くなった。

医療系の財閥の出身者で、医者と政界者が多数を占めた榊の嫡子として生まれた祖父は、政界への道には進まず、医者となった。

脳外科医として世界にも名を馳せ、私財で『いずみ病院』を立ち上げ、後継者育成のために尽力し、優秀な医者を輩出したりもした、実はかなりすごい人らしい。

偉大な話をよく聞かされるが、俺の記憶にあるのは、ファンキーなじい様の姿だけ。

ボケたふりをして使用人や自分の子供に悪戯を仕掛けたり、子供みたいに何にでも興味を持って若者の遊びにも進んで参加する。

しかも、ものすごく負けず嫌いで、こと勝負事に関しては、子供相手にもいつだって真剣勝負の大人気ない年寄りだった。

とにかく好奇心と悪戯心の塊みたいな人で、俺はよく遊んでもらった記憶がある。

俺は、じい様が好きだった。兄弟や父親より誰より。

妾腹の子供として肩身の無い場に置かれた榊の家の中で、一番人間らしく俺を扱って、孫として目をかけて遊んでくれた唯一の人間。未練のない榊の家で楽しかった思い出は、ほんの一年だけ過ぎ

たじい様との事だけ。

「…柷さん？」

不思議そうな顔で吉良にみられ、俺は我に返る。

「何か、面白い事でも？」

じい様のことを思い出しているうちに、自然と唇の端が緩んでいたらしい。

俺は表情を戻し、何でもない様に愛想笑いに切り替える。

「いや。貴女は堅苦しいなあと、思っ。もう少し、楽に話したらどう？」

「院長命令なので、仕事中はこの喋り方をやめるわけには…」

「健斗がどうしてそんな命令を？」

「このクリニクに来院される患者さまは、上品な方が多いので、あまり砕けた言葉を使うとクレームが来てしまうんです」

大方、健斗目当てのセレブな女たちだと、容易に想像がつく。

そして、健斗のそばで働いている女性職員に対して向けられる、嫉妬と羨望も。

「健斗がらみで、女性の患者から嫌がらせとかされたことないの？」

健斗の事だ。それなりにそう言った手合いの人間を対処できる人間を置いているとは思っ。

だが、吉良を見て要る限り、失礼とは思っが、彼女が巧く嫉妬を含んだ攻撃をかわせるようなスキルを持っている様にはとても見えない。

「そんな真似を患者にさせるような抜かりが、俺にあるとでも言いたいのか、お前は」

処置室の入り口に視線を向けると、白衣姿の従兄弟が腕を組んで立っている。

切れ長の双眸が、眼鏡越しに不敵に笑っている。

唇の端には皮肉な笑みまで称える。

加虐心旺盛な極悪顔をしているはずなのに、持って生まれた美貌に色気と華を添えるから不思議だ。

2 (後書き)

お気に入り登録、評価ありがとうございます。
急に寒くなってきたので、皆様お風邪など召されませぬよう。

「健斗の目の届かない所であるかも知れないだろ。女なんてのは、影でこそこそ悪巧みするのが好きで、その場凌ぎの嘘も平気でつくような人種だ」

「その陰険な人種が、そこにいるぞ?」

従兄弟は吉良に視線を向ける。

俺が彼女を見ると、吉良は苦笑している。

怒りとか不愉快という、負の感情で現れたものではなさそうだ。どちらかというと、呆れている感じだ。

「陰険なんて言っていないだろ」

「なんだ、てつきり吉良が陰険で姑息だと言っているのかと思ったぞ」

「別に吉良さんのことを陰険とは言っていない…」

「ほお? 姑息とは認めるのか」

「違うから。吉良さんの事じゃない」

「では、吉良は女ではないと」

「…健斗、言葉の綾で、上げ足を取らないでくれないか」

意地の悪い従兄弟を睨めば、健斗は鼻で笑う。

「院長、私をダシに使って遊ぶのは止めてくださいね。榊さんが困ってますよ?」

助け船を出す様に、吉良が健斗を窘めれば、健斗はにやりと笑う。

「俺も神なんだがな？」

「もう、すぐそうやって上げ足を取る。悪い癖ですよ」

「そんな俺に飽きもせず八年近く連れ添っているのは、お前だろ。そろそろ、愛でも芽生えただろ。俺に告白でもしたらどうだ？」

「それは連れ添うのではなく、付き合わされている、です。ちなみに、愛じゃなくて腐れ縁で結ばれているんですよ、院長」

聞いている俺が恥ずかしくなる様な誘惑に満ちた声で言葉を投げた健斗に、吉良はさらりとデッドボールクラスの言葉を返し、俺は思わず吹いてしまう。

こんなにあっさり従兄弟の口説きをかわす女性を、俺は初めて見た。

笑った俺を一睨みして処置室に入ってきた健斗は、吉良の手から点滴の道具が入った膿盆を取り上げる。

「吉良、そろそろ約束の時間じゃないのか？あいつを待たせるのか？」

「え？…嘘っ、こんな時間！？大変、遅刻ですっ！院長、私これで失礼します！」

腕時計をみた吉良は、驚いたようにそう言うと俺たちに頭を下げて出て行った。

あの慌てぶりは、デートか。

彼女の背を視線で追いかけて、その姿が消えた直後、鋭い視線を肌に感じた。

視線をそちらに向ければ、健斗がじとりと俺を見ている。

「ナースを口説くなら、よその病院でやれ」

べつに口説いてなどいないが、健斗が本気で注意しているのが分

かる。

「そんなに大事なら、首輪でも付けて檻に入れておけば？」

「出来るものならそうしたい所だ」

俺が寝ている診療台の横にある丸椅子に腰を下ろした健斗は、深くため息を漏らす。

そんな物憂げな従兄弟を見るのは、初めてだった。

そもそも、健斗がその気なら、女はいくらでも落せる。

気弱な発言自体、あり得ない。

だが、さっきの二人のやり取りを見えれば、吉良には俺達のやり方は通用しないと云うのが分かる。

落とすには、厄介な相手なのかもしれないが、健斗に其処まで言わせる女は、健斗の妻になつた美菜様以来かもしれない。

「何、そんなに吉良さん大事？」

「当たり前だろ。高い金を払ってあいつを引き抜いたのは、ほかの男に易くくれてやる為じゃねえぞ」

あまりにストレートな発言に、俺は従兄弟を凝視する。

いまだかつて、健斗がそこまで女に固執したのを見たことがない。

美菜様の時も無論、固執はしていたし神の力を使つてもいた。だが、金の力を借りると言うやり方は、健斗にとっては邪道。

吉良のことを気に入っているのは、診察に来る度、健斗の様子を見ていれば分かるけれど、スマートな口説きを重視する健斗が露骨に金銭を動かすのは、吉良に異常なこだわりがあると思えない。

「この俺のペットかつ、有能な仕事の相棒だぞ？どこぞの馬の骨に搔っ攫われるくらいなら、俺の愛人に据える」

その一言に、げんなりする。
言っちゃったよ、健斗の奴。

仕事の相棒よりも先に、ペットって。

健斗にとつての吉良の一番のポジションは、サドっ気を満たしてくる玩具なのか？

しかも、女とは浅く広く付き合う健斗が、愛人にしても良いくらい、吉良のことは気に入っていると云っているわけだ。

「無論、女に本気にならねえお前にも、やらねえぞ？」

俺にすら、そんな父親的意見で牽制をかけるくらい。

「：吉良さんも、面倒な男に見染められたものだね」

「女絡みのお前は、絶対的に信用できない」

「健斗に言われたくないよ」

反論すれば、健斗があり得ないほど嫌な顔をした。

3 (後書き)

ご指摘を頂いた箇所を一部、修正いたしました。

「お前、身を慎め」

身を慎む？

健斗からそんな台詞が聞けるとは、思ってもみなかった。

一番、使わなさそうで、不似合いな人間なのに。

まあ、俺も人のことは言えないが。

「毎回毎回、別の女とのゴシップ記事なんざ撮られやがって。節操なしに女を抱いたりするから、面倒事が起こるんだ。遊ぶ女は選べ。人気落ちてもしらねえぞ？」

珍しく健斗に心配され、俺はその慣れない相手の心遣いに笑ってしまった。

俺の職業は俳優。時々、雑誌のモデルもする。

芸名は“上坂伊織”

一応、それなりに名前は売れているし、この何年か、ありがたい事に休暇を取る余裕すらないほどスケジュールも埋まって、仕事は巧くいっている方だと思う。

世間ではイケメン俳優とか、そんなカテゴリーにくくられている。それも、母親譲りの異国情緒あふれる美貌があったからこそなんだろうけど、親父の血を受け継いでも、それなりに良い顔立ちにはなっただろう。

出来れば、どちらの顔にも似たくなかったというのが本音だが、子供は親を選べないから諦めるしかない。

自分の顔は好きではないけれど、この顔で得をしている事もある

し、捨てられる物でもない。使えるものは利用すればいいと、子供の頃に腹をくくった。

親父にすれば、俺の顔を見る度に母さんを思い出して不愉快になるだろうから、せいぜい有名になってテレビに顔を出し続けてやる。そんな復讐心もあって、この業界を選んだのも今の俺がある理由の一つ。

顔のせいで相手から言い寄ってくるから、女に苦労したこともない。

そのせいか、よくスキャンダル記事を週刊誌に書きたてられる。

「あれは、ほとんど捏造記事。映画の共演者との熱愛は、ほとんど話題づくりのための仕事の一环。手なんか出してない」

「クラブで毎回、女を持ち帰るとかいうアレは？」

「…何、健斗、週刊誌とか読むの？」

妙に詳しい事情を尋ねてくる相手は、ゴシップ雑誌はほとんど読まなかったはずだが。

「受付の絢子が、お前のファンでな。お前の載った雑誌を、吉良と見て話している所を、聞いただけだ」

その言葉に、俺は背筋に嫌な汗をかく。

「…もしかして、吉良さん、俺のこと気付いているのか？」

「さあな。あいつの芸能関係の知識は、無さ過ぎて困るくらいだ。

吉良は仕事以外で人の顔と名前を覚えられない、残念な記憶力だからな。一体どこまで絢子が教えた芸能人を把握したのかは、些か謎だ」

俺としては都合がいいのだが、そつなく物事をこなす吉良にそんな

な欠点があるのは、意外だった。

「もつとも、お前の素姓に気付いても、知らないフリを通すだろう。知ったところで、患者の事は一切、他所には口外しない女だ」

「彼女、信用できるのか？」

「俺の選んだ女に間違いがあるとでも言うのか？」

ほかの人間が聞いたら誤解しかねない言葉に、俺は苦笑が浮かぶ。

「女を見る目だけは、認めるよ」

健斗は、人の本質を見抜くのが巧みだ。特に、女性のそれは。

健斗が言うのなら、問題ない。

その辺は信用している。

まあ、吉良が信用に足る人間でなければ、俺の診察に立ち合わせる事など、そもそも健斗はしないだろう。

「で、噂の真相はどうなんだ？毎回、お持ち帰りか？」

そこが気になるのか、健斗は話を戻した。

「いや、持ち帰らないよ。第一、サカリがついているのが多いから、後々面倒くさい。一番、相手にしたくない」

後腐れのある様な付き合い方など一切しないし、リスクは常に最小限に抑える配慮もしている。

どの女とも関係を持つのは一度きり、俺が相手に惚れることは一度もない。

だから交際をしても長くは続かない。そのせいで俺は『恋多き男』という、おかしなレッテルを貼られている。

女が特別好きと言う訳でもない。ただの時間つぶしだ。

最も、最近は仕事の忙しさも手伝って遊ぶ時間どころか眠る時間もない。余計に、不眠症に拍車がかかっている。

仕事をこなすだけの体力維持も、難しくなってきた。

だから、健斗のクリニックに内緒で通って、不眠症の治療をしつつ、時々、こうして栄養剤入りの点滴を打つ。

女を見たら口説くのが榊家の礼儀だが、最近は口説く気力もなければ、女と遊ぶ気分にもならない。

けど、そんなことを同族の健斗に言えば、『お前は去勢された犬か』って、突っ込みが来るのも分かり切ったこと。

4 (後書き)

お気に入り登録、お気に入りユーザ登録ありがとうございます

最近、私の天敵花粉が猛威をふるって、マスク生活も相まってかなりの酸欠状態。

なので、一応のチェックはしていますが、誤字脱字などたくさんあるかも…

発見したらメッセージや、活動報告の所からでも教えていただけると助かります。

皆様は、花粉や風邪に負けませんよう、お身体大切にしてくださいね。

それに、これ以上、健斗に迷惑かけるのもまずい。

今ですら、時間も曜日も選ばず、俺の仕事の合間に診てもらっている。

その間隔も最初は月一度程度だったのが、このところ週に一、二度ペースになっている。

健斗は日と時間を選ばない俺の依頼に対して、一切の文句を俺に言うことはない。

性格はサディストだが、意外に面倒見の良い一面がある。

だが、それに甘えてばかりいても、俺の症状が良くなるわけでもない。

「後腐れない女が、一番だね」

「何、飄々と言ってやがる」

「眠れない時間を潰すために、女と遊んで何が悪い？」

「…俺はお前のその発想力が理解出来ん。女と遊ぶから余計に眠れねえんだろっつが」

もつともな意見を放った健斗は、俺の前髪に手をのばして乱暴に掻き乱す。

「女遊びは止める。そのうち、ぶっ倒れるぞ」

「…そうだな。女遊びは少し控えるよ」

一瞬、健斗の表情が険しくなる。

「てめえ、一月くらいは完全に断つくらい言えないのか」

左右のこめかみを押さえるように頭を掴まれ、ぐっと力を込められ、凄まれる。

容赦ない痛みが、俺の頭を襲う。

「いつてえだろ！健斗っ！」

乱暴に健斗の手を振り払い、従兄弟を睨みつける。

健斗は鋭い視線で俺を見下ろしていた。

「医者（俺）の命令が聞けねえのか？それとも、点滴が出来るからって調子乗ってんのか？今度から、俺がまた点滴してやろうか？」

「それだけは、やめろっ！お前、絶望的に下手くそなんだから！」

何度も何度も針を刺されるなんて、たまったものではない。

あんなもの、拷問に近い。むしろ俺を殺す気だとしか言いようがない。

健斗に点滴をされるのは、二度と御免だ。

「吉良以外、絶対、させないからな！」

彼女は注射や点滴が上手い。痛みも恐怖心も感じさせない。だからまだ、許せる。

健斗は俺の慌て様に、皮肉気な笑みを浮かべる。

従兄弟がこの顔をしている時が、一番、生き活きして見えるのは俺だけだろうか。

「随分、吉良を気に入ったようだな？」

「…お前や俺に靡かない時点で高評価。点滴の腕前も申し分ない。」

俺の事をいちいち詮索しない。その三点で、俺の看護師として文句はない」

「女を高評価とは、珍しいな？」

「だからと言って、女としての彼女と深く関わるつもりはない」

「ついでに、他の女をつまみ食いするのも止めとけ。治療の為に、

一カ月、女は抱くなよ？」

「…何で一カ月なんだ？」

「お前にはその辺が、我慢の限界だろ」

「何の我慢だよ」

「性欲」

「…人の性欲限界点を推察するの、止めてくれないか？」

まあ、無駄な体力を消耗しないようにするために、言っていることは分かる。

健斗としても、俺の不眠症が酷くなっていることを、気にはしているのだろう。

だから、体を労れと暗に言っているのだ。

全く、素直じゃない親切なアドバイスだ。

不眠症の原因は、はつきり分かっている。

分かっているけれど、俺自身でも、医者である健斗ですら、それはどうにもならない事だから。

「それでなくとも、真夜中に吉良を引っ張り出すのは避けたい。この界限は、変質者が良く出るからな」

「変質者？」

「露出狂やひったくり程度ならまだいいが、強姦事件もあるからな。夜は出来る限り俺が送迎をするが、そもいかない時がある」

今日の様な昼間ならまだ人目が多いが、夜の一人歩きは何かと危険だ。

俺のせいで吉良に何かあっても後味が悪い。

夜に来るのは、出来るだけ避ける様にするかと思うが、仕事上、飽く時間は夜が多い。

つまり、健斗は遠まわしに俺に診療に来るのを減らすよう、私生活をどうにかしろと言いたいようだ。

「昼に来るよう努力は一応するけど、期待はしないでくれよ」

「どうあっても憤む気がないのか、お前には」

「柗から女遊びをとったら、生き甲斐が無くなるんじゃないのか？」

「あんな…お前に本当に必要なのは、女でも、栄養剤の入った点滴でも、睡眠導入剤でもねえ。心身共に癒される場所だ」

健斗は笑うでもなく、怒るわけでもなく、俺に諭すように呟いた。

俺は、曖昧に笑うことしか出来なかった。

そんなもの、今までに一度だって得た事がないのだから。

6 〈吉良 side〉

第二章 金が結んだ縁

二年前、その人を初めて見た時、新手の不審者かと思った。

彼の人は、推定一八五？前後の長身で、院長よりも少し背が高い。均整の取れた骨格で、決して華奢ではない体格をしていたから、職場のあるビル内のエレベーター前で隣に並んだ時の威圧感ほむしる恐怖心に近いかもしれない。

服装はパーカーにジーパンというラフな格好。

それだけなら、ごく普通だったんだけど。

深夜の時間帯だというのに、その人は淡いグレーのサングラスをしていた。

しかも、パーカーのフードを目深に被り、伏し目がちで顔を隠している。

エレベーターと一緒に乗り合わせた時、相手は私から顔を逸らし、そわそわ落ち着かない様子だった。

エレベーターに付いている、防犯カメラの映像をちらちら見ているし。

明らかに挙動不審。

しかも、ビルは小規模でテナント数も少なくて病院がほとんど。夜に人が出入りすることは、ほとんどないはず。

それに、相手は降りる階を押ししていない。

その当時、周囲では変質者が出ると、病院に回ってきた回覧板に書いてあった。

“やだ、噂の変質者？どうしよう…院長、もうクリニックに来てる

かな……”

院長に急遽、特別患者を見るから出て来いと呼びだされて来たものの、やっぱり女の一人歩きは危険だったかな。

今日は何故だか院長が迎えに来るって言ってくれたけど、院長の所有する車は全部、スポーツカータイプでエンジン音がかなり大きい。

だから、控え目に走行したとしても、住宅街を通るとかなり近所迷惑になるから、色々気を使うので丁重にお断りをした。

でも、次回からは深夜なら絶対に院長と一緒に来よう。

で、その院長が私より先にクリニックに来ている確率は五分五分で、微妙な所。

自分は女としては長身の部類ではあるけれど、さすがに一五？近い身長差と、性別と体型の違いからくる筋力差はカバーできない。

“いざとなったら、院長から教えてもらった護身術で逃げよう……”

『抱きつかれたら、まず思いつきり足を踏みつけてやれ。油断したら、素早くかがんで野郎の腕から抜け出して、遠慮なく金的かませ。いつそ、女に変えてやるつもりで、全力で叩き潰せ。男はどいつもこれで撃沈だ』

一応上流階級の人なのに、院長はかなり品の無い事を平気で言う。『丁度そこに良い検体がいるしな』と、男性スタッフの五藤さんを指さして言ったので、彼が自分の股間を押さえて竦み上がって逃げた。

実践はしていないけど、みっちりレクチャーは受けたので、とりあえず相手を油断させてから攻撃すれば逃げ出せる……かな？ちよつと心配。

でも、そんな護身術を教えてくれる優しさがあるのに、深夜に仕

事で呼び出すのはどうにかならなかったのかしら。

高時給の甘い誘惑に乗ってしまったのは、私なのだけれど…。

だってね？

時間給、二倍の特別労働よ？

看護師のバイトの時間給は、普通のコンビニのバイト代よりずっと良いの。

その時給が深夜料の加算された状態で二倍だと、キャバクラの新人キャバ嬢の時間給より良いの。

一生を独身で生きるつもり私にとって、老後のための蓄えは少しでも多いほうがいいからって、考える間もなく即決してしまった私も…やっぱり悪い。

院長の下で働くと、予想外にお金もかかるし。

圧倒的に毎日の洋服代なのだけ…。

勿論、今回の特別業務のお給料を弾んでくれるのには理由がある感じだけど、理由は聞くなと院長に最初に念を押された。

とりあえず、呼び出されたらいつ何時だろうと『絶対に来い』というのが院長の命令。

つまり、訳ありで我が俣の通用するVIPな相手が、診療の相手だと言う事を暗に言われたことになる。

まあ、VIPの対応をするのも初めてではないし、深夜に呼び出されるのもオペ呼び出して慣れてはいるんだけど、この状況は、特別出勤初日にして、既に心が折れそう…。

って、思っているうちに、エレベーターが目的の四階で止まり、扉が開く。

開いた瞬間、相手の男の人が動く。

先に降りていく相手の動きがおかしくて、後ろ姿を見ながらとりあえずエレベーターから降りた。

不審な動きという意味の拳動のおかしさではなく、病態的なおかし。

明らかに、足元がおぼついていないし、ゆらゆらして身体が安定

していない。

お酒の匂いはしなかったから、酔っぱらっている訳ではないのに…。

“もしかして、体調が悪いのかしら？”

顔がほとんど見えなかったから、顔色が良くわからなかったけど、何となく放置してはいけないって、看護師としての勘が訴えてくる。ふらつきながら、『榊クリニック』と書かれた、私の職場の入り口でその人は止まった。

すりガラスの自動ドアは開かない。

でも、院内に電気が灯っているから、院長が先に来ているようで、内心ほっとする。

“うちのクリニックに用事？もしかして、院長の言っていた特別な患者さまって、この人？”

うちは睡眠外来が主体の心療内科のはずなんだけど…。

どう見ても、相手は救急外来で診てもらった方よさそうな感じ。

必要なら、救急搬送した方が良さそうなのでそれも頭に置いておく。

ピンポーン

壁に肘を付き、腕で体を支えるようにして彼はインターホンを押した。

『なんか用か』

ほどなく、そっけない返事が聞こえる。

“…え、その返事で良いの、院長？普通、どちら様とか聞きませんか？”

応答の対応が悪い事に動揺している私をよそに、インターホンを押した相手は、ぼそりと呟いた。

「俺、さつさと入れてくれ…」

『どこの俺様だ』

「…紫苑だ」

『ああ、知ってる。待ってる』

通話が切れた途端、紫苑と名乗った彼は壁に腕をついたまま、ゆっくりと私を振り返る。

サングラスをしても分かる、日本人離れた顔に、少し驚いた。

“流暢な日本語を喋る美形外国人だわ！”

美形は榊一族で見慣れているはずなのに、その人の整った顔は美形に興味の無い自分でも息を飲んでしまうほど綺麗。

ある意味この美貌は兇器。絢子さんや結城さんが見たら間違いない絶叫するだろうなと思いつつ、相手を観察する。

白色系人種の肌だけど、顔色はそれ以上に血の気がない蒼白状態。疲労困憊した表情で、今にも崩れ落ちてしまいそうな危うさがある。

どこかで寝かせて休ませた方が良いのは、明らか。

「何か用？」

警戒するように、その人は私を見ていた。
日本語が流暢で助かったかも。

「用があるのは、貴方ではなく此処に、です」

「…此処って…この病院？」

私が指をさした方向を見た相手は、再び胡散臭そうに私を見る。

「ええ。クリニックの職員なので」

「…職…員？」

いぶかる相手に、私はバッグから鍵を取り出して見せた。
院長が来るよりも先に、自動扉の上下に付いている鍵を開け、手動で扉を開き、立っていることも辛そうな相手を見る。

「とりあえず、待合室のソファで横になってください。顔色が悪いですよ」

何を驚いたのか、今度は相手が驚いた顔をして私を見ていた。

「…大丈夫ですか？一人で歩けますか？」

手を差し出せば、今度は凝視された。

「どうしました？歩くのも無理そうですか？」

「いや…ただ、エレベーターに乗ったら、目眩がしてきて…」

そう言いながら、私の手を取るうと一歩踏み出しかけた相手は、そのまま前のめりに倒れかかる。

“危ない！”

とつさに相手を受け止めようとしたけど、相手が無防備に勢いよく覆いかぶさるように倒れてきたので、相手が頭をぶつけないように支えつつ、そのまま一緒に座りこむように崩れ落ちる。

なんとか頑張って一緒に倒れる事は免れたけど、代償に私は自動ドアで背中をぶつけた。

「いったあ…ちょっと、大丈夫ですか？」

自分の体重プラス相手の体重分の衝撃は、結構きつい。

それでも、相手の安全を真っ先に確認してしまうのは、看護師の性。

彼がぶつけた所はなさそうだが、相手からは返答がない。

意識消失しているようだった。

慌てて、相手の手首にある動脈に触れてみる。

脈拍は規則正しく、緊張もあり良く触知出来る。

呼吸も規則的で、緊急性を要する様子もない。

ひとまず、安心。

「何やってんだ、お前ら」

ほっとしたのも束の間、そんな声が聞こえて院内に視線を向ければ、呆れたような院長が腕組をしてそこに立っていた。

§

榊紫苑との出会いは、そんな感じで、怖さと痛さに脚色されていた。

何度思い出しても、どう解釈をしても良い思い出ではなかった。おまけに、ドSで女に節操のない院長の親族だと聞かされて、げんなりした。

榊一族の女癖の悪さは良く分かっていたし、出逢いの印象最悪のせいで、良い印象がこれっぽちも浮かばなかった。

とどめに、意識を取り戻した榊紫苑の一言が、私の心のフラグを大きく『嫌い』に傾かせた。

「俺に抱きつかれるなんて、ラッキーだね？」

大丈夫かと問いかけた私に対して、「大丈夫」とも、「御免なさい」とも言わず、「ラッキーだね？」…。

人に向かって倒れて来たくせに〜っ！

私の背中はその後、二日間も打撲で痛かったのに！

痛いのを我慢して、院長と運んで処置室の寝台に乗せて、点滴までしたのに！

言うに事欠いて、「ラッキー」？

わがままと傲慢は、上流階級の特権ですか？

それとも超絶美形だからその暴挙ですか！？

特別時間給を貰ってなかったら、相手が真っ青な顔をしていなか

つたら、私は榊紫苑を迷わず殴っていたかもしれない。

それをグツと堪えて、笑顔を返したあの瞬間の自分を褒めたい。でも、「セクハラで訴えますよ？」とは、返答したけど。

「貴女、おもしろい人だね？」

何も面白いことなんて言っていないのに、榊紫苑は青灰色の双眸を細めて笑った。

こういう人種は、適当にあしらってかわして、深く関わらない方が良い。

完全に自分中心でしか物事を考えないから。

その点で、院長と榊紫苑は酷似していた。

だから、特別勤務は付かず離れず、仕事だけを淡々とこなそうと決めた。

その後、榊紫苑も診察に来る度に、顔を見ればあいさつ代わりに一言、口説き文句を言うけれど、それ以外は私が問いかけなければ何も言ってはこなかった。

あからさまに、自分に踏み込まれたくないというオーラも出していたし、いつもピリピリしていた。

気難しい性格なのか、人間が嫌いなのか、近寄りがたい人間ではあった。

彼の特別診療に立ち会うようになって二年、会話らしい会話なんて、ほとんどなかったから、この間のちょっとした会話は、ある意味、画期的な出来事だった。

「吉良、明後日の午後、あいつが来るから準備しとけ」

「…え？」

月曜日の午前診療が終わり、休憩室で院長と向かい合うようにお弁当を食べていた私は、耳を疑う。

榊紫苑が来たのは、昨日。

最初はひと月に一度くらいだったのに、最近は週に一度のペースに狭まっている。

「診察…じゃないですよね？」

「点滴だ」

内科の病院ではないので、こつも頻回に点滴をするのは、レセプト的に色々問題が出るのではないだろうかと思っただけねど…。

「そんなに体調が悪いなら、榊の母体病院に受診した方が良いんじゃないですか？」

「お前が良いんだと」

ししとうの天ぷらをつまんでいる箸で、院長は私を指さす。

「院長、行儀悪いです」

「お前、突っ込む所、そこか？」

「ほかに何があるんですか」

「…紫苑は、お前以外に点滴させたくねえと言っている」

ししとうを頬張りながら、院長は鼻で笑う。

そして、人の弁当箱からだし巻き卵を至極当然のようにかすめ取る。

「ちょっと院長！人のおかずに、手をつけないでください！」

思わず立ち上がって、抗議した私に、院長は出前でとった天ぷらそば定食のえび天をつまんで、私の弁当箱に乗せる。

「文句あるか」

「うっ…ないです」

本当は、ちゃんと院長用で用意しただし巻き卵を全部食べているから、コレステロール値が上がるから駄目ですって、言いたかったけど。

お弁当箱からはみ出すくらい大きな海老が、文句を言うなよと院長の代わりに無言で主張している。

文句なんて言えない…だって、海老、大好きなんだものっ！

上手に口止めされて腰を下ろした私は、勝ち誇ったように私の弁当箱に乗る海老の天ぷらと、院長を交互に見る。

「院長、私の目から見て…榊さんの体調が良くなっているようには、どうしてもみえないんですけど」

「俺にも、悪化しているようにしか見えん」

「治療、上手くいってないんですか？」

「正直、お手上げだ」

院長にしては珍しく、気弱な発言だった。

普段の人間性は大いに問題ありだけど、医者として院長は有能だったりする。診療時間帯の患者様に対する院長の態度は、詐欺師。

誰ですか、その優しい声と口調で聖人君主の様な微笑みを浮かべる人は！って、素の院長を知っている人は、誰しも一度は驚くの。

だから女性の患者様が多いのは否めない。

そんな擬態的な変化もさることながら、幼少期から医者としての英才教育を受けていると豪語するだけあって、大方の患者は治療によって、快方に向かう。

多少の憎悪はあっても軽快するし、著しく悪化するようなことはほばない。

今回の様に、目に見えて悪化の一途を辿っているのが分かる事自体がない。

院長が成す術なしだというような事態は、今まで一度もない。

「本来なら、仕事を休ませたい所だ」

「榊さんの仕事、そんなに大変なんですか？」

「気になるのか？」

「ええ…まあ、多少」

榊グループには一切関与していない仕事だとは聞いているけど、来る度に顔に疲労の色が濃いの見れば、いくら嫌いな相手でも気にはなる。

「俺はてつきり、紫苑のことを嫌ってるのかと思ったが？」

「仕事中、表情とか行動に出てました？」

「いいや。ただ、紫苑が来る話をした時は、顔に出る」

無意識に顔に出るくらいだから、露骨なんだろうなあ。

仕事中に出ないように気をつけようと、自分に言い聞かせる。

「嫌いってのは、否定しないのか？」

「しませんよ。でも、それは仕事とは関係ありません」

自分の主観的感情と、仕事は別物。

患者として相手が目の前に立つ以上、看護師としてやるべきことはやる。

それが、私のモットーでもあるし。

「患者さまが苦しむのは、やっぱり嫌ですから…どうにかならぬかなあと」

「良くなりや、顔を突き合わす必要もないからな」

嫌みの様に言い放った院長を、私は軽く睨む。

院長は首をすくめる。

「あいつが眠れるようになるには、あいつ自身が癒されねえとなあ」

「ストレスが溜まりやすい仕事なんですか？」

「仕事をしない方が、ストレスなんだよ」

「ワーカーホリック（仕事中毒者）ですか？」

「いや。仕事で限界まで疲弊しないと眠れないだけだ。だからある種、仕事の虫だな」

「スポーツとか趣味で身体を動かすのはどうですか？」

「色々させたが、思うようには効果が出なかった。仕事がない時は過緊張状態になって、睡眠導入剤も安定剤も全く効果がない。恋人でもいればまた違うんだろうが」

「いないんですか？モテそうですけど？」

「お前、仕事で自分を顧みない男と、付き合いたいのか？」

「昔なら、厭だと思えます」

「今なら良いのか？」

「恋愛自体を捨てた身なので、判断できません」

恋愛なんてもう何年してないだろう。

二〇代前半は、院長と美奈先生に散々邪魔されて、恋人と長続きの記憶がない。

二〇代半ばになって、両親のことで人間不信になって、恋愛したいとも思わなくなっちゃったし。

いま最大の関心は、いかに老後の資金を貯めて、お一人様の生活を有意義かつ安定に送れるようにするか。

心が枯れているなあって、我ながら思う。

「若い女が、人生の大半の喜びを捨てるな」

呆れたように院長は、ため息をつく。

人の恋愛を潰しまくった人間の言葉とは、とても思えない。

しかも、人生の大半って、院長はどれだけ恋愛に重きを置いているのだろう。

「残念ながら、私の老後に必要なのは、愛じゃなくてお金ですから」

「どつせなら、欲張って二つ手に入れる」

「贅沢な無茶振りですね」

心配されているのか、邪魔されているのか、正直分からなくて、
思わず苦笑いしてしまった。

「…で、話がそれましたけど…。榊さんは、人に弱みを見せたがらない性格ですから、恋人がいても、あまり現状と変らない気がしますけど」

「どうして、紫苑の性格が分かった？そんなに、話もしてないだろ」「点滴をしている時に、もしかしてそうかなって」

「点滴？」

「榊さん、くけつたい駆血帯を巻いた腕に必要以上に力が入っているし、針を刺した後は、異常なくらい掌に汗をかいているんです」

「それがどうした」

「注射や点滴が嫌いな人に、良く見られる特徴なんです。でも榊さんは顔色一つ、態度も全く変えずに表面上は平静を装っていました」「それだけで判断するのは早計だろ」

「やせ我慢は、私が知る榊一族全員に共通する性格でもありますから」

不意に、院長が唇の端を緩める。

「お前に読み取られるようじゃ、榊の一族も脇が甘い」

自分が貶されたのか、判断に困る微妙な言葉だった。

あえて何も言わない方が良い気がして、再び箸を動かしはじめた。院長も、何も言わず同じように食事を再開する。

静寂の中、お弁当を食べながら、私はぼんやりと考えていた。

院長が、榊紫苑の話をつつもはぐらかす理由を。

恐らく、意図的になされているそれは、私が特別時間給で働く理

由につながっているのだろうと思う。

だからこの二年の間、深く話を掘り下げて、院長に聞くような真似もしてこなかった。

榊紫苑に直に問うことも、意図的に避けてはきた。

良いアルバイトを失うのが、厭だっというのが大きな理由だけど、それ以上に、深入りするなど、彼らに見えない境界線がある様に感じていたから。

榊紫苑に対する第一印象もあつたから、余計に触れてはこなかったけど。

でも、最近の榊紫苑の様子を見てみると、それではいけないような気もしてきた。

少しやつれているし、顔色もずっと悪いまま。

彼の治療は、院長にしては珍しく思うように進んでいない。

普段なら、常勤で来ているカウンセラーさんと連携もするのだけれど、時間外にこっそりやってくる榊紫苑にはそれも出来ない。

駄目もとで、一度、榊紫苑と話をしてみようかな。

彼が心を開いて話をするとは、到底思えないけれど。やらないよりはまし。

「…どうした」

院長の声に、はっとして顔を上げる。

お弁当を見つめたまま、手を止めていたらしい。

「なに海老天と見つめあつてんだ」

「いえ…ダイエットの為に衣を外して食べるか、欲望に任せてそのまま食べようか迷ってました」

院長に言えば、余計なことをするなって言われそうな気がして、あえてそうはぐらかす。

「遠慮なく欲望に溺れる。ダイエットなんざ考えなくても、必然的に痩せるように仕事を振ってやる」

「…鬼ですね」

「愛だと言え。うちの社員規定、忘れた訳じゃないだろうな？」

その言葉に、うつつとなる。

うちのクリニックは院長の独断と偏見で、男女問わず職員は、かなり容姿の綺麗な人がそろっている。

私の容姿は例外としても、美人どころが揃っているし…：どこの社員規定に、個人個人に対してスリーサイズのアウトラインを設ける所がありますか？

妊婦さんになった場合は除外だけど、規定を超えるサイズになったらクビとか、あり得ない。

しかも、スリーサイズを見ただけで言い当てる院長に、偽りの自己申告など無意味だし。

院長曰く、体形変化は日々の自己管理ができていくか否かを、視覚的に簡潔に判断する事が出来るから…らしい。

容姿に対するこだわりは強いけれど、仕事能力の無い外見だけのナルシストな人材は絶対に入れないから、院長の審美眼は侮れない。痩せすぎも「醜い」と言われるので、ベストバランスの維持は難しい。それでも体型維持を意識的に努めているせいかな、職員はほぼ風邪ひとつ引かないから、健康管理にも役立つているみたい。侮れないわ、院長…。

「雑用係のお前に抜けられると、俺が面倒だからな」

「…『雑用係』を強調して言うの、止めてくださいよね」

「わがままな女だな…ともかく、明後日の午後は残れよ？」

「分かりました」

わがままは貴方の専売特許でしょ？と、言いたいのを飲みこんで、私は海老天を箸でつまみ、大きな口でかじりついた。

11 〈紫苑side〉

第三章 二人の俺

「お、伊織じゃ〜ん。久しぶり」

雑誌の表紙撮影が終わった後、控室に戻ろうとスタジオの廊下を歩いていた俺を、神埼亮かんざきりょうが呼びとめた。

亮は中性的な顔立ちで、しかも童顔。体型は華奢で、身長は平均値。

一見すると儂げな印象の男だが、ロックバンド『belladoペラドonna』のボーカルをやっている。

見た目に反して、性格も歌い方も、バンド活動もかなりアグレッシブ。

同じ事務所に所属している縁もあって、俺の二つ年上だが、良くつるんで遊ぶ仲間でもある。

「亮？何でお前が此処に？」

上坂伊織の時は、榊紫苑の時と違い、自然と言葉づかいかいや声音が変わるから、我ながら不思議だ。

「今度ソロで新曲出すから、これからそのインタビューと雑誌用の撮影…って、お前、なんか痩せたか？」

亮が不思議そうに俺を覗きこむ。

最近、食事も満足にしていけないから、体重がかなり落ちた。けど、それを人に言うことはない。

「ああ、すこし体を絞りこんでるからな」

「それなら良いけど。最近お前付き合い悪いから、調子悪いのかと思ってるさ」

「違う。小さい仕事が多くて、時間が合わないだけだ」

「じゃ、伊織はいつ暇だ？」

「そうだな…今日はこのまま私用があるから無理だな。一週間くらいすれば、夜は暇になる。何かあるのか？」

「あ？俺の連れの仲間に、お前のファンって女がいるんだ。そいつがお前に会わせろってうるさくてな」

思わず、失笑が零れる。

つまり、亮とは何のかかわりもない他人ってことか。

亮の表情からして、乗り気ではないのがわかる。

俺も同じように亮を紹介しろと言われたこともあるし、何となく、亮の今の気持ちは分かる。

「亮、俺の事ちゃんと言ってるだろうな？」

「遊びでしか付き合わねえし、二度はねえって？言ってるぜ？それでも良いからとか、何遍断ってもしつこいから、マジウザくて。」

野郎ならぶん殴れるのによ」

亮の直接的な知り合いなら、顔を立てて会うのは構わないのだが。

正直、初めからつまみ食いされることを希望して、礼儀知らずに強引に会わせるとか言う女は、下手に断っても、引き受けても面倒くさい。

だから亮も、断りつつも、俺に話を持ってきたのだろう。

「俺に彼女がいるから、無理って言っというて」

その一言に、亮の二重の双眸が驚きに見開かれる。

「お前が、女を一人に絞り込む？あり得ねえ、ってか、信用されねえだろ」

笑いながらバンバンと俺の腕を叩く亮に、俺は首をすくめる。
そんなにもあり得ないことかと、ちょっと自問してみるが、確かに不似合いな気はする。

俺が女に本気になるなんて。

だが、それを亮に見透かされているのは、癪に障る。

「だいたい、本命の女なんていないだろ」

「俺の心を二年間、ずっと占めている女なら居るぞ」

「…うっそ！」

大げさに驚いて見せた亮に、俺は鼻で笑う。

こいつをからかうと、おもしろいから好きだ。

もっとも、俺は嘘を言っではない。

ずっと気になっている女性ならいる。

恋愛感情ではないけれど。

「何、片思い？プラトニック？お前が？マジか！お赤飯炊くか！」

なんだ、そのお赤飯って。

祝い事レベルの話か？

「よし、分かった！女の方は断ってやるから、その話、今度、じっくり聞かせるや。赤飯食べながら聞いてやっから！」

いや、何も分かってないだろ、亮。

しかも、赤飯からいい加減、話を逸らせ。

そんなに赤飯が食べたいのか、お前。

そう突っ込みたかったが、あまりに純粹に喜んでいる亮がおもしろくて、そのまま話を否定もせず、今度、食事をする約束をして別れた。

§

マネージャーの熊井くまいが運転する車の後部座席に、俺は座っていた。スモークガラスが張られた車内で、俺はカラーコンタクトレンズを外し、スーツからラフな格好に着替えを済ませた。髪型も少し崩して、服装に合わせる。

「伊織いおり、その恰好すると、全然別人だなあ」

ルームミラーで俺の姿を確認した熊井が、鏡越しに人好きのする笑みを浮かべる。

学生時代、レスリングをしていた熊井は俺と同じくらいの身長に、かなり厳つくて怖い風体だが、気が優しく気の良くつくマメな三十路男だ。

「目の色が違うだけで、結構印象って変わるし」

「見慣れないからだろ」

「それにしたって、よく化けてる」

「上坂伊織かみさかいよりが医者通いなんて、記事は嫌だからな」

仕事中は、ヘイゼルカラーのコンタクトを入れているが、俺の本来の瞳の色は、ブルーアッシュ。今はカラーコンタクトを外している。

髪もダークブラウンに染めているが、地毛はブロンド。

眉や睫毛も合わせて染めるのが、結構面倒くさい。

仕事がらみだからそうも言っていられなくて渋々、マメに手入れはしている。

髪の色だけは、個人的な外出するときにはウィッグを使ってみたりする。

変装気分で、これはこれで楽しめる。

「こうして見ると、伊織に似た外国人って感じだな」

「クマモカラコンすれば？その体格なら、外国人に間違えられるぞ」

「純日本人顔の俺がそんなものをして、気持ち悪いだけだろ」

「意外と似合うかもよ？」

「いや、遠慮しとくよ」

熊井は力なく笑いながらそう答え、しばらく無言で車を運転する。

「しかし、今の医者でいいのか？伊織、全然良くなってないだろ？」

「…良くなってないのは、十年前から同じだ。今に始まったことじゃない」

もつとも、熊井が俺のマネージャーになったのは四年前で、それより以前のことを熊井は知らない。

昔は私生活からして荒み過ぎていたから、これでも随分、大人しくなつてまともになつた方だ。

「他の医者は悪化しかなかった。今の所は現状維持できる上に、点滴が上手い看護師がいるからそれで良い」

「まあ、腕が痣だらけにならなくなっただけ、ましな気はするけど…俺は、あんまり不眠症の治療つてのは分からないからなあ…」

何か変な病気かと思われるくらい、腕に痣を作っていた頃の俺を

知る熊井は、複雑な顔をした。

「それに古い付き合いの医者だ。俺の事を口外する真似もしないし、何かと融通も利くから楽なんだよ」

「お前が良いって言うなら、良いけど…無理するなよ？」

「大丈夫だ…お前こそ、俺の体調気遣って、こつそり仕事量を減らしてるだろ。上から言われないか？」

「伊織がぶっ倒れたら、話にならないだろ？その辺は、上手く上に話をしてあるから。とりあえず元気になってくれよ」

「…努力はするよ」

努力でどうにかなるのなら、医者なんていらないけどな。

ここ十年、心地よく眠れた記憶はない。

疲れきって、意識を失うようにわずかに眠るか、浅い眠りで訳のわからない夢をエンドレスで見続けてぐったりするか。

眠ることが苦痛で仕方がない。

けれど眠れないと、記憶力が落ちる。

仕事に影響するのが、不眠の最大の難点だ。

俺は、ビルの群生する狭い空を、何となく見上げる。

久しぶりに見る真昼の太陽は、相変わらず主義主張の激しい熱さをまき散らす。

夏らしい夏を過ごさなかった俺に、まるで夏を味わえとばかりにジリジリ照りつけてくるようで、うつつうつしい。

暑苦しいのは嫌いだ。

暦の上では初秋に差し掛かったのだから、暑さも太陽も大人しくなれば良いのだ。

思わず舌打ちし、その音ではつとなる。

「…マジか」

「どつした？」

「なんでもない」

額を抑えながら、深いため息が漏れる。

くだらない事で苛立った自分自身に、呆れた。

健斗の経営する病院から少し離れた所で車を降り、俺は時間つぶしの為に近くにあったコンビニに入った。

まだ一三時少し前。

健斗と約束をした時間には、まだ時間がある。

今日は平日だ。あまり早く行つて、余計な職員と顔を会わせたくなかったから、何を買う訳でもなく、時間つぶしで少し店内を見て回る。

こういった場所にすら滅多に入ることはないから、見ているだけでもわりと面白い。

最近は、ATMがコンビニの中にあるとか、栄養ドリンクが売られているとか、弁当もわりと種類が豊富なんだとか、俺がCMに出た事のある菓子があるとか…

そんなことを思いながらぶらぶらする。

“あれ…”

ペットボトルの陳列してある冷蔵庫の前に、見慣れた白衣の後姿がある。

すらつとした長身に、ショートヘア。

俺はそつと、相手に近づいてみる。

ガラス扉越しに映る相手の顔を見て、当人だと確信する。

彼女は何やら真剣に、陳列されたペットボトルを眺めている。

「不経済だわ…」

ぼそりと呟いた彼女の隣に、黙って立つと、相手は不思議そうに俺を見上げる。

「わっ、さ、榊さん！何で…」

一歩身を引いて、心底驚いた顔をする吉良に、俺も驚く。
そこまで驚くようなことなのか？

「…何が不経済なの？」

「コンビニ二つて、スーパーと比べると、どうしても値段が高いんですよね…」

「そう？」

俺はコンビニでも、スーパーでも買い物をほとんどしないから、どう違うかなんてさっぱりわからない。

「で、何を買うつもりだったの？」

「院長の食後のコーヒーを点てるためのお水です。お水の銘柄を変えると、途端に機嫌が悪くなるので…」

そう言いながら、ガラス張りの大きな扉を開き、二リットル入りのミネラルウォーターを手にとって、買い物籠に入れる。

「榊さんは何を買われるんですか？」

「俺は良いの。時間つぶしだから」
「時間潰し？」

「約束した時間より、ずいぶん早く仕事が終わったから」
「そうなんですか…お昼ご飯はもう食べられました？」

「あ…まだだけど」

吉良は、不意に破顔する。

「よかった。院長に言われて、お弁当を三人分作ってきてたんです」

普通、単なる看護師が医者に言われたからって、そんな物を作って持ってくることなんてないよな？

健斗にいたっては、そもそも女の手料理は嫌いなタイプだ。

俺が知る奴の歴代の彼女にすら、手料理を作らせない。

作られても、絶対に食べない男だ。

一体、健斗と吉良の関係はどうなっているのだろう。

この間は、否定していたけど、どこか怪しい。

不倫していようが恋愛していようが、特殊な関係だろうが、俺には関係の無い話だから、普段はあまり他人に対して興味がわかないけど、吉良のことはどうしてか気になる。

俺の周りに居た女とは、どこか違うせいかもしれない。

「たぶん、榊さんは何も食べずにくるはずだし、自分は忙しくて外で食べる時間もないからって、ほぼ脅迫的…あ、いえ、何でもありません」

レジへと歩きながら、俺に説明していた吉良は、途中で言葉を濁した。

困った顔をしているあたり、本当に脅迫まがいな命じられたのだろう。

レジで会計を済ませ、長財布に小銭とレシートをしまっている吉良を見ながら、俺はレジ袋に入れられたペットボトルを手にとって、先にコンビニを後にする。

その後を、吉良が慌てて追いかけてきた。

「榊さん、すいません。荷物持ちます」

手を差し出してきた吉良に、俺は立ち止り、手をのばして吉良のその細い手を握る。

吉良が一瞬、その握った手を見て固まり、俺を見上げてきた。

「これは、何の冗談でしょう?」

「女の人に荷物を持たせるなんて、男のことじゃないでしょ」

「そうじゃなくて…」

つながった手を持ち上げ、吉良はそれを強調するように振る。彼女の表情が、どことなく険しい。

「これです、これ」

「なに？指をからませる、恋人つなぎの方が良かった？」

「…違います。どうして、手を繋ぐんですか？」

「出された手を、手ぶらで返すのも何だから」

呆れたような顔をして、吉良は俺を見る。

「その発想が分かりませんから。素直に手を離して、荷物を下さい」

「やだ」

「…その返事は、私が嫌です」

この俺と手を繋いでいるのに嫌だなんて、一体、吉良の感性はどちらを向いているのだろうか。

女性受けは良いと自負しているだけに、吉良のこの反応は俺の自尊心を傷つける。

「っ、ちょっと、榊さん!？」

俺の手を一生懸命振りほどこうとする吉良の手を引くように、俺は歩き出す。

初めは少しだけからかって遊ぶつもりだったけど、気分が変わった。

照れるか、少しでも嬉しそうな顔をしたら、すぐに手を離すつもりだったけど、露骨に嫌そうな顔をされると、意地でも離したくない。

「さ、榊さん、ほんとに困ります…うわっ、まずい」

吉良は手をつないだ恰好のまま、不意に俺の背後に隠れて止まる。俺は彼女のせいで後ろに引っ張られ、吉良とぶつかるようにして立ち止る。

俺に背を預けるようにした吉良が、「だから、困るって言ったのに…」と、力なく呟いている。

何事かと思い前方を見れば、あんぐりと口を開けた女がいる。年齢は三十代半ば、一般人としては文句なしに洗練された華やかな容姿をしている。

「…誰？」

「同僚です…」

吉良が答えると同時に、少し先にいた女性が駆けてくる。女性はものすごい勢いで駆け寄り、俺の背後に回り込む。

「あげはちゃん、何で隠れてるのよっ!」

“あげは? ああ、名前か”

期せず吉良の名前を知った俺は、吉良に向き直る。手は繋いだまま。

「やだもう、彼氏と制服デートなんて、マニアックすぎよあ〜」

「あ、絢子さん、痛い…」

絢子という女性に、肩をばしばしと叩かれ、吉良は困った顔をす
る。

「彼氏なんていないって言ったのに、あげはちゃんだったら」

「あの…絢子さん…この人…彼氏じゃ…」

「またまたあ！こんなイケメンと、手つなぎデートしながら何言っ
てるの。ほれ、お姉さまに紹介してごらんなさい」

何というか、あまり人の話を聞かない感じが、俺の苦手な人に似
ている。

俺は、相手に愛想よく笑みを浮かべる。すると、相手は俺の顔を
まじまじと凝視する。

「…貴方、上坂伊織に似てるわね？」

一瞬、背筋が冷える。

そう言えば、健斗が『受付の絢子』という女性が、俺のファンだ
と言っていたな。

多分、この女性がそうなのだろう。
とりあえず、かわさなくては。

「What? Say it again」

首をかしげて尋ねると、一瞬にして相手は固まる。

おおよその日本人は、流暢な英語で問われると思考回路が停止す
る。

「絢子さん、この人、日本語が通じないみたいで、手を離してくれ
ないの…助けて？」

俺に話を合わせてはくれたけど、本当にこの状況を何とかしてほしいのか、吉良の言葉は相手に縋る様だった。

「む、無理無理無理っ！失礼しますう」

「あ、絢子さん……」

勢いよく踵を返した相手は、猛ダツシユで走り去った。
思惑通りだ。

悲壮感たつぷりの表情で相手の後ろ姿を見送っていた吉良は、ちらりと俺の方を見る。

物言いたげな表情で俺を見た後、深いため息と共に視線を逸らす。

「はぁ…絶対、絢子さんに勘違いされたわ……」

「俺が相手じゃ不服？」

「不服以前に、セクハラですから」

「手を繋いだけだけ？」

「セクハラって言うのは、受けた側がそう感じたら、確定するんです」

つまり、俺にこうされるのは不愉快だと言う訳だ。

嫌がられているにも関わらず、俺は何故だか愉快的な気分だった。

記憶のどこを辿っても、女性から拒まれた記憶がない。

こういふ吉良の反応は、新鮮でいい。

「いい加減に、離してくれませんか？」

「嫌だつて言ったら？」

刹那、クリニツクのある方に顔を向けていた吉良の表情が歪む。

口角を緩やかに釣り上げたそれは、いつも仕事で見せる人好きの
する微笑み。

「…院長の点滴、痛いでしょうねえ…」

ぼそりと呟かれた言葉に、思わず俺は吉良から手を離れた。

吉良はそのまま一人で歩きだす。

“なんだ？まさか、俺が注射苦手だつて、気付いているのか？”

単に、注射の下手な健斗に点滴をさせようと目論んでいるだけだ
ろうか。

いずれにしても、ただの牽制にしては悪意を感じる。

心臓が早鐘を打つて、嫌な汗が止まらない。

これまでの優しく人当たりの良い印象など、一瞬にして消し飛ん
だ。

考えてみれば、わがままな健斗の下で屈せず働けるくらいだけか
ら、単に優しいだけの弱い人間ではないはずだ。

“これだから女は怖い”

色々な意味で、吉良は俺の予想を裏切ってくれる。

「榊さん。水を早く持って帰らないと、院長に叱られてしまうんですけど」

少し先で足をとめた吉良が、俺を振り返る。

普段と変わらぬ表情で。

彼女の手は、俺に差し伸べられる。

それは、レジ袋を渡せと言っているのだろう。

吉良も意外と、頑固な性格をしているが、俺も俺の信念を曲げるつもりはない。

俺はそのまま歩き出し、立ち止まっている吉良を追い越していく。

「あ、ちょっと、榊さん！」

少し大股で歩けば、歩幅の少ない吉良が少し早歩きで付いてくる。

「袋、持ちます。貴方に荷物を持たせたら、院長に叱られます」

「そう言うのなら、賭けてみる？」

歩きながら吉良を見れば、彼女は不思議そうな顔をしている。

「賭ける？」

「俺は、俺が荷物を持っていても、健斗が文句を言わない事に賭ける。吉良さんの予想が当たっていたら、俺は吉良さんの言うことを一つだけ、聞くよ」

「そんな一方的」

「勿論、俺の予想が正しければ、吉良さんは俺の言うこと、一つ聞いてよ？」

「…それって結局、榊さんが荷物を持つ事になりませんか？」

健斗も女に荷物を持たせるような真似はしない。この賭けは必然的に俺の勝ちだけど、吉良は単純にまだ俺が荷物を持つことにこだわっている。

自然に、自分の顔に苦笑いが浮かぶのがわかる。

俺の周りにいる女は、大抵、男に持ち上げられることに慣れていて、男を道具程度にしか考えていない。

荷物を持たせることになど、一抹の疑問も浮かべない。

吉良はなんとというか、男への甘え方を知らない。

男慣れしていないのか、可愛げのない性格なのか…それとも。

「健斗に怒られるのが嫌？」

「そうではなくて…顔色の悪い人に荷物を持たせるのは、看護師としてはちよつと…それに、院長は貴方に荷物を持たせた事を叱ると思いますから、たぶん、私の方が賭けに勝つと思います」

言い辛そうに、吉良は答えた。

言われて俺は自分の顔に触れる。

「俺、顔色悪い？」

「…もしかして、自覚ないんですか？」

つまり顔色が悪いから、持たせるのは嫌。そして、自分が賭けに勝つから嫌。という構図なのか。

“なんかムカつくな”

何故ムカついたのでか、自分でも分からず首をひねる。

「あー！」

吉良が思わず声を上げ、俺は吉良の視線の先を見る。いつの間にか、俺たちは吉良の勤め先のあるビル近くにいた。ビルの入り口で、俺たちを見ている男の姿がある。紳士的な服装をしているのに、煙草を啜えながら不機嫌丸出しの従兄弟は、さながら暴力企業の若頭の居住まいだ。

「遅い！俺のコーヒーを早く淹れろ」

吉良を見るなり、コーヒー中毒の健斗がそう言い放てば、吉良は苦笑する。

「コーヒーがないと、院長、いつもこんな感じなんですよ」

そう言えば、昔健斗が一人暮らしをしていたマンションに居候した時も、コーヒー切れを起こすと良くキレていた。

健斗は、キレると口より手が出る。そのせいで、それで何度か俺も健斗と殴り合いの喧嘩になった覚えがある。

今は文句を言う程度なのだから、健斗にしたら随分良心的なキレ方だ。

男と女でキレ方が違うのは、流石、フェミニストと言った所だ。

「あれならまだマシなレベルだよ。酷くならないうちに、コーヒー飲ませてやって」

「荷物、運んで下さってありがとうございました」

吉良はそう言って、俺が差し出した手からコンビニの袋を受け取って、ビルの中へと小走りで入っていく。

健斗は携帯灰皿に煙草を押しつけて火を消し、近付いた俺を見る。

「そんな顔色をしてる時くらい、吉良に荷物を持たせとけ」

「は？健斗、熱でもあるのか？」

「莫迦か、お前は。少しは自分の体調くらい自覚しろ」

従兄弟にそう言われて、睨みつけられた。

まさかの俺叱られで、俺は自分が提案した賭けに負けた。

第四章 美形との食事はろくでもない

カウンセリಂಗルームの机上に広げられた重箱。

二人掛け用のテーブルセットに、椅子を一つ持ち込み、小さめの正方形のテーブルいっぱいに広げられた三段のお重。

中身は、量より数、数より見た目、見た目より味の院長の要望で、和食が中心。

里芋の煮物、お浸し、ひじきの煮つけ、だし巻き卵等々…普通の家庭料理ばかりで、自分で言うのも何だけど地味。

でも、今回は珍しく院長から海老フライ、唐揚げ、ハンバーグのリクエストもされたので、しっかり納めてみた。

ご飯はフリカケ類をまぶすと、「米の味を殺す気か」と、院長からクレームが来るけれど、うす塩味のおにぎりと、紫蘇のおにぎりを半分ずつにした。

ピクニック用の紙皿と割り箸で、すこし色気はないけれど、その代わりに部屋には稀有な二人の美形男子がいる。

私の両隣、左側には院長、右側には榊紫苑。知らない人が見れば両手に花状態。

その見目だけは文句なしに優秀な男二人は、何故だか子供みたいな喧嘩しながらご飯を食べている…。

「お前、ただし巻き卵食べやがったな」

「ケチくさい…まだたくさんあるじゃないか」

「いいや、減る!」

「…どれだけ卵が好きなの、健斗」

「お前は、他のもんでも食ってる。ニンジンとか、ニンジンとか、ニンジンとか」

「良い大人が、嫌いなものを俺に押し付けないでよ」

「オレンジ色の悪魔を、俺の皿に入れるな！」

「ちょ、俺の皿に移すなよ！俺だって、ニンジン嫌いなんだよっ！」

私は二人のやり取りを聞きながら、緑茶を淹れた急須を持ち、三人分の湯飲みにお茶のおかわりを注いでいく。

“大きな子供ね、これじゃ…”

四捨五入したら四十代の男と、二十五を迎えるであろう男の口喧嘩とはとても思えない。

しかも、黙って立っていれば十人中九人は見惚れる美形の男なのに。

全力で人参の擦り付け合いをするなら、そつと重箱に残しておいてくれればいいのに、どうあっても相手に片付けさせようとする気が双方にありありと見える。

それなりに付き合いは長いけど、こんなに子供っぽい院長を見たのは、初めてかも。

榊紫苑も、なんだか楽しそう。

顔色が悪いから食欲もないかと思っただけど、わりと箸の進みは良くてすこしほつとする。

お茶を配りながら、そんなことを考えていた。

既に、重箱は殆ど空。

気持良いくらい綺麗に。

作りがいのある食べ方をしてくれる人たちに、無意識に笑みがこぼれた。

もし兄弟がいたら、こんな感じで、ご飯とか食べてたのかな。

私は一人っ子で、共働きだった両親とも一緒に食卓を囲んでご飯をしたっていう記憶もあんまりない。親戚とも疎遠だったから、賑やかな食事をしている目の前の二人のやり取りが羨ましく思える。話しあえる兄弟がいたら…私と両親の仲も、もっと違う形になっていたかもしれない。

でも、それは全て仮定の話。

考えても、今の現実が変わるものじゃないし…。

「…吉良さん？」

呼ばれて、我に返ると榊紫苑と院長が私を見ていた。どうしたんだろう。

「…何か？」

「泣きそうな顔しているよ？」

言われた意味がわからなくて、私は首をひねる。

「…そうですか？」

二人は同時に頷く。

「そんな、息ぴったりで肯定しないでください」

何を思ったか院長は、箸でだし巻き卵をはさんで持ち上げ、私の前に出す。

「口開ける」

「…はい？」

「泣きそうな顔をするくらいなら、欲しいと、はっきり言えば良い

だろう」

「違いますよ…。それは、院長が遠慮なく食べてください」

卵焼きを物欲しそうに見ていた訳ではないのに、院長は手を下げず、険しい表情のまま私を見ている。

「男が一度、女の前に出したものを下げられるか。さっさと口を開ける。皿は出すなよ」

つまり、私の意思に関係なく、このまま口に入れるつもりらしい。恋人でもないのに、そんな真似なんて無理！恋人でも恥ずかしくないで死んじゃう。

でも、そんな動揺を悟られると院長に遊ばれるので、努めて冷静に返答をする。

「…新手の嫌がらせですか？」

「俺に対するお前の愛を、試してやっているんだ」

愛とか、意味が分かりませんが、院長…。

絶対に確信犯の嫌がらせだと分かり、私はちらりと榊紫苑を見るものすごく怪訝そうな顔をして、私を見つめている。

この表情は、一〇〇%誤解している顔だわ。

「なに、やっぱり付き合ってるの?」

「違います…」

言いかけた時、立ち上がった院長に突然、左側に顔を向けられる。何事かと思えば、口の中にだし巻き卵が入った。

「!!!!!!」

私の顎を捉えていた院長がニヤリとした瞬間、そのまま院長の顔が近付いてくる。

かわす間も無いまま、院長は私が啜っていた卵焼きに齧りつく。

唇に触れるか触れないかの、際どい所まで近付いていた院長は、すぐに離れる。

だし巻き卵の大半を奪い去って。

あり得ない事態に、体と思考が凍りつく。

院長は何事もないかのように、奪い取った戦利品を食べ、淫靡に笑う。

あんぐりと開いた私の口から、ポロっと残された卵焼きが落ちる。

「勿体ないことするな」

なんなの、今日の院長は！
いくらなんでも、嫌がらせの度が過ぎている。

“こ、こんな恥ずかしい真似、よくも！”

その場から立ち上がった私は、力の限り叫んだ。

「セクハラっ！変態っ！エロ親父っ！何考えてるんですかーっ！」

「つれない事を言うな、honey」

「誰がhoneyですかっ！人で遊ぶの止めてくださいって、前から言ってるじゃないですかあっ！」

「真っ赤な顔して、初だな」

私の怒りなんてまるで歯牙にもかけず、鬼院長は不敵に笑い、榊紫苑は何を思ったか大爆笑していた。

§

「はあ…」

何度目のため息だろう。

給湯室で紅茶を入れていた私の口から出るのは、もうため息しかなかった。

あんな嫌がらせをするなんて、水を買いに行った帰りが遅かったことを、院長は相当根に持っているに違いない。

だからと言って、あれはあり得ない。

「…はあ」

「吉良さん、そんなに溜息つくと、幸せが逃げるよ?」

鼻梁に香水の香りが届いたと同時に、不意に右の耳元で声が出て、慌てて目の前のティーカップから声のする方に顔を上げる。

吐息がかかるほど近くに、榊紫苑の綺麗な顔がある。

「なっ!」

思わず仰け反れば、手に持っていたチャイナ・ボーン紅茶ティーポットを危うく落としそうになる。

ナルミ製の、ミラノのティーポット。

“一つ二万円弱!”

危ない以前に、物の値段が脳裏をよぎり、一瞬にして血の気が引く。

私の掌からティーポットが零れ落ちるより早く、私の両脇から腕が伸びて、ティーポットは私の手ごと大きな男の掌で支えられる。

中身は既にティーカップの中に注がれていて、零れることも、火傷することも無かった。

「危ないよ?」

「良かったあ…ありがとうございます。二万円が昇天する所でした」

とりあえずティーポットが死守され、ほっと安堵した。

ティーポットをチェックして、破損もなかったので弁償と言う大事には至らない。

良かった。

それにしても、今日は何なの?厄日なの?

イケメンに絡まれても、正直、あまり嬉しくはない。好みじゃないから。

彼氏がいた頃は、同僚や院長夫妻からは、もう少し顔で男を選べとよく言われたっけ。

私はどちらかと言うと、ほっこりとする親しみやすい愛嬌溢れる容姿の方が好きなのに、どうして駄目なのかしら。

男は顔じゃないと思うんだけどなあ…。

「吉良さん？」

「え？あ、はい、何ですか？」

考え事をして少し意識を飛ばしていた私を、榊紫苑は不思議そうな顔をして見ている。

「…吉良さん、やっぱり面白い発想するよね？」

「どうしてですか？」

「どうして…って…俺、自信なくなるよ」

苦笑した榊紫苑の言葉の意味が分からず、私は首をひねる。

「こんなに傍にいて、何にも感じない？俺、そんなに魅力ないかな？」

言われて、気付く。

抱き締められるような恰好になっていることに。

密着し過ぎて、背後から伝わる体の大きさと、温もり。

覆いかぶさる、見た目に反した男っぽいごつごつした手の感触に、変に相手を意識してしまい、一気に心臓が暴れだす。

過度の接触による緊張で、体が強張る。

「さ、榊さん、ち、近いですけど…」

いつもはしない榊紫苑の香水の香りが、鼻梁をくすぐる。

間近にすることで、意識しなければ感じない程度の香りも、強く感じる。

通常よりもかなり薄い香りになっているけど、この独特な香りのノートはシャネルのエゴイスト。

本来は名前そのままに自己主張の強い香りで、こんなに弱い匂いではないのに。

榊紫苑が纏うこのエゴイストは、控えめだ。

“ どうしてだろう…って、違う！”

自分が、他事で現状をはぐらかそうとしている事に気付く。

思った以上に動揺しているみたい。

けれど、見目の良いこの年下の男は、慣れたように微笑みかけてくる。

この程度の接触は日常茶飯事なのがまるわかりな相手の平然さが、

何だか悔しい。

「吉良さん、ちっとも俺の事を気付いてくれないんだね？」

「き、気付きましたから、離れてください」

榊紫苑は、そのまま手を離し、私からすんなりと離れてくれた。

私は内心で安堵して、そっとティーポットを台の上に置くと、相手に向き直る。

「それで、私に何か？」

「今日は点滴をしないで帰るよ」

「え？どうしてですか？」

そもそも、点滴だけをやりに来たはずなのに、どうして？
考えて、一つ思い当たる。

コンビニの帰り道に、不愉快任せに意地悪を言ったことを。

「もしかして、院長が本当に点滴すると思ってますか？」

「それ、一瞬、本気にしたけどね。そういう理由じゃないから」

「お仕事ですか？」

「…単に、ご飯を食べて元気が出たから、いらなくなっただけ」

そうはいつでも、顔色は全然、良くなっていないのに。

じっと、相手の顔を見れば、榊紫苑は愛想笑いをする。

「健斗も、今日はしなくても良いって言うてくれたし」

「…そうですか。それなら良かったです」

点滴なんてしないに越したことはないし、院長がそう判断したのなら、私が口を挟む事でもない。

「吉良さんのおかげかな」

「私の？」

「そう。料理上手なんだね。弁当、美味しかったよ」

お世辞でも、褒められれば、現金なもので嬉しい気持ちになる。

「お口に合って良かったです」

「ずっと外食ばかりだったから、手料理も、あんなに食べたのも久しぶりだよ」

恐らく、榊紫苑は食事も満足にしていなかったに違いない。

この顔色の悪さは、不眠だけが原因とはとても思えない。

不眠が続けば、身体バランスを崩して食欲さえ失くしてしまう。

だから院長は、私にお弁当を作らせたのだ。

彼が食事をするように。

榊紫苑が食べていたのは、ほぼ洋食。

和食は出し巻き卵くらいしか手をつけていなかったから、院長がリクエストしたメニューは、彼の好物なのかもしれない。

「外食だけじゃ、体に悪いですよ？」

「俺、料理できないから」

「彼女さんに、お願いして作ってもらったらどうです？」

何気なく言ったその一言に、榊紫苑は首をすくめる。

「俺の付き合っ子、みんな料理が出来ないんだよね」

「…そ、そうですか」

どれくらいの人数と付き合ったのかは分からないけれど、一様に

料理が出来ないなんて、ものすごい確率。

もしかして、手料理自体が好きじゃないのかも。院長みたいに。だから、出来ない相手を選んでいいのかしら？

「今日は楽しかったよ。美味しいご飯も食べられたし、笑わせてもらっただし」

「あれは、笑い事じゃ…」

「あそこまでされるのに、健斗に靡かないなんて、よっぽど彼氏に惚れているんだね？」

榊紫苑の言葉に、私は首をひねる。

「彼氏？」

「違うの？この間来た時、慌てて帰ったから、彼氏とデートかと思っただけだよ」

「あの時は、美菜先生のご実家が経営されるエステサロンで、マッサージの講習があつて遅刻厳禁だったんです」

美菜先生と聞いた途端、榊紫苑の頬がピクリと引き攣った。

「美菜先生って…健斗の奥さんのこと？」

「ええ」

「もしかして、美菜様とも交流があるの？」

美菜…様？

何で様付けなのだろうかと思いつながら、私は頷く。

「美菜先生繋がりで、院長と知り合ったようなものですから」

「仲…良いの？」

美菜先生の信奉者か、苦手なのか、榊紫苑はどちらだろう。

前者だと返答の仕方を間違えると、捻じれた嫉妬を浴びるようになるから、注意して答えないと。

「時々、職場での院長の様子を報告はしています。榊さんは、美菜先生と仲がよろしいんですか？」

さし障りのなさそうな事実を伝えて尋ねれば、年下の美青年は力ない笑みを浮かべる。

「健斗と仲が良いから、色々、気にはかけてくれるけど…あの人の愛情表現って、何というか独特だから…」

言葉を濁したけれど、表情から察するに、彼にとって美菜先生は苦手な人のようだった。

美菜先生はものすごく美人で、男性に良くもてるけど男性嫌いで、愛情表現が下手。女性にはそんなこと全然ないのだけだ。

外見が華やかで歯に衣着せぬ率直な言葉もあって、特に男性には『女王様』みたいだって誤解されがちなのだけど、細やかな配慮が出来る素敵な人。

…ツンデレって、院長が言っていた気がする。
ツンデレがなにか、知らないけれど。

「でも、エステを受けに行くんじゃないで、マッサージの勉強ってどういうこと？」

「院長命令なんです。アロマテラピーとマッサージを使った不眠治療法の勉強をかねて…」

反射的に答えて、しまったと思う。

まだ、正式にクリニックで取り入れるとも決まっていない話なのに。

「アロマ？ああ、だから、吉良さんラベンダーの匂いがするんだ」

言われて、思わず自分の腕を寄せて匂いを嗅ぐ。自分では良く分からない。

「…匂います？」

「近付くと、少しだけ」

私の姿を見て、榊紫苑は穏やかに笑う。

「ラベンダーと何か別の匂いもしたけど、その時で香が違っし、何か分からなくて。ずっと気になっていたんだ」

「それならたぶん、クラリセージかマンダリンです。寝室用で調香

したルームフレグランスの配合で良く使うのが、その二種類なので
「調香?」

「香りを掛け合わせるんです」

「そんなことできるの?」

「エッセンシャルオイルがあれば…簡単ですよ?」

「ちなみに、何の効果があるの?」

「どの香にも一応、リラックス効果がありますね。気分が落ち着くと睡眠導入が行いやすくなるので、寝つきを良くしたい時に、体調に合わせてラベンダーベースで香を変えます」

流石に、クラリセージに通経作用があつて月経不順に効くとは言えないんだけど、ちゃんとリラックス効果もあるし、嘘は言っていない。

「…それ、効く?」

珍しく興味津々な相手に、私はすこし言葉を考える。

アロマオイルの原料にもなる薬草は、今の様な化学薬品が発達していない時代は、医薬品として様々な形で用いられてきた。

だからこそ、効果が気休め程度のものではないことは確かだけれど、過度の期待を持たせるのも危険。

「精神的な昂りやストレスで眠れないのなら、効果があるかも知れませんがね」

「曖昧に言うんだね?」

「匂いの好みや体質もありますし、神経が異常に昂ついても効果は薄れます。万人に等しく効果を発揮するという訳でもないんですよ」

「ふーん」

榊紫苑は、納得したような、しないような表情で私をじっと見下ろしてくる。

「興味があるようでしたら、此処にも一応いくつかエッセンシャルオイルがありますから、試しに好みの香りを合わせてみますか？」
「…せっかくだけど、止めておくよ。俺の不眠の原因には効きそうにないから」

そう答えて、榊紫苑は苦笑する。

彼の不眠の原因は、いったい何なのだろう。

尋ねようかとも思ったけれど、笑みの中に触れてほしくないという明らかな拒絶もあって、私は言葉を飲み込んだ。

「でも…」

不意に榊紫苑が近付き、思わず私は後退るけれど、シンク台に背後を阻まれる。

相手の指先が私の左頬を、撫でるように触れる。

私を見下ろす男の表情に笑みはなく、驚くほど真挚な顔をしていた。

榊一族の美形に見慣れた私でさえ、榊紫苑の卓越した美貌に息をのんだ。

相手の手を、振り払うことを失念するほどに。

「貴女にはとても興味があるから、色々、俺だけに貴女のこと教えてほしいな」

低く囁かれた声はひどく淫靡で、乙女の心蕩かす様なその文句の後、新たな衝撃が私を襲った。

重ねられた唇に、私の理性が粉々に碎け散った。

19 (後書き)

アロマなママ知識メモ

クラリセージには女性ホルモン（エストロゲン）に似た成分が含まれているので、月経周期の乱れや更年期の様々な症状を和らげる効果がある、女性向きの精油とされています。

ただ、月経を促す作用があるので、妊娠中の方はご使用にならないでくださいね。

「お前、紫苑を引っ叩いたのはどういいう見だ」

院長は治療室の机に肘をつき、私を睨む。

私はうつむいたまま、返す言葉もなかった。

「仮にも患者に手を上げるとは、どういう神経してやがる」
「すみませんでした」

あの後、私は思いつきり榊紫苑に平手を打った。

言葉だけなら我慢できる。でも、キスまでされた。

冗談やからかいの類にしては悪趣味で、普通、相手は殴られても文句は言えない程度の。

私の最大の誤算は、私が勤務中で、相手は『患者』だった事。

いかなる事情であれ、『患者』に手を上げるのはご法度なのに。

榊紫苑は、左頬に大きな紅葉マークをつけて帰って行った。

「クビにしてください」

院長からクビを言い渡されても仕方ないどころか、私が手をあげた相手は榊の名のつく人。私の首を切らないと、院長の立場さえ危うくなってしまう可能性がある。

院長が深いため息を漏らす。

「お前、そんなに紫苑が嫌いか？」

「……」

「おい、顔あげろ」

そつと顔を上げれば、院長は椅子に座れと手で指示する。

私が椅子に座れば、院長は眼鏡をはずして椅子に深く背を預ける。

「理由は何だ？お前が手を上げるなんざ、余程の事だろ」

「… 榊さんは、何もおっしゃらなかつたんですか？」

「紫苑はお前を咎めるなど言っただけだ。お前の事だから、あいつに手を挙げて俺に何か実害が及ぶとでも考えているだろうが、その点の心配はない」

さすがにばつが悪かったのか、榊紫苑は院長に何も言わなかったらしい。

「でも…」

「そもそも、全面的にあいつが悪い以外に、理由が浮かばん」

“え、断定ってどういうこと？…そんなに榊紫苑は問題児なの？”

ものすごく不安が心をよぎった瞬間、院長が机を人差し指でこつこつと叩く。

「キスでもされたか？…しかもディープなやつ」

「なっ！」

なんで分かったのだろう、この人。もしかして、見ていたの？

「あいつ、三日でさえ我慢できねえのか…」

狼狽ろっはいすれば、院長は呆れたようにため息をつくど、ぼそりと何かを呟くけど、声が小さ過ぎて聞きとれない。

「院長？」

「あ？まあ、食われなくて良かったな？」

「ど、どういう意味ですかっ!？」

衝撃発言に、私は思わず椅子から立ち上がる。

「榊一族の男を前に、油断したお前も悪い」

油断も何も、キスをされた意味さえ、私には分からない。

もし分かる人がいるなら、ぜひ私に教えてほしい。

そもそも、榊紫苑が恋人でもない相手に、簡単にキスできるような節操なしだっけ知っていたら、絶対二人っきりになんてならなかった。

「ホント、榊一族はケダモノばかりですね」

「さらっと毒を吐くな、吉良」

苦笑した院長は、頬杖をつきながら私をじっと見据えていた。

「紫苑の奴は、巧かったか？」

「何がですか？」

「kiss」

発音良く放たれた言葉に、脳裏に強制的に排除していた榊紫苑との情景が思い出される。

刹那、自分の顔が一気に熱くなる。

思い出したが最後。羞恥心で心臓が止まりそう。

私は赤くなっているであろう顔を両手で隠して、身を屈めるように俯く。

「あ、あんなのもう、キスなんかじゃありませんっ！」

死んだって、巧かったなんて言えない。

あんな官能的な口づけをされたことなんて、人生初。

気持ち良すぎて抵抗する気さえしばらく失せてしまったなんて、絶対言えない。

嫌だったのに、そんな風に思った自分がすごく恥ずかしい。

「どれだけエロティックなやつをされたんだ、お前……」

「き、聞かないでください！恥ずかしすぎて、死にそうなんですか
ら」

手を少し下ろし、顔を上げて院長を恨めしげに睨めば、院長はしかめっ面をしたまま、子供にするように、私の頭を優しく撫でる。

「犬に咬みつかれたと思って、さっさと忘れろ」

「大型犬に咬みつかれたら、一生物のトラウマです……」

「だからと言って、特別診療からお前を外さないぞ」

「……看護師なら、私以外にも結城さんや、松波さんが居るじゃないですか……」

相手が神一族だから、患者として接し辛いのはあるだろうけど、点滴だけなら、私でなくてもかまわないはずなのに、院長は鋭く私を睨みつける。

「紫苑の相手はお前以外、無理だ」

「どうしてですか。注射嫌いの榊一族だけじゃないですか」

「…お前みたいな鈍い女でなければ、勤まるか」

意味不明なことを言われ、私は思いつきり首をひねった。

鈍いつて何ですか、鈍いつて。

納得がいかないまま、話は院長に押し通された。

院長の言っていた意味を私知ることになるのは、それからもつと先の事…。

第五章 それを人は気の迷いと言う

自分が女に対して、節操がないと言う自覚はある。

それでも、その気のない相手に手を出したことはないし、自分から手を出すことも、ほとんど皆無だ。

言い寄る女も、後腐れがない相手を毎回、選んで遊んできた。

それは、致命的なスキヤンダルを回避するための鉄則だ。

大なり小なり、芸能界に入っている人間は生き残るために打算的に動く。

いわば処世術だ。

その中で、「恋人」関係になった相手もいたが、どれも長続きはしなかった。

『優しくしてくれるけど、本当に私のことを愛してる?』

と、言うのが別れた彼女たちに共通する台詞だ。

当然だ。

俺は、本気で惚れたことなど一度もない。愛した覚えも、愛された覚えもない。

血を分けた両親にさえ。

こと母親に関しては、快い感情はない。

女性という生き物を、俺が冷めた目でしか見られないのは、母親という人生最初に接触した異性の印象の悪さだろう。

世の中には、子供を愛せない親もいる。親を愛せない子供も然り。

己の見栄と金の為に生き、子供を装飾品の様に扱い病にかかって扱いに困れば捨てて行方をくらませそれっきり。

親としてどころか、女としても奔放過ぎた自分の母親の事は、その強烈な印象と顔以外覚えていない。

顔は自分の顔を見れば嫌でも思い出す。思い出して、女と言う生き物に対して不快感が増す。

だから、女に自らが手を出すなんて、愚かなことだと思っていた。なのに…。

自分のマンションのリビングでテレビを見ながら、俺はわずかに痛む自分の左頬に手を伸ばした。

相手にその気がないと分かりながら、自分から手を出した愚かな結果が、赤い紅葉の痕を残す頬。

口の中を切らず、腫れなかったのがせめてもの救い。

明日までには何とか痕も消えるだろうが、残された余韻は癒えそうにない。

女に平手打ちをされたのは、演技も含め始めてのことだった。

「我ながら、莫迦な真似をした」

吉良にキスをしたそもそのきっかけは、苛立ちからだ。

俺に対して男としての認識をほとんど持たない吉良に、安心していると同時に、気に入らない感情があったのは事実。

事あるごとに、吉良の口から健斗の事が出てくるのも、不愉快な感じがした。

恋人でも妻でもない吉良が、健斗に恭順な態度をとるくせに、恋愛感情がないといった事も、胡散臭かった。

健斗が吉良に対して、単なる従業員以上の感情をもっていることは明白だが、健斗は俺以上に自分の腹の中を容易に見せたりはしない。

それも、健斗は彼女にかなり執心している。

でなければ、弁当のときのようなポッキーゲームもどきの真似など、あいつはしない。

あれは、俺に対する明らかな牽制だとわかった。だからこそ、健斗が吉良に体よくかわされたのには、笑わされた。結局の所、何が一番気に入らないのか、俺自身にも分からない。モヤモヤとした苛立ちを、とりあえず吐き出したかった。それに、もし俺が健斗と同じ事したら、吉良はどう切り返して来るのだろうかという、純粹な興味もあった。

あそこまで、ディーブなものをするつもりだっけなかった。

冗談だからかうつもりだったのに、吉良の柔らかな唇に軽く触れれば、彼女は驚いた様に呆然と俺を見た。その無防備過ぎる表情に、悪戯心が疼いた。

男慣れしていないと一瞬で分かる彼女のその先の反応が見たくて、放心している吉良に再び唇を重ねていく。

重ねる度に深くなる口付けに惑っていく吉良の泣き出しそうな表情に、甘い誘惑を見て身体の奥底から震えが来た。

己の行動を制御できないほどの、衝動。

“吉良が欲しい”

そう強烈な欲望に溺れた。

片手で目を覆い、ソファに背を預けて天井を仰ぐ。

吉良があの時、抵抗して俺の頬を叩かなければ、あのまま彼女を抱いていた。

途切れ途切れに洩れる、喘ぎに似た苦しげな呼吸。

怒りが入り混じりながら、怯えたように潤んだ瞳。

どこか辛そうでいて官能的な艶のある表情。

初めて見る、吉良の『女』に、自分に湧き上がる強い欲求に体が従った。

「欲求不満か、俺……」

確かに、このところ禁欲生活だったが、それを無理に我慢した覚えはない。

体調の悪さから、その気が萎えていたし、元々、野獣のように女を襲う真似もしない。

あの時が、どうかしていたとしか思えない。

「…あの調子じゃ、次の診療には立ち会わないだろうな」

平手打ちをした後、激しい怒りを押し殺して冷静とも取れる態度で、俺を注意した吉良。

彼女は、謝罪を受け入れる余地など一抹もない冷徹な眼差しを残して逃げた。

当然だ。あれは、やった俺でさえやり過ぎだという自覚がある。

次に会うことは、ないだろう。

そのほうが、いい。

俺のためにも、彼女のためにも。

21 く紫苑sideく(後書き)

お読みいただき、ありがとうございます。多謝!!

§

吉良に平手打ちをされた翌日、俺の携帯電話に一通のメールが入っていた。

差出人の名前は、榊美菜。

従兄弟の榊健斗の妻にして、俺の最凶の天敵。

天上天下唯我独尊、世が世なら独裁者になれたであろう女傑。

そして俺が唯一、逆らえない女性。

「げっ、デビルメール…」

思わず美菜様の名前を見て、ぼそりと呟いてしまった。

こんな事を言っていたと本人にバレたら、確実に殺されるだろう…

思わず、色々な意味で緊張が走る。

同時に、嫌な予感が脳裏をよぎった。

今の俺は、絶対に情けない顔をしているに違いない。

今がロケの休憩中で、自分の車の中で一人きりだった事に俺は感

謝し、恐る恐る、メールを開く。

あたくしに電話なさい。

今すぐ！

簡潔明瞭、命令形。

彼女から来るメールは、いつもこんな感じだ。

着信が入っていた時刻を確かめると、午前十時二十二分。現時刻は既に、午後一時を回っている。

今回は、これでも早く見つけられた方だが…。

「絶対に、キレてるな」

電話をしたくない気分が七割、仕返し怖さが十二割増しで、俺は渋々、美菜様に電話をかける。

二コール目で、相手はすぐに出た。

『貴方、何時になったら日本語が理解できますの？』

開口一番、絶対零度の冷めた女性の声が俺の耳に届く。

「…あの、俺は一応、社会人」

『お黙り！しーちゃんのくせに、口答えなんて十年早くてよ！』

俺の言葉をさえぎって、美菜様は俺を一喝する。

『このあたくしを待たせるなんて、何時から貴方は偉くなったの』

「いや、しー…」

『言い訳無用！』

「…申し訳ありませんでした」
『貴方のその誠意のない謝罪なんて、その辺の雀にでも食べさせておしまいなさい!』

渋々、場を収める為に社交辞令的に謝れば、相手はそれを見抜いてしまう。

俺が仕事で簡単に電話が出来ない事を知っているくせに、この夫人はいつも無理難題を俺に吹き掛ける。

そして、難題を果たせない俺の言葉など一切無視して、俺を責める。

だから、彼女と俺は会話が成立しない。

否、彼女からの一方的な話に終始する。

彼女との会話に、俺の意思は無意味。

「用事がないなら、切りますけど?」

『電話をしたのは貴方でしょう!』

“いや、するように言ったのは、貴女ですけどね?”

言おうと思ったが、さらに叱責が飛ぶのが分かっているので、あえて何も言わない。

「それで、俺に何か用事でも?」

『吉良あげはの事よ』

途端に冷静な語り方になった相手に、冷や汗が背筋を伝う。

吉良経由か、健斗経由かは分からないが、俺の素行が美菜様の耳に入ったようだ。

俺の女遊びに関して、容赦ない罵声を浴びせてきた彼女のお小言を聞かなければならないのかと、必然的にため息が漏れた。

『あたくしを前にため息？』

失笑ともとれるその声に、俺は自分の頬が引きつるのを感じた。
何で怒らない？

決して怒られたいなんて言うマゾヒスト的な性癖はない。ただ普通なら、此処で必ず美菜様の叱責が飛んでくるのが常。
何の前触れだ？

「昨日食べた、彼女の手料理の味を思い出して」
『健から聞いているわ』

言い訳を呟けば、珍しく美菜様から普通の返事が戻ってきた。
奇跡か、それとも白昼夢か？

『たくさん召し上がったそうね?』

「まあ、お世辞抜きで美味かったので」

『当然よ。味にうるさい健が唯一食べる女の手料理は、彼女の物だけ。不味い訳がありませんわ』

至極当然のように、美菜様は言い放つ。

彼女が家事全般に関しての才能が皆無だとは知っているから、美菜様が健斗に手料理を振る舞えないのは分かる。

それはいいのだ。

問題は、俺など男であっても、健斗と仲が良いというだけでこの扱いなのに、美菜様は女性である吉良に対して、何の嫉妬も抱かないのか?という点だ。

「…電話の理由、健斗の浮気調査?」

電話口で、相手がかすかに笑うのが分かる。

『むしろ、健にはあげはと浮気していただかないと』

問題発言に、俺は声を失う。

“正気か?”

美菜様は気に入った人間を、ファーストネームで呼ぶから、吉良は彼女に気に入られているはず。

だからと言って、夫である健斗の浮気を推奨するのはあり得ない。俺の天敵は、そんな心の広い女性ではない。

結婚前、遊んでいた女の全てを清算していた健斗に対して、愛人関係でも良いからと交際の継続を持ちかけてきた女が何人かいた。

その女達は美菜様の逆鱗に触れ、美菜様の手によって社会的制裁が加えられた。

それは二度と、健斗の愛人になろうと言う女の存在が出ないほどの。

美菜様、一見すると容姿は艶やかで男受けが異常に良い軽い感じの女に見えるのに、貞操観念なんていう神一族には一抹も残されていない物を、しっかり持っている古風な思想の人間なんだ。

俺が冗談半分で健斗との婚約期間中だった美菜様を口説いたら、延々四時間もフローリングで正座させられた上に説教を食らった。アレは本当に拷問だった。

そんな女遊びに関して厳しい猛妻が、浮気など許すわけがない。許すとしたら、何らかの策謀を以てだろう。

『だからしーちゃん、あげには手を出さないで頂戴』

言葉はお願いだが、言葉の威圧感、女王然とした命令に聞こえる。

吉良に対して、やはり何かをするつもりだ。

『昨日の様に淫らなキスなんてなさったら、貴方の節操なしの口、二度と開口できないように緊縛いたしますから』

目の前に居なくても、彼女の凍てつくような彼女の表情が安易に想像できる。

電話の先的美菜様は、ダイヤモンドダストが吹きすさぶような、氷の頬笑み。

健斗の問題で、俺までとばっちりを食らいそうな気配だ。

「…普通、旦那が浮気しそうなら、邪魔するものだと思うけど？」

『あたくしを誰だと思いい？』

「…美菜様です」

『あたくしの計画の邪魔をなさったら、俳優として生きていられなくしますわよ？』

声は笑っているが、背筋が凍る。

こういう語り方をする彼女が一番、危険だと知っている。

邪魔したら、本当に俺は俳優として抹殺されるだろう。

彼女は、日本の美容業界でトップに立つ西宮グループ総帥の一人娘。正確には、美菜様には弟が居たが数年前にスキルス性の胃ガンで天逝している。このため、ゆくゆくはその西宮グループを継ぐ身にあると、健斗が言っていた。

健斗との結婚後、美菜様が形成外科医の仕事を減らして会社経営に携わっているのはその為らしい。

そんな彼女の持てる権力と金を使えば、俺の俳優人生を左右するのはひどく容易な事だ。

「…ちなみに、計画内容を聞いても」

『貴方は言われた事を、素直に守ればよろしいの。警告は致しましたからね？』

黙って大人しく見ていると、暗に彼女は俺を牽制し、彼女は電話を切った。

俺は、携帯電話を下ろし、小さくため息を漏らす。

美菜様と初めて普通に会話が出来たと思ったら、これだ。

小言を聞くより、精神的に疲れる。

それにしあって、浮気するまで放置するのは、彼女がこれまで見

せていた電光石火の早業行動力と相反する。

それだけ、罨をめぐらして潰したいということなのだろうか？

自分が気に入っていた相手だからこそ、憎しみも増幅するという構図か。

“…どうせ、もう会えない相手だからな”

眼の前にあるハンドルに肘をかけ、その腕の上に顎を乗せて考える。

普段なら、美菜様の命令には素直に従う所だ。

あの人と悶着を起こすと、始末に骨が折れて面倒だから、必然的にいつも『回避』を選ぶのだが。

今回は従うまでもなく、もう会うことはないだろう。

美菜様が吉良に何をするのか、気にならない訳ではない。

あの人は、やる事が過激すぎるから、眼を離すと危険だ。

とはいえ、俺がどうこうできるはずはない。健斗でさえ、美菜様を抑止できないのに。

看護師としての吉良は優秀で、何より点滴に痛みがなく恐怖心を俺に与えないのは魅力的で、俳優業の話は一切しないのは高ポイントだった。

治療をするのに、失うには惜しい存在ではあったけれど、吉良がその他大勢の一人である事に変わりはない。

俺と吉良の関係は、看護師と患者であってそれ以上でもそれ以下でもない。

その関係すら途切れさせたのは俺。

看護師など、いくらでもいる。

なのに、この胸に巢食うモヤモヤは何だというのだろう。

苛立ちさえ覚える、この厭な感覚が消えない。

§

「カット！」

監督の険しい声で、俺は我に帰る。

そこは、都内にある某ビルのとあるフロア。

俺の周囲には撮影クルーが仰々しく機材を持ちながら、渋い顔を見せる。

目の前には、相手の女優が困惑気に俺を見上げている。

“しまった。またやった…”

また撮影の最中に、意識が飛んだ。

「お前、やる気あるのか！」

演技に厳しい事で有名な映画監督、周防修平が床に思いっきり台本を投げつける。

元から人相が悪かったが、更に鬼と呼ぶにふさわしい、修羅の顔。当然だ。

立て続けに、NGを十回も出せば、周防監督でなくともキレる。

美菜様からの電話の後、俺の演技はボロボロだった。

「すみません。もう一度やらせてください」

「集中力のねえ野郎に何遍やらせても無駄だ！頭冷やしてこい！上坂抜きシーン、先撮るぞ！」

周防監督は立ち上がり、周囲のスタッフはその声に従い、移動を開始する。

俺はその場から身動きが取れず、己の不甲斐無さに額を抑える。どれほど体調が悪くても、ほとんどNGなど出した事はない。なのに、今日は何度も同じ所で間違える。恋人との別れのシーン。

別れの言葉が、どうしても出ない。

台詞は覚えている。

どう表現するのもかも、頭の中に出来上がっている。

なのに、言葉を発する事が出来ないのだ。

自分らしくない失敗に、苛立ちが募る。

「上坂さん、大丈夫ですか？なんだか調子が悪そうです」

視線を上げれば、ヒロイン役の子がそこに残っていた。

今売出し中の若手女優で、この所、人気が急上昇している。

見た目は可愛らしくスタッフの受けも良いが、男の前で態度が変わるし、男に対する節操のない噂話は良く聞いている。

業界で人気のある男と交際すれば、名が売れるからだろう。

まあ、処世術だから嫌いではないが、俺に何かと媚を売るように接触してくるので、やっぱりかわしていた。

「…ああ、ごめんね、結城さん。こんなにリメイク出して」

愛想笑いを浮かべで見ても、自分の顔の筋肉が何所かぎこちなく動く。

重症だ。

笑うことすら出来なくなってる。

だが、彼女は何も気にする様子もなく、少し物憂げな表情を浮かべる。

「そんな事…いつも、私がリメイクばかりだから…気にしないでください。私に出来る事があつたら、何でも言つてくださいね。私、上坂さんのお役に、立ちたいです」

普通の男が今の俺と同じ状態なら、くらくたとくるのかもしいれない。だが、どれだけ巧妙でも俺は気付いてしまう。

彼女の中にある、打算的な仕草と言葉を。

「結城ちゃん！」

遠くでスタッフが彼女を呼ぶ。

「ありがとう。でも君は、向こうに行つた方が良いようだね」
「…でも」

流るよつに、俺を上目遣いで見上げてくる相手に、内心で少し腹が立つ。

正直、こんな状態の自分の傍に人が居るのは、不愉快だった。

「監督が言つとおり、俺は頭を冷やして来るよ。一人で考えたい事もあるし、早く戻らないと、君まで監督に怒鳴られる…それは俺が嫌だな」

困つたように小さく笑みを浮かべれば、相手の頬は朱に染まる。この程度で俺に惑わされるようなら、俺を籠絡など出来ないのに。

「あ、あの、待ってますから…失礼します」

頭を下げ、スタッフの方へ走っていく相手の後ろ姿を見送らず、俺はそのまま逆方向へと歩き出す。

時を見計らったかのように、マネージャーの熊井が俺の傍に駆け寄ってくる。

今までにないスランプに、熊井の表情が硬い。

「伊織」

「…悪い。クマ、一人にさせてくれ」

俺はそのまま人気のない場所に出ていった。

どれほど時間を費やしても、その日、嵌り込んだスランプから、俺は一度も立ち直る事が出来なかった。

§

『演技ができるまで、戻ってくるんじゃない？！』

その後、全く調子が戻らなかった俺に周防監督が激怒し、俺は一日暇を言い渡された。

役を下ろされなかったただけでしたが、監督の言葉は俺にとってかなり屈辱だった。

演技をする事だけが、俺の特技であり生きる全てだった。

だからこそ、台本は隅から隅まで読みつくし、台詞も完全に頭に入れ、どう立ち振る舞う事が最善かを常に考えて撮影に臨んできた。なのに、頭で分かっているのに体が動かないジレンマ。

美菜様の電話の後から、俺は俺ではなくなっている。

別れの『台詞』を口にしようとする度、俺の思考を塞ぐように、脳裏に吉良が現れる。

強い拒絶と怒りを含んだ瞳で、泣き出しそうな顔をして俺を見ていた吉良の姿。

泣きそうな表情を演技していた目の前の女優とは比べ物にならないほど、鮮烈で俺の心を揺さぶる。

媚びない、靡かない。俺を頑なに拒む彼女の姿が蘇り、台詞が瞬時に消える。

幾度、気を取り直して撮影に入っても、吉良の事がチラついて集中力が削げていく。

どうして吉良が俺を侵食する？

演技の最中に、他の何かが邪魔することなどなかった。

“美菜様は、俺にとって鬼門だな”

美菜様と吉良の話をしてから、俺の異変は始まった。

午前中は何ともなかったのだ。問題があるとすれば、それしか考えられない。

だが、問題は分かれど原因が分からない。

何故、吉良の泣き出しそうな表情を思い出して、言葉が出なくなるのか。

原因を突き止めて、どうにかしなければ、このスランプから立ち直れない気がした。

気付けば今、俺は健斗が院長を務めるクリニックがあるビルの前にいる。

来てはみたものの、今の時間は夕方診療が始まる直前で、人目に付く。

吉良が出勤しているのかも確認していない。

“はあ…俺、何やってんだろ”

健斗に電話で確認を取ることもせず、変装らしい変装だって何もしていない。

カラーコンタクトを外した以外は、俳優『上坂伊織』の姿のまま。

例え吉良に会った所で、悩みが解決するのも分からないのに、何でハイリスクな真似をしているのだろう。

“…駄目だ。出直そう”

芸能記者にゴシップを書き立てられでもしたら、癪に障る。

健斗に仕事が終わったら連絡をくれるようメールだけして、戻る

う。

駐車場に戻りながら、スーツのポケットから携帯電話を取り出し、その画面を見た瞬間、視界が捻じれるように歪む。

「っ！」

そのまま倒れそうになったが、何とか踏ん張り倒れる醜態だけは逃れた。

堪えたものの、体から一気に血の気が引いて行くのが分かる。

目眩と、震えと共に、冷や汗が浮かぶ。

ふらふらと見知らぬ車のボンネットに手をつけて、頭を押さえる。堪えていても、症状はおさまらない所か酷くなる。

“健斗に電話…”

近くにいて、処置の出来そうな相手は、従兄弟しかとっさに浮かばない。

ケータイ電話に視線を向ければ、体が大きく揺れる。

“倒れる…”

まるで他人事のようにそう思った。

膝が崩れ、体が左に傾く。

アスファルトに、捨て身の状態で倒れていく。

激しい痛みと衝撃が、自分の体に襲いかかる。

…はずだった。

そうはならなかったのは、自分の体を左から支えた人の感触。

“そう言えばこんな事が、前にもあったな…”

「大丈夫ですか…っ、榊さん！」

動揺と驚愕が入り混じった声。

それは聞き慣れた彼女の声で、何時もの香りも間近に感じられる。顔を見なくても、分かる。

どうして、クリニックではなく、此処にいるのだろう。

「…やあ、吉良さん」

眼を開き、愛想笑いをして相手を見下ろせば、私服姿の吉良が俺を支えながらむっとしてる。

「毎回、辛い時に恰好つけなくて結構です！辛い時は、辛い顔で良いんです！」

ぴしゃりと叱りつけられ、俺は苦笑する。

彼女はずっと気付いていて、気付かないふりをしていてくれたのだ、俺のやせ我慢を。

吉良は、俺の首筋に手をのばし、軽く触れると、驚きに目を見開く。

「やっぱり熱がります。こんな状態になるまで動き回っていたんですか？」

「…熱？寒くて震えるくらいなの？」

言われても、自分ではよくわからない。

「その悪寒と戦慄は、高熱が出る前駆症状です。とりあえず、クリニックに行きましょう」

俺を支えて歩こうとする彼女に、俺は抵抗した。

「嫌だ…」

「何を言ってるんですか」

「人がいる…健斗に迷惑がかかる」

「病人が迷惑なんて考えないでください！」

なんだか、今日の彼女は怒ってばかりだ。

昨日の今日じゃ仕方ないけれど、俺だってこればかりは譲れない。

「しーちゃんったら、我がまま坊やね」

悪寒と別に、俺の背筋に寒気が走る。

「…その声」

「美菜先生！」

声のする方を見れば、メリハリの利いたグラマラスボディの美麗な女性がそこにいる。

気の強そうな釣り目がちな瞳が、不機嫌に俺を見る。

「相変わらず病院がお嫌いなのね…あげは、悪いけれど予定をキャンセルしてあたくしと一緒に、しーちゃんを我が家に運んでくださるかしら？」

「冗談じゃない。」

美菜様の手を煩わせたら、後でどんな仕打ちをされるか分かったものじゃない。

「…一人で帰ります」

「お黙り！貴方に拒否権はありません事よ！あたくしと吉良のデイ

ナーを反故になさつた罰は、ちゃんと受けていただきますからね！」

ならばいっそ、俺を放っておいてくれと唸ったら、美菜様に頭を叩かれた。

抵抗むなしく、俺は吉良と美菜様に両サイドを拘束され、反拘束状態で美菜様の車に乗せられる。俺はそのまま健斗の家へと連行された。

第六章 弱った大型犬にもご注意を

「三十九度六分…立派な熱ですこと」

院長宅の客間では、榊紫苑がベッドの上で真っ赤な顔をして、荒い息だった。

美菜先生がベッドサイドに腰をかけ、榊紫苑の脇から体温計を抜いて挿入した。

既に榊紫苑には寒気がなくなっていたので、私は美菜先生とは反対側のベッドサイドに立って、榊紫苑の頭の下に氷枕を当てる。

既に彼の腕には、ブドウ糖の入った補液用の点滴が入っている。

「疲れが出たつて所かしら。肌の荒れ方からして、食事も睡眠も満足になさっていないわね。せつかくの美貌が台無し」

美菜先生は、呆れながら病人の頬を軽くつねる。

「…商売道具を傷つけないください」

「まあ。このようにくたびれた商品のどこに、商品価値が？あたくしが理解できるように、一万文字以上で説明して御覧なさい」

「いたっ…マジで、勘弁…」

「美を追求維持できない不摂生な美形など、滅んでおしまい！」

病人に対しても遠慮がない美菜先生に、榊紫苑も頭が上がらない

様子だった。

「なんだか、年の離れた姉弟の喧嘩みたい。」

「それにしても、顔が商売道具って…榊紫苑の仕事って、モデルか何か？」

「絢子さんや結城さんが喜びそうな美形で、モデル職も似合いそうな気がする。ただ、華やかな世界に興味がないので例え彼がモデルだとしても、私にはピンとこない。」

「どうせ貴方の事ですから、家に帰らず夜遊びばかりしているのでしょう？」

「…解っているなら、わざわざ聞かないで下さい」

「貴方、節度と自重という言葉をご存知？」

「…すいません。俺、難しい日本語は分かりません」

「謝っているのか、美菜先生に反抗しているのか複雑な返答の仕方だった。」

「その答え方は、美菜先生相手にもものすごく不味いと思うわ…」

「せめて、「自分の体力を過信していました」程度にしないと、美菜先生の逆鱗に触れてしまう。」

「案の定、美菜先生は極上の微笑みを湛えた。妖艶でいて不敵で、内に秘めた悪性を滲ませる、院長曰く『魔女の微笑み』。」

「しーちゃん、注射と座薬、どちらがお好み？」

「…どつちも嫌…です…」

唸るように榊紫苑は答える。

「あげは、解熱薬を筋注するわ」

「はい」

「だから、嫌だつて…」

「口答えしない！」

声にはないけれど、心底嫌そうにした榊紫苑を、美菜先生は一蹴する。

榊紫苑が拒否しようと、同意しようと、初めから注射をすることを決めていた美菜先生の指示で、既に注射の準備は出来ていた。

「しーちゃん、お尻出しなさい」

「出来るかつ、そんなことっ！」

その言葉に、榊紫苑が熱で真っ赤にした顔を恐怖に歪ませて飛び起きる。

が、熱のせいか、榊紫苑の身体がくらくたと倒れかかる。

点滴のルートが引つ張られそうになり、私は思わずベッドに片膝をかけて上り、榊紫苑の体を支える。

彼を倒れるのは防いだけれど、支えると言うか、彼は私の胸に横顔をうずめるようにもたれかかる恰好になっている。

高熱が出ているだけあって、榊紫苑の体は異常な熱を帯びていた。

「…へえ、吉良さん結構胸あるね」

しれっとそんな言わなくても良い事を口にした榊紫苑を思わず殴り飛ばしたくなったけれど、次に飛んできた美菜先生の言葉に、反射的に反応してしまった。

「あげは、そのまましーちゃんの頭と腕をホールドして！」

美菜先生の言わんとすることを即座に判断し、片腕で榊紫苑の頭を抱きしめ、残った手で美菜先生側の腕が動かないように肘を掴む。その隙に、美菜先生は榊紫苑のワイシャツのボタンをはずして、諸肌を見せるように半分、シャツをずり下げるように脱がせる。

「何…俺を襲う気？」

抵抗はしないものの、何をされるのかを理解していない美青年は、捻くれた事を言う。

「半分だけ、合ってます」

「…せつかくなら、襲う方が良い…」

人の胸に顔をうずめたまま、抵抗する気力も体力もないのに榊紫苑はそう呟く。

負けず嫌いと言うか、容姿に似合わず、かなり子供っぽい。

美菜先生はアルコール綿で彼の腕を素早く消毒し、彼の腕を掴まむとそこに注射針を突き刺す。

「つつう！」

針がずれないように、痛みで身じろぎしようとする彼の体をきつく抱きしめる。

すぐに注射は終わり、針を抜いた所をアルコール綿で押さえた美菜先生は、私に眼で合図する。

美菜先生が押さえていた所を、私が代わりに押さえ、薬液が体内に吸収されやすいように揉む。

「相変わらず、容赦ないなあ……」

唸るように注射嫌いの男は呟く。

「貴方は痛い目にあって丁度良いのよ。これに懲りたら、自重なさい」

美菜先生は、点滴と注射に使った道具を持ってその場から立ち上がり、部屋を出ていく。

私は榊紫苑から離れる。

すこしフラフラしながらも、座った状態を維持する事を確かめ、ワイシャツを正してボタンを閉じる。

本当なら、ワイシャツが皺になるので脱がせたかったのだけれど、

それよりも早く、美菜先生が点滴を刺してしまつたから、仕方ない。皺と汗で汚れる事覚悟で、着替えは院長の物を借りてもらえば良いだろうし。

点滴の針がずれていないか、腕を確認し、ぼんやりしている榊紫苑をベッドに横たえる。

「薬が効いて熱が下がった頃に、食事と飲み物を持ってきます」

立ち去ろうとした私の手を、熱を孕んだ手が掴んだ。

見下ろせば、榊紫苑が私の手を掴んでいる。

「何ですか？」

「…なんで俺の事、助けてくれたの？」

「病人を助けるのが私の仕事だからです…病人はまず、きちんと休んで体を治すのが仕事ですよ」

腹も立つたけど、病人にお説教するのも気が引けるし、とりあえず元気にはなつてもらわないと。

「…吉良さん、大人だね…羨ましいよ…」

「貴方よりは年上ですから」

「そういう意味じゃないよ…」

榊紫苑は私の手を離し、そう呟いてかすかに笑つた。

その笑みが物憂げに見えたのは、彼の心情が揺れているからか、それともただ熱で力がなかつただけなのか、私には推し量る事は出来なかつた。

「貴女も少し、休憩なさって」

榊紫苑が眠ったのを見届けてからリビングに行く、美菜先生は既に執事の小野さんにハーブティーを入れてもらって、優雅に飲んでいた。

女の私から見ても、ため息が出るほど無駄のないプロポーションの美女。

しかもお金持ちで、医者なのだから神様は才能の与え方を間違っている気がする。

八人掛けの大きな大理石のテーブルを挟み、私は美菜先生の前の席に腰を下ろした。

ロマンスグレーの小野さんは、ハーブティーを淹れた白磁のティーカップをそっと置いてくれる。

「ありがとうございます、小野さん」

唇の端をわずかに緩めて、小野さんは軽く頷いた。

五十代後半の小野さんは、美菜先生専属の執事で、美菜先生が幼いころからずっと仕えているのだとか。

「無理を言いましたわ、あげは」

「いいえ。そもそも榊さんを見つけたのは、私ですから……」

「貴女が慌てて走っていくから、何かと思いましたが」

「すみません。体調が悪そうな人がいるなって思ったなら、体がつい

……」

本当は、美菜先生とディナーを食べに行く予定だったのだけれど、駐車場で病人を拾ってしまった。

声をかけてみたら、榊紫苑だったというオマケつきで。

だって、体調が悪そうな人がいたら、仕事外でも気になって声をかけたくなっちゃうのは、看護師の性なんだもの…。

美菜先生は、凄艶に微笑む。

「それが貴女の素敵な所よ…それにしても、しーちゃん、貴女に色々迷惑をかけたようですわね？」

「ええ…まあ…」

歯切れが悪くなるのは、昨日のキスのせいかもしれない。

「昨日の事は、野犬に軽く咬まれたと思ってお忘れなさい。榊の人間のする事なんて、何時もろくでもない事よ」

夫婦に同じ事を言われ、無意識に苦笑いが出た。

院長と美菜先生、そういう思考はものすごくよく似てるの。

「…美菜先生、榊の人間は、好きでもない女性にも平気でキス出来るものですか？」

過去、榊一族の男性を多く見て、女に節操がないのは良く分かるけど、その気のある女性にしか手を出していなかった記憶しかない。

榊紫苑の様なタイプは、初めて見た。

美菜先生は眼を細め、ティーカップを机の上に置いた。

「健斗はあたくとのお見合い当日に、その気のないあたくしを抱きましてよ?」

衝撃的事実に、がちんと、私のカップが音を立てて机の上に倒れた。

「きゃあああっ!ごめんなさいっ!」

食器は割れなかったけれど、折角のハーブティーが盛大に大理石の机の上に広がる。

慌てて立ち上がれば、小野さんが手早く布巾を持ってきて、濡れた場所を拭いてくれる。

「吉良様、お濡れになりませんでしたか?」

「だ、大丈夫です。すみません」

「いえ。代わりの物をお持ちいたしましょう」

そつなく机の上の惨劇を片付けて、小野さんは一礼して下がる。席に再び腰を下ろした私は、恥ずかしくて美菜先生が直視できない。

院長と美菜先生は研修医インターンの頃に顔を合わせているけど、そのあとで一族絡みでお見合いをして婚約、結婚という流れをとっていると聞いていたけど…。

“院長、どれだけ野獣なんですか。お見合いの当日とか、ホントに

！”

「あげは、男なんてものは須らくケダモノ。榊の人間だからこそ、欲望に忠実だと思つた様がよろしくてよ？」

確かに、美菜先生の言う事には一理ある。

欲求を抑えることなんて、榊一族の人間にはまずない。我慢しなくても、欲しいものは榊の名で全て手に入れられる。

だからこそ、行動が放埒なのだ。

院長然り、榊紫苑然り。

「あげは、健以外の男に操を捧げては駄目よ？貴女には、健の愛人になつていただかなくては困りますのよ？」

「…う…それは…院長への愛がこれっぽっちもないので、どれだけ頑張つても、無理です」

「何を仰いますの！」

突然、美菜先生が立ちあがる。

「あたくしは、貴女と健の子供が欲しいのよっ！貴女以外の女に、健斗の子供を産ませるなんて、あたくしは嫌ですからね！」

美菜先生は、二十代の時に巨大な子宮筋腫が見つかり、子宮を全摘している。

だから子供が産めない。それを知っているのはごくわずかの人で、院長は承知の上で美菜先生と結婚している。

子供がいなくても良いと言う院長に対して、美菜先生はどんな形であれ、院長の子供が欲しいと思つている。

でも、愛人にしても人工授精の代理母にしても、美菜先生のお眼

鏡にかなう女性が見つからない。

それで、付き合いが長くて気心が知れている私に、白羽の矢がむけられているのだけど。

何度お断りしても、美菜先生は諦めてくれない…私にも事情というものがたくさんあるのだけど。

「いくらなんでもそれは倫理的に無理です、美菜先生…」

倫理的にまず無理だし、院長は好きだけどそれは恋愛感情じゃないから論外。例え驚く様な大金を積まれても、そんな関係になるつもりは毛頭ない。

「それに…家族はもういららないんです」

私の家族はもういない。

借金を作って、それを娘の私に擦り付けて何年も豪遊して生きて両親を、私は捨てた。

私に兄弟は居なかったし、親族は、借金の問題で掌を返したように疎遠になった。

数千万円にも及ぶ借金を返すために、一人で頑張って頑張りぬいで、大好きな看護師の仕事でさえ辞めて、夜の仕事をした。

それでも日増しに膨れる借金が、私を追い詰めて昼夜構わず働いて、体を壊した。

どうしようもなくなった時、手を差し伸べて助けてくれたのは院長と美菜先生だった。

今、誰も恨まずに、こうして看護師として生きていけるのは、二人のおかげ。

だから、院長や美菜先生の為なら、多少無理をしても願いをかなえたいと思うけれど、こればかりは無理。

「だから、どうしても、叶えられません」

美菜先生の表情が曇る。

「…謝らないでくださいまし。それに、人間の気持ちに絶対的な変化はあり得ませんもの。貴女の心が変わるまで、気長に待ちますわ」

この場は諦めてくれるけど、完全にはやっぱりあきらめてくれない美菜先生に、思わず笑みがこぼれる。

「そうですね…人はいつか変わるものですよね…でも、今はお一人様生活を満喫しているので、恋人も恋愛もまだ遠慮したいです」
「その気になったら、すぐにおっしゃって。健ならいくらでも貸しますから」

慌てて私は首を横に振る。

「い、院長は美菜先生一筋なので、遠慮します。私は私だけが必要としてくれる人を探しますから！」

「ふふっ、あげはったら欲張りさんですわ。でも、女はそうでなくては」

優雅に笑う美菜先生に、ほっとする。

そして、不意に思い出す。

「あ…美菜先生、お夕食どうしましょう？」

「そうね…今日は、午後からシエフに休みを与えてしまいましたし…」

ディナーの為に予約したお店はキャンセルしてしまったし、まさ

か病人を放置して食事をしに行く訳にもいかない。

「私でよければ、何か作りますよ？ 榊さんのお粥も作らないといけないですし」

「まあ！ 久しぶりにあげはの手料理は頂けるのね。是非、お願いしますわ」

「じゃあ、厨房をお借りしても良いですか？」

「勿論。好きな物を使って下さいまし」

お言葉に甘えて、勝手知ったる程出入りしている榊邸のキッチンで、普段では滅多にお目にかかれない高級な食材たちを相手に、私はお料理を堪能した。

28 (後書き)

閲覧、ありがとうございます。

お気に入り登録、評価もありがとうございます。

少しずつ、見に来てくれる方が増えて嬉しいと同時に、何だかとても心臓がバクバクしております。

楽しんで読んで頂けるよう頂けるよう、出来る限り更新速度を落とさないよう頑張っておりますので、どうぞよろしくお付き合い下さいませ。

§

美菜先生と食事を済ませ、私は飲み物と小さな土鍋に作ったおかゆを持って、榊紫苑の眠る客室に入った。

相手は、眠っていないなかったのか目が覚めたのか、顔を上げて私を見る。

「気分はどうですか？」

「…すこし、楽かな」

榊紫苑は、ゆっくりと体を起す。

ベッド横にあるボードの上に、私は手に持っていたお盆を置く。

点滴は、美菜先生が食事の前に外してくれている。

ボードの上に最初に置いてあったスポーツドリンクに、彼が手を付けた形跡はない。

私は電子体温計を取り出して、榊紫苑に手渡す。

彼は何も言わずに受け取り、脇に体温計を挟む。

汗で彼の髪が濡れて、額や頬に張り付いている。

シャツも結構濡れていて、かなり発汗したようだった。

「汗を拭いて着替えた方が良さそうですね」

「いつそ、風呂に入りたい」

「今日は我慢してください。着替えと体を拭く物を、持ってきてきますから」

「待つて」

踵を返しかけた私は、相手に向き直る。

「何か欲しいものでも？」

「…そうじゃなくて」

「？」

「その…ありがとう。駐車場で俺を助けてくれて。看病してくれて」

予想もしない相手の素直なお礼の言葉に、驚かされた。

「本当は、俺と関わりたくなかっただろ？」

その言い方が気に入らなくて、彼の額にデコピンを食らわせた。

そんなに強くは叩いていないけど、相手は驚いたようだった。

「あんなことされたら、気まずいに決まってるじゃないですか。好

きでもない人に、キスなんて、軽々しくするものじゃありません！」

「…好きならいいの？」

筋違いの事を言われ、自分の眉間に深い皺が寄るのが分かる。

「ダ・メ・で・す！キスしたいなら、恋人にすればいいじゃないで

すか。自分の行動を、きちんと反省してくださいよね」

「…やり過ぎたとは思っけど、吉良にキスした事は悪いと思っ
てない」

頭が痛くなってきた。

この人の理論が理解できない。

そもそも反省してないし、あまつさえ私を呼び捨てにしている。

「貴方、不眠症で思考回路がおかしくなってるんじゃないですか？」
「…ああ、そうかも…仕事であり得ない大きなミスするし、自分の感情制御が出来ないんだよね」

こともなげに、さらりと怖い事を榊紫苑は言う。

ピピピッと、電子体温計が鳴り、榊紫苑は体温計を抜いて私に差し出す。

受け取った体温計の指し示す体温は、三十六度八分。

「下がった？」

「ええ。でも、ちゃんと休んで下さ…ちょっと！」

私がいる側とは反対のベッドサイドから降りた榊紫苑は、部屋の扉に向かって歩き出す。

「風呂入る」

「人の話、これっぽっちも聞いてないんですか!？」

慌てて先回りして榊紫苑の前に立ちはだかれば、刹那、腕を掴まれたと思っただけなら視界が大きく揺らいた。

気付けば天井と榊紫苑の顔が見え、ベッドに体を押さえつけられていた。私の上に榊紫苑が馬乗りになっている。

慌てて暴れてみても、びくともしない。

覗きこむ男の表情は、それまで見た事のない色気のある顔で、思わず息を飲んだ。

何て言うのだろう、エロい？大人の魅力というか、情事に誘っているような淫靡な感じが、背筋をゾクゾクさせる。

やだ。こういうものすごく苦手で、全身に鳥肌が…。

「な…何してるんですかっ！」

「…キスしていい？」

「だ、駄目に決まってるじゃないですか！」

やっぱり人の話をまるで聞いてない。頭か耳が、絶対ザルになっちゃってる。

しかも、無駄に色気がムンムンしてる！

ここで負けたら、昨日より酷い事が起きる予感がひしひしする。

絶対、負けちゃ駄目だ、私。

「仕事でミスしたの、吉良のせいだよ？」

「どうして私が…！」

「仕事中、吉良の顔がずっと浮かんで、仕事に手がつかないんだ」

「勝手に思い浮かべないでください。出演料とりますよ」

「体で払うよ」

「意味分かりませんかっ！」

「分かるように実演しようか？」

「そういう意味じゃあり…っ！」

左の首筋に、柔らかな感触が触れたと同時に、軽く突き刺すような痛みが走る。

思わず、全身がびくりとはねた。

“首に、キ、キスされたっ！？”

「貴女の匂い、好きなんだ」

耳朶もとで淫靡な声で囁かれ、一層、背筋に走った悪寒が悪化する。

なのに蟲惑的で、まるで恋人にでも語るかのような甘い響きに、

自分の頬が熱を持つ。

” な、なんなの！？この、エロフェロモン垂れ流し！？ ”

この男は、危険すぎる。

天性の女ったらしだ。

相手のあまりの色気に気を取られていたら、耳朵を甘咬みされた上に、舌でいやらしくなぞりあげられた。

「いやあ」

不意を突いて襲ってきた衝撃に、思わず自分の口から洩れた声が酷くあの時の声に似ていて恥ずかしくなる。

それ以上に、脊髄からゾクゾクとした震えが走って身体が強張る。

「随分、そそる声だね？」

「ちよ、ちよっと！セクハラで訴えますよ、榊さんっ！」

そのまま首筋にまた口づけてきた相手を、精一杯の虚勢を張って相手を引き剥がす。

てつきり、からかって笑っているのだと思った相手には、笑顔なんてなかった。

真摯に見つめてくる青灰色の瞳には、遊び心なんてなくて、昨日のキスの最中に見せた雄々しい男の表情に、思わず怖くなった。

榊慣れをしていない女の子なら、うっかりその魅力にそのまま流されていたのかもしれない。

「貴女が頭から離れない。泣きそうな貴女の表情が、俺をおかしくさせる…今だって、貴方に触れたくて、キスしたくなる」

逃げたいのに、体はがっちり押さえられて身動きが取れない。で

も、相手の頭のネジは飛んでいるから、全然、会話にならない。
本当に口付ける気なのか、迫って来る榊紫苑に私の恐怖心はマッ
クスに達する。

“させるものですかっ！”

「がっ！」

次の瞬間、榊紫苑は顔面を押さえて私から離れた。

私の頭突きが、彼の高い鼻梁にクリーンヒットしたのだ。

慌てて私は起き上がって、彼から離れる。

「貴方は寝てないから、頭のネジがぶっ飛んで、アホになってるだ
けですっ！」

ベッドの上に仰向けに転がった榊紫苑は、しばらくじっとしてい
た。

「っう…頭突きとか、マジか…」

ゆっくり手を下ろし、天井を見ながらぼんやりしていたけれど、
突然、榊紫苑は何を思ったか笑い出した。

“どうしよう…頭揺らしたから、余計におかしくなっちゃった!?”

「ああ、そうか。…ちよつとわかったよ」

一人で納得したように、相手は私を見て笑う。

思わず、異様な光景に私は一步後ずさってしまふ。

頭のネジ…の説明で、納得してくれたのかしら？それとも今の衝

撃で本当にアホに…？

「な、何がわかったんですか？」

「泣き顔のままの貴女が、嫌だったんだ…泣かせたくない」

「はい？」

やっぱり、脳に受けたダメージが大きかったのかしら。言っている事とやっている事の整合性が取れていない。

「それと吉良からする匂い、気分が落ち着く」

どう見ても、鎮静してリラックスしているようには、見えないけど。

むしろ、麝香ムスクでも嗅いでしまったかのような、エロスを醸し出していたのに。

もしかして、それが彼の素？

“顔が商売道具で、女の扱いに長けていて…榊紫苑の仕事って、ホスト的な何か！？”

そう言えば、何時もクリニクに来るは深夜過ぎだったり、明け方だったり。微妙な時間だったわ。

「…なんか、すっきりした」

私がモヤモヤしだしたのに、勝手に自己完結した美形男は、ベッドから体を起こす。

「すっきりついでに、やっぱり風呂」

「…もう、勝手に入っちゃってください」

止める気もなくなった私は、ため息とともに俯き、部屋から出て行く相手を見送った。

「…はあ。とりあえず、シーツも汗で濡れてるから換えておかないと。それから…」

効果はいまいち期待できないけれど、ルームフレグランスを調香しておこう。

これ以上、不眠が続いて、おかしなことをされても困るから、試しに持たせてみよう。

美菜先生も確か、同じエッセンシャルオイルを持っていたから、それを借りればすぐ作れるし。

お粥はとりあえずキッチンに下げて…。

そんなことを考えながら、小さな土鍋の乗った盆を持ってキッチンへ戻る。

「あら、しーちゃん食べなかつたの？」

キッチンで冷蔵庫を開いていた美菜先生が、私を見てそう尋ねる。

「熱が下がったから、お風呂に入るそうです。あ、美菜先生、調香したいのでエッセンシャルオイルを貸してもらっても良いですか？」

「ええ、それは構わないけど…」

美菜先生が、じっと私を見つめてくる。

しかも、表情が険しい。

「なにか…？」

美菜先生は、自分の左首筋に指をあてる。

「此处、付いてますわよ。キスマーク」

最初、何の事が分からず首を捻り、冷蔵庫のステンレスに映し出された自分の左首筋を確認する。

そこには、小さく丸い赤い後がくつきりがある。

しかも、服でも髪でも隠しきれない所に。

それは、榊紫苑が口づけてきた場所だった。

とつさに自分の首筋に手を当てる。

自分の血の気が、一気に引くのが分かる。

「しーちゃんったら、あたくしの警告に逆らうなんて、良い度胸じゃありません事？」

そんなことを美菜先生が言っていたけれど、私の耳にはあまり届かなかった。

“なんて事をするのよ、あのエロ倒錯男！キスより性質が悪いじゃないのよっ！”

次第に、ふつふつと怒りがこみ上げていた。

「…っ、榊紫苑の莫迦ああああっ！」

その絶叫は、浴室にいた榊紫苑の耳にも届くほどだった。

30 (後書き)

文字通り、いろんな意味での実力行使の力技が此処に…

イロイロ期待された方、すみません。一応、このお話はコメディなので…ヒロインがヘッドバッドと云う暴挙をお許しくださいます。

第七章 時にはハンターの様に

「…っ、榊紫苑の莫迦ああああっ！」

シャワーを浴びている最中、そんな吉良の絶叫がかすかに聞こえた。

声の調子から、かなり激怒しているのは明白。

大方、首筋に付けた痕にでも気付いたのだろう。

降り注ぐ湯に打たれながら、俺は自然に口元が緩んだ。

見える場所に、わざと残したのだ。

しばらく困ればいい。

俺の行動を、無視できなくなるくらい。

俺の事が、脳裏から離れられなくなるくらい。

§

シャワーを浴びた後、さっき寝ていた客室に仕事用の携帯電話を忘れていた事に気づき、俺は取りに戻った。

扉を開けた瞬間、部屋からさっきまではなかった芳香が漂う。

吉良の纏う匂いと同じ香りとはほぼ同じである事に、すぐに気付い

た。

中を見ればそこには、吉良がスプレーボトルで何かを噴霧していた。

彼女の首には、美菜様のスカーフが巻かれている。

応急的に、痕を隠したのだと分かる。

「…居たの？」

あのまま怒って帰ったものだと思っていた俺は、彼女が居る事に驚いた。意外に神経が太いのか？

床に丸めて置いてあったベッドマットと、シーツを吉良は拾い上げる。

ベッドに視線を向ければ、シーツが変わっていた。

「居ますよ。仕事ですから」

「仕事？」

「特別労働として、院長からお給料をもらうことになったので、どんなに貴方が嫌でも、お金の分だけは働きます」

「給料って、いくら？」

「今回は、通常の看護師の時間給の三倍です。貴方から受けたセクハラを考えれば、安いくらいです」

淡々と言葉を返す吉良に、見えない鋭い棘を感じる。

余程、頭に來ているのだろう。

それでも仕事をこなすのは、仕事に対するプライドなのか、その時間給のためなのか、俺には良く分からない。

そもそも、看護師の時間給なんて俺は知らない。

「…今回は、ってことは、何度かそう言う勤務を？」

「貴方の診察の時は、全部、特別勤務です」

「…吉良って、どうして俺の診察に立ち会うことにしたの？」
「給料が良かったからです。老後を考えたら、蓄えは多くしておかないと」

“二十代で既に老後の心配？”

何というか、吉良の考え方は独創的だ。

「金を持っている男と結婚すれば、別にそんな心配しなくてもいいじゃないの？」

「一人で生きていくって決めたので、結婚も恋愛も、要りません」

そう言った彼女の言葉には、かなり強い決意が含まれているのを感じた。

一瞬、垣間見えた、誰も寄せ付けない雰囲気、その言葉の根底にある物の根深さを語っているようでもあった。

「彼氏も？」

「いたら楽しい事も増えますけど、居なくても不自由する事がないので。今は欲しいとも感じません」

彼女のその一言が、俺の中に黒い靄を作る。

吉良はシーツを抱えながら、部屋の出入り口を塞ぐように立っていた俺の前に立つ。

そして、手に持っていたスプレーボトルを俺に差し出す。

何でもない、小さなスプレーボトルの中には、透明な液体がたくさん入っている。

「今日、此処で休んで効果があるなら、このルームフレグランスを寝室で使ってください」

「この部屋の香りと同じもの？」

「ええ」

「これも仕事の一環？」

「…そうなりますね」

少し間を置いて答えた吉良は、ずり落ちそうな剥がしたシーツ類を抱え直し、ボトルを手にした手を更に俺の前に付きだす。

仕事だから。

そんなことは当然のことなのに、気に入らない。

当然の様になされる彼女の気遣い。

仕事となった途端に、先程の気まずさすらなかった事のように包み隠して俺と向き合う、大人の対応、に、酷くイライラする。

「…榊さん？」

「あ、ああ。ありがとう」

俺は差し出されたフレグランスボトルに、そつと手をのばす。

そして吉良の手ごと掴んで彼女の体を引き寄せせる。

バランスを崩した吉良は、持っていたシーツを落とす。

俺は驚いている吉良の腰に腕を回し、そのまま、彼女の顎を捉えて唇を重ねる。

「んんっ！」

床に、ボトルが落ちる音がする。

吉良が俺を押し退けようと抵抗すれば、俺は彼女の唇をこじ開け、深く口づける。

逃れれば追い、誘い出して絡めて、思考を遮断するように腔をゆっくり犯していく。

吉良の抵抗は次第に消えていき、代わりに耐えるように俺のシヤ

ッをきつく握りしめる。

触れては重なる唇の隙間から、苦しげに零れる吉良の吐息は甘く
気だるいものになる。

重ね交差する熱も、上気する呼吸も、堪えるように苦悶する表情
も、劣情を駆り立てる。

“…そういや、ここ健斗の家だったな”

吉良との口付けの最中、先の行為を望み片手で部屋の扉を閉じ、鍵をかけた時、わずかな理性が俺に重要な事を教える。

だが、頭の中で派手な警鐘が鳴るのに、心地良く心を浸食する快楽に抗えない。

いつもなら、主導権は自分にある。快楽に溺れることなく、どこか一線を引いて冷静な自分がいる。

けれど、吉良とのキスは違う。

駆け引きを忘れ、彼女の不慣れな口付けに何故だか溺れていく。

吉良の体を壁に押し付け、長く口づけを繰り返しながら、彼女の首に巻かれていたスカーフを緩めて解く。

露わになった首筋にある、まだ鮮やかな赤みをさした痣に唇を寄せる。

いつもの淡く芳香するラベンダーの香り。なのに、今日のそれは貪りつきたくなるほど甘い果実の香のようでもあった。酷く、劣情をそそる。

彼女の体を太ももから上へとゆるゆると撫でながらひらひらとしたチュニツクの内側へ手を忍ばせる。同時に、残した意味を確かめるように自分で作った赤い華を舌で撫であげれば、吉良は媚態を帯びた短い悲鳴を上げ、彼女の体がびくりと震える。

キャミソールの内側から彼女の肌は滑らかで柔らかく、それでいて贅がない。白衣越しにスタイルが良いと思っていたけれど、実際、そのくびれた腰のラインは申し分のない曲線を描く。

ゆっくりと彼女の体のラインを確かめながら上昇する俺の手を、吉良が掴んだ。

「…や…です」

顔を上げれば、朱に染まった顔の吉良が、涙が滲む双眸で俺を睨みあげる。

表情はどこか熱に浮かされて色香を映し、俺の心を揺さぶる。

「いい加減に…してください…美菜先生と院長に報告…しますよ」「報告なんて、するまでもないよ。どうせ、吉良の喘ぐ声が部屋の外に漏れるから」

「よ、他所様の家で、何をするつもりですか…節操なし…なんで…こんなキスをするんですか」

吉良は、体に力が入らないのか、弱々しい声でそう窺^{たしな}めて尋ねてきた。

「仕事も手に付かなくなるくらい、理性食い破るくらい、俺の中に貴女が居るから」

寝不足で思考がおかしくなった訳でもなければ、美菜様の電話が全ての発端でもない。

あれは、引き金にすぎなかったのだと分かる。

美菜様に牽制された時、頭では理解できても、感情が吉良との関わりを断つ事を拒絶していた。

それは、吉良が俺にとって、都合のよい有能な看護師だったからではない。

俺は仕事と私生活の境界線さえ見えないほど、ずっと何かを演じていた。

人に会う度、相手に合わせて自分を演じて心を隠していた。特に女性には。

人に裏切られて、捨てられるのは一度だけで十分。女など信用できなかつた。

利用価値を見出せなくなつたからと、幼い俺を簡単に捨てて消えた母親の呪縛が、無意識に俺に鎧をまとわせる。

誰にも心を開かない。覗かせない。

それは、俺の事を一番、理解しているであろう健斗にさえ。

本当の自分が何なのか、自分の心が本当に感じている事が分からなくなるくらい、心が麻痺をしていた。

なのに、一人になるのはどうしようもなく怖い。

孤独は不安で、一人で眠る事さえできない。

睡眠薬を使つても、徐々に効かなくなつて薬の量が増えるばかりで、眠れない。

眠れなければ、誰かと過ごして不安を消すしかない。

自分が誰とも分からない何かを演じたまま、息を抜く場所すらわからない。

そんな自分に、どこかでウンザリしていた。

『セクハラで訴えますよ？』

出会つて間もない吉良に言われた一言。

上坂伊織でもなく、榊の一族としてでもなく、ただの『榊紫苑』としての俺を見て反応を返した彼女に、俺は安堵した。

愛想笑いでも作り笑いでもなく、心の底から自然にその時、笑えた。

事務的な会話がほとんどだったけど、最初と変わらない接し方の彼女と会話するわずかな時間だけ、自分を取り繕わなくて良かった。そして、彼女が纏う香りが、仕事の事も他所に置いて、眠ろうと焦燥する気持ちも減らしてくれた。

診療の時間の間だけが、俺の安息だった。

「俺、貴女が気に入っている」

彼女への感情を言葉にするなら、それは『好意』だ。

他の女には芽生えなかった、女性の中でただ一人、吉良だけに芽生えたもの。

「……誰が、誰を……？」

「俺が、貴女を」

吉良は不思議そうな顔をしていた。理解できていないのだろう。鋭いようできて鈍感な彼女には、難しいのか。

「……記憶のどこをどう探しても、その選択肢に行きつく思い出がないんですけど」

困惑したように、至極真面目に吉良はそう答えた。

「そう？俺としては、今の給料の倍出すから、健斗の所を辞めて俺専属の看護師になってもらいたいくらいだけど」

途端に、吉良の表情が不快に歪む。

「ヘッドハンティングですか？貴方、院長の従兄弟でしょ？何考えているんですか。看護師なら、他を当たってください」

「俺は貴女だから欲しいんだよ」

「嫌です」

「即答？」

「貴方が大っ嫌いなので、無理です」

間髪いれず率直に言葉を返した吉良に、思わず苦笑が漏れる。

激しく嫌われたものだ。それで引き下がるつもりもないけれど。

「今はそれでも良いよ」

「今も未来も、変わるつもりはありません。分かっただら、離れてください」

逃げ場のない拘束された状況でも、彼女は視線を逸らさない。

まるで、逃げたら負けると言わんばかりに、睨むように。

あのまま体に教え込んで籠絡した方が良かったのかもと、少し後悔したけれど、簡単に靡かれたら今すぐに吉良への興味を失ってしまいたい。まいそうだったのも事実。

それに、あの泣き出しそうな顔は見たくない。じっくり攻め落とすしかないだろう。

健斗にすら女として靡かない吉良を落としたり、従兄弟はどういう顔をするのか。

俺を拒む吉良が、俺に堕ちたらどう変わるのか。

想像するだけで胸が躍る。しばらくは、退屈しなくて済みそうだ。

「俺は、欲しいものは諦めない主義だから、覚悟してね」

彼女に軽く口づけて挑発的に笑えば、吉良は「貴方なんて、大っ嫌いっ！」と絶叫した。

§

その後、吉良は逃げるように榊邸を後にし、入れ替わるように屋敷の主、榊健斗が帰宅した。

美菜様は吉良を車で家に送る為に外出し、不在だった。

健斗は吉良が作り置きした料理で遅い夕食を済ませ、リビングのソファ―に腰を下ろし、英字の医療雑誌を読んでいる。

俺は健斗の隣に腰を下ろした。

「…お前、吉良にまた手を出したってな？あれには、遊びで手を出すなって言っただろ」

雑誌に目を向けたまま、健斗は呆れたように言う。

「本気なら良い訳？」

健斗が俺をじろりと見る。莫迦な事を言つたと眼が訴えかけてくる。

「なあ、健斗。俺に吉良をくれよ」

「…お前から親子は同じ事を言いやがるな。吉良は物じゃねえ」

まるで射殺すような鋭い瞳が、レンズ越しに俺を貫く。

比較対象とされたくない人間と同等に扱われた健斗の言葉に、自

分の表情が硬くなるのを感じた。

「…どういう意味だよ」

「お前の親父も、三年前、吉良をよこせと言いやがった。無論、断つたがな」

二重の意味で、俺は驚いた。

絶縁状態の俺の父は、榊一族の本家の長。医療法人『聖心会』の現会長でもある。

日本の医師会にも絶大な影響力を持つ会長の要請を、傘下の医者が断ることなど、医者としての死活問題。

そして親父が吉良を知り、彼女を欲したという事実は、少なからず俺を動揺させた。

「まあ、お前の親父は吉良を看護師として、純粹に手元に残したかったらしいがな」

「あの親父が？」

「吉良は元々、優秀な『器械出し』だったからな」
「器械出し？」

聞き慣れない言葉に、俺は首をかしげる。

「オペで、メスをはじめとする手術器械を医者に手渡す仕事だ。『いずみ病院』で会長一派が高難度のオペをする時には、必ず吉良が指名された」

医療にも榊一族の内情にも全く関知しない俺には、良くは分らないが、吉良が親父に気に入られているというのは分かった。

人材コレクターの親父が欲しがる人間だ、吉良は俺が思うより有能なのかもしれない。

「吉良は元々、本院に勤めてたのか？」

「ああ。あいつがオペに入ると、いちいち指図しなくても器械が出てくるから、無駄な時間がなくなって医者 of 集中力を妨げない。だから、オペがしやすい」

「すごい事なのか？」

「退職をしてオペから退いても、未だに『聖心会』や他の病院からもヘッドハンティングされるくらいにはな」

さつき、吉良が俺の言葉をヘッドハンティングと勘違いし、露骨に不快感を示した理由が分かった。

「：何でそんな有能な人が、健斗の所で働いているんだ？」

「俺と美菜に勧誘されて、逆らえると思ってるのか？」

健斗は嘘か真かそう嘯き、鼻で笑う。

確かに強力な二人に勧誘されたら、逆らえないだろうが、腑に落ちないこともある。

「吉良も健斗も、親父の命令を無碍にして平気なのか？」

「紫苑、切り札ってのは、何時使うか知ってるか？」

不敵に自信たっぷり唇の端を歪めた従兄弟に、俺はため息をつく。

裏で何かやったのだ。

しかも、医療界の首領でさえ引き下がるほどの何かを盾に。

「会長にも、お前にもくれてやるつもりはない。とつとと諦めて、他の女でも探せ」

「嫌だ」

「餓鬼か、お前。会長や凱と対峙も出来ない癖に、吉良を手に入れられると思うなよ?」

凱：その名前に、俺の心が酷く澱む。

奴は俺の三番目の異母兄で、歳は健斗と同じ、脳外科医で今はアメリカにいらしい。

正妻の子供である凱は、妾腹の俺が気に入らなかつたらしく、俺は散々いびられた。

凱は健斗と歳が同じこともあり、何かと比較対照されてきたせいか仲が悪く、健斗は意趣返ししか俺に何かと目をかけてくれた。

他の異母兄弟とも仲の悪かつた俺にとっては、健斗の方が実の兄貴より親しみやすい。

「あの腹黒の話なんかするな、胸糞悪い」

奴の事を思い出すと、自分の感情が歪んで黒くなる。

あいつの執拗な嫌がらせのおかげで、俺には癒えない心の傷と忘れようもない根深い恨みがある。

「お前、ドス効かせて喋るな。おまけに人相まで悪くなってるぞ」

「あいつ思い出すと、悪意しか芽生えないんだよね」

指摘されたので、一応、改めたが、俺の不愉快指数は奴のせいであがりっぱなしだ。

「だいたい、親父はいざ知らず、何で凱まで引き合いに出すんだ。嫌がらせか」

「吉良は凱の、一番のお気に入りでもあつたからな」

俺の腹の底で、黒い澱がまた沈殿する。

健斗は手に持っていた雑誌を閉じ、ガラステーブルの上に置くと、代わりに煙草を手取る。

「昔、あいつらが出来ていると言う噂もあったが、吉良も凱もその事について絶対に口を割らねえ。二人の態度を見るに、多少なりとも浅からぬ仲なのは事実だ」

煙草に火をつけ、紫煙を吐きだした健斗は、煙草の先端から揺れ流れる煙をじっと見つめた。

「凱の手の付いた女、お前抱けるのか？」

露骨な問いかけに、自分に笑みが浮かんだ。
それが失笑だと分かる。

「そんな女を、何で健斗が大事に出来る訳？」

俺と同等、いや、それ以上に凱と健斗の間には確執がある。

健斗の言葉が事実なら、この従兄弟は絶対に吉良を重用しない。

「美菜が惚れこんだ女なら、凱の昔の女だろうと愛せる」

妻である美菜様への惚気なのか、吉良への恋慕の自白なのか。
予想しない返答に、俺は何とも言えない気分になった。

“何だ、これ…”

不意に、胸が圧迫されるような感覚に襲われる。

痛いような苦しいような、胸に何か重たく大きな物が膨れ上がる様だった。

何故自分がそんな感覚に襲われるのか、理解できない。

「…それ、本気か？」

訊ねてみても、健斗の読み取れない表情と態度に、全く判断がつかない。

大方、健斗がこういうもの言いをするときは、問いかけた答えを期待できないのだ。

本人に、答える意思がない時の対応だ。深く突っ込んだ所で、健斗は答えない。

しかも、はぐらかしとは言え、健斗の口から不味い言葉を色々と聞いてしまった。

「…美菜様が惚れこんでいるって…吉良の事だよな？」

「他に誰がいる。美菜の最優先事項は、俺でも自分自身でもない、吉良だ。吉良にふさわしくないと思った男を、徹底的に排除するために、美菜は俺まで利用した盲愛っぷりだ」

ひんやりとしたものが、背筋を走る。

まずい。吉良が其処まで美菜様に好まれているのは、想定外だ。

“今ですらこの様なのに、吉良向けの報復をされたら、俺：死ぬんじゃないか？”

「もしかしなくても、美菜様から吉良を愛人にしろとか言われてないよな？」

「なんだ、美菜から聞いたのか？」

煙草を啜えながら、健斗は何でもない事のように訊ねてくる。

「俺の愛人になれば、吉良を他の男に取られる心配はない。しかも俺の物は自分の物つてのが、あいつの持論だ。形は何であれ、手に入れられれば良いんだとよ」

独裁者の発想なのか、盲目的な愛情故の発想なのか。

健斗も理解しがたいのか、困惑した顔をしていた。

「女に命令されて女を口説くなんて、らしくないだろ」

「それを口実に、欲しい女が手に入るなら煽られたふりをするのも悪くない」

「お前……」

途端にしれっと答える健斗に、その気がある事を知る。

美菜様と結婚をして女遊びを一切やめた男だが、どう転んでも紳士の間人だ。一人の女で満足できるほど家庭的でもなければ、保守的でもない。

しかも、欲しい女、ときた。

「何にせよ、吉良はお前の手に余る。分かったら吉良で遊ぶな。本気なら尚更。美菜や会長に確実に潰されるぞ」

手に余るところか、俺の苦手な人間リストの二トップが、見事に揃い踏みで吉良の外堀を固めている。

「吉良が俺に惚れたら問題はないんだろ？」

健斗はゆつくりと煙草の煙を吸い込み、指で挟んだ煙草を下ろした後、俺の方を向いて紫煙を吹き掛けてきた。

俺は顔をそむけ、顔の近くにある苦手な紫煙を手で払う。

刹那、胸倉を掴まれ健斗に引き寄せられた。

何事かと思つて相手を睨めば、健斗が唇の端を吊り上げて不敵に笑う。

「本気で惚れてもいない癖に、ふざけた事ぬかすな。吉良を泣かせたら、お前だろうと破滅させるぞ」

いつもの皮肉な笑顔のまま、吐きだされたのは怒り剥き出しの低い声音。

最後の言葉には、間違う事なき殺意の念が含まれていた。

その眼光にも、普段の人をくつて遊ぶ戯れの情は一切ない。

本気で俺を殺しかねない、従兄弟の警告に、思わず俺は息をのむ。不機嫌になるのはしよつちゆうだが、感情をむき出しにして怒りを表現する事は殆どない健斗の怒り。

「お前、もしかして吉良の事」

「ああ、愛している。…分かったら、これ以上、俺の神経逆撫でするんじゃないねえ」

言いかけた俺の言葉を、衝撃的な発言で封じ込めた健斗は、容赦ない力で俺を突き放してそのままリビングから出て行った。

残された俺は、しばらく思考が止まったまま、身動きさえ取れなかった。

34 (後書き)

すいません。タイトルナンバーが間違っていましたので修正しました (<|>)

§

思考が巡る。

ぐるぐると、俺の感情を絡め取りながら、螺旋を描いて。

仕事が全く持って手に付かなくなったことから、今日の厄災は始まった。

親父が吉良の実力をかっつているとか、吉良が凱とただならぬ仲だとか、美菜様のお気に入りだとか…とどめに、健斗が吉良を愛していると言るとか…。

矢継ぎ早に振り込んでくる情報。

今日はいったい何だ。

運命なんていう下らない時間軸が、吉良に関わるなどでも警告しているのか。

俺はただ、気負わずに穏やかに居られる時間が欲しいだけ。

それさえも、許さないなどという傲慢な権限が、一体誰に、何処にあるという。

“くそっ…何だってこんなに苛々するんだ”

健斗の宣言を聞いた時、自分で想像するよりも酷く心にダメージが残った。

言葉を失うほどに、己の時を止めてしまうほどに。

従兄弟が吉良を同僚以上に見ていることなど、最初から分かっていたのに。

臆面もなく言い切った健斗に驚き、言葉を失った。
お前には絶対に渡さないと言わんばかりの態度に、次第に苛立ちが募った。

“お前の女でもない癖に”

心の中でそう悪態づき、俺は、ベッドの上で寝がえりを打つ。
部屋に淡く立ちこめるハーブの香り。

吉良が調香したと言う、ルームフレグランスの匂い。

ラベンダーとマンダリンが混ざったその香りを、瞳を閉じてゆっくりと鼻梁に取り込んでみる。

ラベンダーの作用か、少しだけささくれ立った気持ちちが鎮静する。

“確かに気休め程度ではあるのかもな…”

劇的な効果はなくとも、緩やかな効き目はあるようだった。

だが、吉良の傍にいるような安寧はない。

吉良が纏っている香りとは、わずかに違うからか。彼女が使用しているシャンプーやボディーソープの仄かな香りが足りない。俺は他の人に比べて匂いには敏感な性質だから、そう言う小さな匂いの変化でも気になる。

彼女から漂う芳香は、もっとしとやかで甘美だ。

例えるなら花の様だ。楚々としていながら、匂い立つ香りで蝶や蜂を誘い込む。

吉良の香りは俺を優しく抱擁して、柔らかな女の肌と人の温もりを想像させる。決して淫靡ではないのに、俺の中から欠落していた欲情を呼び起こす。

触れて蜜かしのよの甘さを知ったら幾度だって吉良を求めずにはいられない中毒性の高い媚薬の様。

それを思えば、此処に宿る香りは人工香料の様で他人行儀。

仕事と割り切って俺に接する彼女と同じ、そっけない匂い。そう思うと、無性に苛立つ。

彼女が仕事なのは当然で、俺は穏やかに過ごせればそれでよかったのに。

吉良を手に入れたい。

まるで子供がおもちゃを欲しがる時の様な、わがままな感情ばかりが湧いてくる。

欲しくて、欲しくてたまらない。

俺だけを見て、俺の為だけに心を向けて欲しい。

そう願う。

けれど、どこかでそれを拒絶する。

“所詮、女なんてあの女と同じ。慾深く、利己主義で、男も子供も己を飾るものしか見ない。信用などできるか”

相反する思いが、俺のなかで犇めく。

飽きた玩具を捨てるように、他の男と消えた母の影に、思わず俺はベッドを殴りつける。

スプリングが重く鈍い音で軋む。

あの女がとつた自堕落な行動のツケは、全て榊本家に押し込められた俺が受けた。

二度と、本家の敷居など跨ぎたくもない。

あの苦痛ばかりの安らぎのない日々に追いやった母を、赦さない。

その母と同じ女という生き物を、信用などしない。

どうせ、吉良も同じだ。

本性など暴いてみればあの女と変わらない。

そう思い、要らぬと拒めば、どこかで欲しいと望む。

その終わりを知らない葛藤が、俺の中に苛立ちを募らせる。

“結局のところ、俺は吉良をどうしたい?”

自分の本心が分からない。

何故、他の女には感じなかった物を、吉良にだけは感じるのだから。

良い思いも、不愉快な思いも。

だから…俺は惑ったまま。

終わりのない螺旋思考に落ちて…。

第八章 普段おとなしい人間はキレると危険

人生稀に見る怒りを爆発させてから、一日が過ぎた。

私、怒っても、翌日以降にその怒りを持続させた事がなかったんだけど、今回はちよつと特殊みたい。

忘れたくても、鎖骨に近い首筋に残された消えない痕が、私にその時の事を思い出させる。時間が経っているのに、榊紫苑に触れられていた感触がまだ私の中に残っているみたいで、思わず身体がゾクリと震える。

一度ならず二度までも…一度なら、なかった事に出来た。榊のいつもの戯れが少しだけ過剰だっただけだつて。

なのに、お風呂上りに迫ってきた二度目のアレは危うすぎる。

頭の中は嫌だつて訴えているのに、身体が榊紫苑のキスに抗えなかった。

あの人のキスは危険。手慣れていると言つか、巧いのだと思う。抗う気持ちさえ削いでしまうほど。

節操のない榊紫苑も嫌だったけど、そんな男の口付けに一瞬でも囚われてしまった自分はもっと嫌で、許せなかった。

心のささくれ立ったものが嫌でも刺激されて、恥ずかしいよりも苛立ちが止まらない。

“あ、まずい…眉間にしわが寄ってる”

鏡を見なくても、自分の眉間に深く刻まれる不愉快ゲージが分か

る。

大きく深呼吸をして気分を切り替え、掃除に集中する。

「あげはちゃ〜んっ！」

朝、クリニックの待合室で掃除機をかけていた私に、受付事務員の藤堂絢子さんが私にタックルをかけるように抱きついた。

「うわっ！あ、絢子さん、ど、どうしたんですかっ!？」

危うく倒れそうになりながら、掃除機の電源を切って、背後にしがみついている絢子さんを見る。

十四歳になる息子が居るとは思えないナイスバディな絢子さんは、更衣もせず私服姿で、半泣き状態で私を見上げる。

「うう…伊織があ…」

「はい？伊織??」

「伊織が入院しちゃったのお」

「…伊織って…何処のですか？」

「上坂伊織よおっ！」

要領を得ない私にギュッと抱きついて、お気に入りの俳優の名前を叫んだ絢子さんは、さめざめと泣きはじめる。

「ああ、泣かないで下さい、絢子さんっ！」

「…朝っぱらから、百合の世界か？」

コーヒークップを片手に、怪訝そうな顔をして院長が診療室から顔を見せれば、絢子さんは院長を睨む。

「今日休みますう」

「大泣きしながら出勤出来るくらい元気な奴に、休暇なんざやれるか」

「愛しい人のピンチなんですう」

「どうせアイドルとか言う、虚像だろうが」

「伊織は俳優ですっ！」

泣くことも忘れてそう力説した絢子さんに、院長は鼻で笑う。

「で、そのお前の愛しい俳優とやらは、どうピンチなんだ？」

「昨日の撮影中に高熱で倒れて、病院に搬送されちゃったんですよ。過労だって…だから、しばらく入院加療するって報道が」

「体調管理もできない野郎、一人前とは言えねえな」

いつもながらの辛口の院長に、絢子さんは恨めしそくに院長を睨む。

「売れっ子なんだから、色々忙しいんですっ」

「ま、お俺には関係ない。そいつの女でもないお前も関係ない。仕事はやれ。以上だ」

「きいいいっ！鬼っ！」

「あ、絢子さん、落ち着いて…」

「吉良、ちよつと来い。絢子は代わりに掃除してる」

「悪魔っ！人でなし！あんたには優しさが無いのかっ！」

「あると思うのか？」

鼻で笑った院長に、絢子さんはプリプリ怒っている。

「それが終わったら、とつとメイク直せよ？付け睫毛が片方外れてるぞ」

「！！！！そんな大事なことは、早く言えっ、この野郎！」

言葉遣いがすっかり悪くなった絢子さんは、低く怒鳴って、慌てて化粧室に走っていく。

いつもながら、嵐の様な迫力美人。

すっかり地が出ている絢子さんが、実は元ヤンだったのは一応、彼女の中では秘密事項なんだけど、院長のせいでスタッフには周知の事実になってしまっている。

イケメン好きな絢子さんだけど、年下は好きだけど、年上には興味が湧かないらしい。だから年上の院長にも食指が向かないのだとか。

事あるごとに今みたいなやりとりがあるけれど、診察時間帯に口論になることはないし、険悪な雰囲気を引きずる事もない。

お互い大人だから、その辺はともドライ。

絢子さんは美菜先生が他所の病院から引き抜いてきただけあって、医療事務としての能力スキルも、接客的な能力もとても高い。

そして何より、美菜先生と院長好みの美人。

私以外はみんな美形なの、この職場。だから仕事中、私の容姿は普通すぎて浮くのよね。

「おい、吉良」

彼女の後姿を見つめていた私の傍に、いつの間にか院長が立っていた。

しかも、顔が異常に近い。

触れてしまいそうなほどの至近距離に、クリニックの美形筆頭の顔があつて、思わず私は体をのけぞらせた。

36 く吉良sideく(後書き)

いつもお読みいただきありがとうございます。

寒くなってまいりましたので、皆様、お風邪を召しませんよう、
自愛くださいませ。

「な、なんですか…院長」

「上坂伊織って野郎、お前どう思う？」

そう問われ、私は首をかしげる。

どうと言われても、絢子さんが大ファンの‘かなり有名な若手俳優’と言う事しか知らないし、顔も良く覚えていない。

フルネームを言われて、ようやく誰かわかるくらい。

私、仕事以外の環境で人の顔と名前を覚えるのが苦手で、芸能関係の人の事が全く分からない。上坂伊織という人は、絢子さんがいろいろ話をしてくれるから、何となく記憶にあるけど、仕事に直結しない人は手当たり次第忘れていくの。

その代わり、仕事で携わった人の事は細部まで覚えているの。

だからよく、街の中で久しぶりって声を掛けられても、誰だか解らない人が居て困るの。院長には、日頃からもう少し浅く広く人間を覚える努力をしるって叱られるけど、どうやっても覚えられなくて…。

あ、そう言えば上坂伊織って、良く週刊誌にゴシップ記事を書かれているとか、絢子さんが言っていたっけ。

貞操観念が総崩れで、無駄に顔だけは良かったという印象だけがある。

“…あれ…なんだか似たような印象の人間が、最近、身近にいたよ
うな気がする…”

ちらりと榊紫苑の顔が脳裏をよぎって、再び、眉間に力がこもる。

慌てて頭を振った。

あんな女性の敵、二人も三人も要らない。
気のせい。気のせいってことにしておこう。

「どうした、吉良」

「え、あ…いえ…芸能人なんて、関わることもない私には無縁の人ですから…まあ、お大事に…としか言いようが…」

不意に、院長がものすごく変な顔をした。

なんだろう。少し憐れんでいるような、小馬鹿にしたような…と
りあえず、良い感じはしない表情。

「…何ですか、その可哀想なものを見る目は…」

「お前、相変わらず芸能関係の知識が疎いままだな？」

「な、なんで…」

凶星をさされ、私は怯む。

一応、覚える努力はしているのだけど、テレビすらほとんど見ない私には、芸能界の人間は、誰が誰だが良く分からない。

名前は聞けども、顔の繋がらない有名人が幾人か認識できているだけ。

「お前に知識があれば、その反応はあり得ない」

意味深な事を言われたけれど、何を指して言ってるのか、私には皆目見当もつかず、首をひねる。

「どっして？」

院長は深々とため息をつきながら、呆れ果てた様に首を横に振る。

「お前、その鈍さで紫苑の口説きもスルーしたたる」

今一番聞きたくない名前をさらっと言った院長は、私の白衣の襟首に指をかけ、軽く引つ張る。

空気と人目に晒されたそこには、絆創膏で隠した榊紫苑の置き土産がある。

「こんなものを簡単に付けさせるくらい鈍い女だからな、お前は」「っ！！院長！何、人の襟開いてるんですかっ！」

ふしだらな手を跳ねのけようとすれば、逆にその手を掴まれる。

「その気もねえのに、あいつを誑しこむな」

まるで私が榊紫苑を誘惑しているかのような口ぶりに、私の中にある太い何かがブツツと、重く大きな音を立ててちぎれた。

黒い何かが、私の中に満ちていく。
眼鏡の奥の院長の瞳が、わずかに大きくなる。

「榊のスケベ遺伝子と、電光石火の行動力を柵に上げて、私に説教ですか院長」

心を侵食する暗闇とは裏腹に、自分の表情に極上の笑みが浮かぶ。人間、心底頭になると、冷静なまま怒りがこみ上げるのよね。

「それとも私がふしだらで、下半身に節操のない猿女とおっしゃりたい？」

「いや……」

「訳のわからない理由を並べたててキスをする、キスマークは付け

る。嫌だと言つても、何度も絡んでくる。一体、榊一族はどんな教育をしているんですか？」

「…そりゃ、紫苑の奴が単に欲求不満だったただけだ」

精彩を欠く返事をする院長は、握っていた私の手を離し、わずかに後ずさる。

逃すものかと、私は院長の白衣の襟を掴んで、自分に引き寄せる。

「そんな下種な理由、理由になりませんよねえ？」

「…あいつ、お前に好きとも惚れたとも言つてねえのか？」

「そんな榊の口説き常套句、信用の欠片もありませんよね？」

「…言葉は軽いが、嘘は言わねえよ」

「その軽さが問題なんですよね？」

間近にある院長の表情は殆ど変わらないけれど、強張っている。

「お前、マジで落ち着け。何しでかしてるか、分かってんのか？」

「お説教しているんですよ、院長。分かりませんか？」

「…無茶苦茶キレてるだろ、お前」

当たり前でしょう。我慢も擦り切れ、許容の臨界も既に突破しているのに。

「…私、大っ嫌いなんですよ。榊紫苑が。嫌いな男に迫られて、迷惑してるんです」

何が悲しくて、何度もキスされなければならぬのか。

特別勤務を外してくれと言って、院長は外してくれない。二度と会いたくないのに。

「おはよ…ひつ…」

視線を向ければ、白衣に着替えたパート看護師の結城ゆづきさんが、待合室と廊下の狭間で怯えた顔で後ずさっていた。

その結城さんの後から入ってきた、社会福祉士の五藤ごとうさんが、結城さんとぶつかった。

「おわっ！なに、結城…げっ！」

二人は、私と院長を交互に見て、顔をひきつらせて固まった。

「おはようございます」

「お、おはようございます、し、しししし師長！」

にっこりと笑みを零せば、五藤さんが冷や汗を垂らしながら、普段使わない役職名で私を呼ぶ。

「…院長、何やらかしたんで？吉良うち…じゃない、師長ひつさしぶりにブラック降臨してますけど」

「わ、悪い事言いませんよって、はよ、あげちゃんにお謝りやす」

「…お前ら、最初ハナから俺が悪いと決めつけてるだろ」

結城さんと五藤さんは、ほぼ同時に頷く。

「ほら、滅多に怒りはらんあげちゃんが、こないに怒らはるんです。」

健斗先生が、いけずしはったんと違いますの？」

「普段、院長に対してキレないで我慢できる方が不思議ですよ。普通だったら、刺されてますって。早く、謝った方が良いですよ」

“どれだけ日頃の行いが悪いんですか院長……”

二人の容赦ない突っ込みに、さすがの院長もばつが悪いのか、呆れたのか閉口する。

院長が口撃で閉口するのは、余程、自分の身につまされる事があったか、反撃の計画を立てているか……。

院長が何を企んでいようと、私は自分の身の危険 主に榊紫苑を早急に解消しなければ、身も心も食べられそう。それだけは、絶対に嫌！

「ともかく、貴方の従兄弟をどうにかしてください。お願いしますね、院長」

「……ああ……分かった……善処する」

「頼みますよ？」

「念押しするな。やると言ったことはやる」

不承不承といった様子で答えた院長から、私は手を離して乱れた白衣を整える。

「それから、ついでに掃除機もかけてくださいね？」

「ああ？その何がついでだ」

露骨に嫌そうな顔をした院長に、私は容赦なく掃除機を突き付けた。

「師長、それ俺がやらせてもらいます！」

「五藤さんは、やり残した相談室に置いてある資料の整理をお任せしますね？」

慌てたように五藤さんが私の手から掃除機を取り上げようとしたけれど、その資料整理と言う言葉に固まった。

土曜日に院内の勉強用資料の整理整頓を伝えたのに、途中で投げ出した状態で机の上にあるのを、掃除で見つけてしまった。あの状態の部屋で、社会福祉士としての相談は受けられないので、早急に片付けてもらわないと。

「お二人とも、お・ね・が・い・し・ま・す・ね？」

念押しするように、極上の愛想笑いを浮かべれば、五藤さんは壊れた振り子人形のように頸を縦に振る。

「りよ、了解っす！就業までに終わらせますっ！！」

対して、院長は短くため息をつく。

まるで子供のわがままを前にして、呆れかえるように。

「わかった、わかった。やりゃあ、良いんだろっが」

「院長。私、明日から一週間、有給休暇使用して良いですか？」

勤め始めてから一度も有給休暇を使っていないから、かなり未消化分が溜まっている。

私が居なくてもシフトも、おおよその業務も回るようになってはいるけれど、院長の業務だけは私が居ないと、院長が色々困る事になる。

主に、面倒くさいと言う理由で私に仕事を委託している院長の怠

情が成したツケなのだから、自業自得とさえ言えばそれまでだけ。

院長は、かなり気難しい。コーヒー一つにしてもママの分量や水の種類が違うと不機嫌になるし。仕事中には必要なことを最低限しか言わないから、一つの言葉で幾つもの意味を考えて行動しなければ仕事回らないから大変。

診療中に滞りが出来ると患者様をお待たせてしまうので、そうすると院長はイライラが止まらなくなる。そうならない為に私たち看護師が診療介助に入るのだけど、月曜日や土曜日の診療は患者様の来院数が格段に上がる日は、忙しさで院長も普段以上に必要な言葉を喋らなくなるので、判断に困る事が多くなる。

でも、どうすればいいか院長に尋ねるとブリザードが吹き荒れるから、誰も院長に質問が出来なくなる。そうになると、必然的に師長職の私に、判断が回される。ほとんどの事は私の判断でも問題はなし、院長の判断が必要な事項はきちんと院長から確認を取る。

怖かるうと、其処を押さえて確認をすれば院長は院長の機嫌は悪くならない。

つまり、月曜日と土曜日の診療時間帯は戦場になるので、細かな仕事を引き受ける私が欠けると院長の手が何度も止まる羽目になって、院長の仕事が回らないという構図が出来上がる。

「…掃除機、かけさせてもらいます」

院長が使ったことのない言葉遣いで承諾の返事をし、私の手から掃除機の柄を奪い取り、手に持っていたコーヒーカップを代わりに私の手に乗せる。

そして、おもむろに掃除機をかけ始める。

仮にもクリニックの長が掃除をするという一種異様な光景に、五藤さんも結城さんも掃除を代わるべきか困惑している様子で、院長を見ていた。

「くれぐれも、院長に手を貸さないで下さいね？」

二人に念押しをすれば、二人はびくつと身を跳ねさせて、何度も首を縦に振る。

「ブラックな吉良っち…じゃない、師長には死んでも逆らいません！俺は俺の仕事を完遂させてきます！」

「ほ、ほなら、うちもそろそろ診察の準備します」

そそくさと結城さんも五藤さんも、その場から立ち去る。

入れ替わるように、絢子さんが戻ってきて、院長の姿に飛びずさる。

「ちょっとー！台風が来るっ！？どうしよう、雅樹マツキに傘持たせてないわよっ！」

「うるさいぞ、絢子アヤ子」

愛息の身を案じて叫んだ絢子さんを、院長は一瞥しそのまま与えられた役目を無言で完遂させた。

§

「お疲れ様でした」

診療を終えた院長に、いつものようにコーヒーを淹れて運べば、やや疲れた様子でそのコーヒーを受け取る。

土曜日と言うこともあり、患者さんの数がいつも以上に多くて診療時間も一時間近くオーバーしてしまった。

院長が見るからに疲れていたので、お茶請けに頂き物のチョコレートを二つ添えてある。

それを見た院長が机に肘をついたまま、額を指で押さえながら深いため息をつく。

「お前、まだ怒ってるのか。いい加減、機嫌を直せ」

「…いえ？別に今は怒ってませんけど？」

「だったらどうして、チョコレートを添えた」

甘いものが全般苦手な院長は、不機嫌にそう尋ねてくる。

私としては、掃除機を院長にかけてもらった時点で、院長への怒りはなくなっているのだけど、院長はそうは思っていないらしい。

診療前に掃除機をかけさせたことを、ひそかに根に持っているようでもあったけれど…。

「疲れた顔をしていたので。チョコレートには疲労回復効果がある

んですよ？それは、院長でも大丈夫なビターチョコレートです」

院長は怪訝そうな顔をし、チョコレート包装を剥き、それを口にする。

「…まあ、甘さは及第点だ」

一応、名の通った美味しいと評判の高級チョコレートなので、まずいと言わなかったけれど、早々にコーヒーで口の中にあるチョコレート之余韻を流し落していた。

「後五分したら、掃除するのでお部屋開けてくださいね」

「ああ」

私が診療室を出ていく間際、机の上に置かれた院長の携帯電話のバイブレーションが聞こえる。携帯電話を手に撮った院長は、ディスプレイに表示された文字を見て、眉間に深い皺を寄せて通話ボタンを押した。

「ああ、俺だ。どうした？」

院長の通話の邪魔にならないよう、そっと診療室の扉を閉め、そのまま給湯室に戻ると、結城さんがハーブティーの棚をこそごそしていた。

「あ、あげちゃん、カモミールとローズマリーの茶葉がもうあらしまへんのよ。発注、もう無理やるか？」

カウンセリングの時に用意するハーブティーの茶葉を整理していた結城さんが、困ったようにそう尋ねてくる。

「え？たしか昨日、その二つ届いてますよ？昼休憩中に院長が受け取りしてましたから」

「健斗先生、何処にしまわはったんやろ…」

そういえば院長は、「しまっておいたぞ」って、珍しく気を利かせて行動してくれていたけど、ハーブティーの茶葉なんて触った事のない院長は片付ける場所を知らないはず。

そうになると、どこに‘隠した’のだろう。

“下手に探すより、聞いた方がこれは早そうね”

「院長に確認した方が良いですね」

「そんなら、うち、聞いてきま…」

結城さんの声を塞ぐように、大きな音がクリニックに響き渡る。音からして、診療室の扉を勢いよく開けたのだろうけど、ちょっと大き過ぎる。

「な、何やるか…」

私と結城さんは顔を見合わせ、給湯室から顔を出し、診療室のある廊下に視線を向ける。

「吉良っ！」

「は、はいっ！」

白衣を脱ぎ、激怒した様子の院長が私の名前を呼んで歩いてくる。見るかに般若の形相と、下手に関わったら殺されそうなほど危険な殺気を立ち昇らせて、院長は大腿で近付いて来る。

何度かこれを見た事のある私は、かろうじて動く足で廊下に出る。

院長が本気で怒っている所を見たことがない結城さんは、顔面蒼白して硬直している。

“ さっきの電話で何かあったのかしら…”

がしつと腕を掴まれ、そのまま院長に引っ張られる。

「え、ちよつと、何ですか!?!」

「病院行くぞ」

「は、えっ!?!何処のですかっ!?!」

「紫苑の奴、入院先で治療拒否して暴れてやがる」

「あの人、入院したんですか!?!というか、嫌ですよ。榊紫苑の所なんて!」

「つべこべ言うな!美菜でさえ手に負えねえんだ。犯すぞお前!」

「お、横暴ですっ!」

美菜先生絡みになると、この院長は傍若無人ぶりに拍車がかかる。気迫に気圧され容赦なく引きずられる私を、結城さんが心配そうに見ている。

「あ、あげちゃん…」

「ハーブティーは帰ったら何とかするので、あ、後片付けと戸締りだけ、しっかりとお願いします!」

「お、お気張りやすー!」

遠くなる結城さんの声を耳にしながら、私と院長はクリニックを後にした。

§

強制的に院長が運転する車で連れてこられたのは、榊が経営する『聖心会』系列の病院と連携関係を結んだ外部の病院。

普段は安全運転だけど、怒り心頭だった院長の運転は暴走と言うに相応しく、私は軽く車に酔って頭がクワンクワンしている。

良く警察に追われず、事故も起こさずに無事にたどり着けたと心底、思う。

「気持ち悪……」

だけど、そんな私の事などお構いなしで院長は車から私を引きずり出して、私の腕を掴んだまま病院の中に突き進む。

病院内に入つてすぐ、院長に声をかけて来たのは、恰幅の良い中年の医師だった。

たしか院長の医大生時代のお友達で、内科医の丸目先生だ。何度お会いしたことがある。

簡単に挨拶をした後、丸目先生は院長と私を、榊紫苑が入院している病室まで案内してくださった。

榊紫苑は四階病棟にある特別室と呼ばれる、ホテルの一室の様なキッチンもお風呂も付いた豪華な造りの病室に入院しているらしい。

特別室は普通の病室とは離れた場所にあり、扉で廊下が区切られている。

扉の先は、廊下に赤絨毯が敷かれた何とも病院とはかけ離れた異様な世界で、いわゆるお金持ちとか政治家とか、お忍び入院を必要

とする人など、VIPな患者様が入られる事が多い。

だから優雅な雰囲気なのだけれど、男性の錯乱した叫び声が異常に廊下に響き渡った。

思わず私は、気持ち悪い事も忘れて、廊下の先にある特別室に向かって駆け出していた。

「待て、吉良！」

呼びとめられたけれど、足を止められなかった。

怯えるような、威嚇するようできて救済を求めるその声を、無視なんて出来なかった。

開いたままの病室の扉をくぐり、私は思わず絶句した。

榊紫苑が、男性看護師二人に背後から羽交い絞めにされても尚、それを振りほどこうと暴れていた。

部屋の中は、散々暴れつくしたであろう烈しい惨状。

ベッドの位置もゆがみ、花瓶も床に落ちて、水は零れて花は踏みじらられてポロポロ。

点滴ボトルをつけたまま、点滴スタンドも倒れ、ところどころに血の飛沫や血痕がある。

病衣を着た榊紫苑の左腕は血で染まり、だらだらと血が滴る。

恐らく、点滴をしている途中で無理やり引き抜いたのだろう。

落ち着くようにと男性看護師が大声を張り上げるが、榊紫苑は自由を拘束されたせいでより一層、体を動かして相手を振りほどこうとする。

「あげは…」

その異様な光景に目を奪われていたら、右隣から美菜先生の声がした。

声のする方を見ると、体を看護師に支えられた美菜先生が、氷の

入った袋を左の頭に当てている。

美菜先生は、どうしてよいのか分からず困惑したような顔のまま、私を見ていた。

「ど、どうしたんですか!」

「しーちゃん、強引に点滴をされてパニックを起こしてしまったの…それを止めようとして、ちよつと彼の腕が当たってしまいましたのよ」

「ちよつとどころじゃありませんよ、体が飛ばされて壁に頭をぶつけられて、脳震盪起こしかけたんですから。本来は、安静にしていただかないと困ります」

傍にいた看護師がそう答える。

納得がいった。だから院長があんなに激高したんだ…。

そりゃキレますよね、院長。大事な美菜先生が怪我をしたら、私だつてキレます。

偶発的事故だつたとしても、かawaii女の人に拳を当てるなんて、ダメ男の極み!

「あつ!近付いたら駄目です!」

そんな声が聞こえた気がするけど、私はもがく榊紫苑の傍に歩いていく。

沸騰した頭ではあつても、自分が何をするのかをきちんと理解はしている。

「榊紫苑!」

持てる肺活量の全てを使って、私は彼の名を一喝するように呼ぶ。一瞬、と暴れる男の動きが止まる。

それと同時に、私は手のスナップを利かせ容赦なく相手の頬にきつい一撃を食らわせる。

「ふう…何しやがる！」

叩かれて横を向いた榊紫苑は、ゆつくりと首を動かし鋭い双眸で私を見た瞬間、驚いたような顔をする。

「…吉良…？」

「そうよ。貴方、そんなに暴れ回って何をしているの、美菜先生にまで怪我をさせて」

一か八かの荒療治で、パニック症状はどうにか止まった相手に、努めて優しくその声をかける。けれど、優しい言葉はかけなかった。私に言われて榊紫苑は周囲を見回し、美菜先生を見て驚愕し、部屋を見渡してから表情を蒼白させた。

「…俺…また…やった？」

“…また？”

その意味が分からず、それについての返事は出来なかった。けれど、彼の顔には後悔の念がありありと浮かんでいたので、咎めることは止めた。

「何がそんなに嫌か知らないけど、とりあえず血を止めましょう」

暴れなくなつた榊紫苑の腕を見、彼を羽交い絞めにしていた後ろの男性看護師に『離しても大丈夫』と、目くばせすると、二人はそつと榊紫苑の体を開放する。

私は近くにあつた処置道具の中から無事だったアルコール綿を取り、血だらけの榊紫苑の左腕を掴んで、血があふれ出る抜針部位をアルコール綿で押さえる。

押さえた彼の腕は熱を孕んでいた。
この分だと、かなりの高熱がある筈。

「血が止まったら、まず迷惑をかけた人に謝って、それから体を綺麗にして休みましょう」

病院の看護師さんが差し出してくれたガーゼで榊紫苑の腕に付いた真新しい血を拭いながら、子供に言い聞かせるように、ゆっくりそう説明する。

榊紫苑は悄然としたまま、黙って頷く。

「…ごめん」

「それは、私ではなく、後でこの病院の人たちと美菜先生に伝えてあげてください」

力なく頷いた榊紫苑は、まるで咎められて泣きだしそうな子供のよくな顔をしていた。

なんだろう、自分は悪くないはずなのに、変な罪悪感が胸の中に芽生えてしまう。

「痛い所は？暴れた時に、どこか怪我をしていませんか？…ちよ、ちよっと榊さん！」

榊紫苑の空いた右腕が私の背に回り、体が強く彼に引き寄せられる。

その状況に、私は自分の学習能力の無さを恨んだ。

あまつさえ、榊紫苑がTPOどころか、人目さえもわきまえない

図太い神経の持ち主だと、未だ以て見抜けなかった。

この男の腕に幾度囚われたら、私は学ぶのだろう……。でも抵抗したくとも、看護師の性で止血途中の場所を離す事ができない。

それに、榊紫苑の体が震えている。

熱のせいなのか、それとも心因的なことなのか……。

「……ごめん……。やっぱり、貴女じゃないと……。俺……。駄目だ……。」

迂闊にも意識を他所に向けていた私の耳朶元で、榊紫苑がぼそりとそう呟いた。

「え？榊さん？榊さん！」

そのまま押し掛かるように、体から力の抜けていった榊紫苑の体を抱えた。

第九章 クレーム・ランヴェルセは甘くて苦い

病院は嫌いだ。

点滴も、注射も、病院も、それに随伴する医療従事者を含む全てが。

白くて何も無い薬品臭い部屋に一人置き去りにされて、熱にうなされて悪夢ばかり見た。

待てども戻つてこない母親に捨てられたと気付いたのは、肺炎をこじらせて死に掛け朦朧とした意識の中。

『母親はまだつかまらないの？』

『子供を捨てて海外にトンスラしたわよ』

『じゃあ、雄副院長は？』

『学会でドイツ。連絡したけど、日本には戻つてこないそうよ』

『仕事人間の副院長らしい。子供程度じゃ、動じないって事か』

『まあ、ろくでもない愛人の子供じゃ、愛情も湧かないわよね…』

『副院長には既に後継者になる御子息が居るし、こんな身体の弱い子供、邪魔なだけだろ』

『このまま死んでも、死んでくれてよかったかと思うかもな』

微かに届いた声。

“僕…捨てられた…の？…要らない子？”

子供心に深く傷ついた言葉。嘘だと信じたかった半面、俺にそっけない両親の態度にやっぱりそうかとも思った。

救いようのない絶望感が、弱った体と心を蝕んでいく。

俺は体中管に繋がれて、身動きが取れない俺の周りを医者と看護師が囲んでいた。

ぼんやりとした視界の中、見下ろす大人の威圧感と蔑みの感情が皮膚を刺し、弱りきった俺を恐怖に貶める。

“殺される”

まるで俺の死を待つかのように冷笑を浮かべ見下ろす白い悪魔たち、俺はそう感じた。

彼らが俺に施す点滴や注射の中に、俺を殺すものが入っているのではないかと、怖くて怖くて、いつも怯えた。

針を刺される痛みが、心臓をナイフで一突きされる瞬間と同じ恐怖を与え続けた。

ぼたりぼたりと、管の中を落ちていく点滴の雫が、誰もいない孤独を刻む時計のようであり、俺の体に入り込む毒の進入する音のようでもあった。

いつ殺されるのか、体が完治するまで恐怖は続き、それは心に根深く突き刺さった。

大人になった今も、病院、医者、看護師をみるとそれを思い出す。特に、点滴は駄目だ。

心が恐怖を思い出し、錯乱する。

誰も信用できなかった。特に、親父の手先のような医療従事者など。

『なんだ、生きていたのか』

一命を取り留めた俺に、帰国して顔を見せに来た親父のその一言を、俺は忘れない。

俺を捨てた母親がろくでなしなら、死を期待していたかのような

暴言を吐いた父親は人でなしだ。
そんな男が生業とする医者も、それに関わる医療の全てが信用できない。

なのに…、どうしてこいつらは俺に点滴をする？

嫌だといっているのに、どうして押さえつけて強引に治療を押し付ける？

俺はそんな事、望んでいない！

こんなところ（病院）に、誰が連れてきた…。

俺を、殺すつもりか！？

『榊紫苑！』

俺の苛立ちを切り裂くように、伶俐でよく通る女の声が俺の中に響く。

聞き馴染んだ声に似ている。

“誰だ？”

そう思った瞬間、強い衝撃が俺の左頬を襲った。

最初は衝撃だけ。でも、一呼吸置いた瞬間、強烈な痛みが来た。

同時に、わけも分からない痛みに怒りが込み上げる。

相手を睨みつければ、そこにいるのは柳眉を逆立てた長身の女性。見慣れた白衣姿の彼女に、目を疑う。

俺、熱と恐怖で頭がおかしくなったのか？

それとも、夢を見ているのか？

何処までが現実で夢なのか、区別できない程の…。

目の前にいるのは、ただ一人、俺に医療行為で恐怖心を与えなかった看護師。

彼女は健斗の病院に勤めているはずなのに、どうして此処にいるのか理解できない。

吉良は俺が何をしたのかを諭す様に、話しかけた。

怒りながらもそれを堪えて、俺の体を気遣う言葉をかけてくる。

それだけで、心が落ち着いていく。

どれだけ嫌いと言っても、彼女は患者である俺を見捨てない。

俺に向き合って、俺を視て言葉をくれる。

嫌々でも、渋々でも、看護師としての彼女は、医療行為に嫌悪して怯える俺をそっと救ってくれる。

榊一族の不要な人間としてでもなく、有名な俳優としてでもなく、一人の患者として向き合ってくれる。

媚びる為ではないと分かるほど、徹底して仕事を中心とした行動は心地好くもあり、何故だか苦しくなる。

健斗と彼女の気兼ねないやり取りが、羨ましいとさえ思う。

“もつと、吉良に近付きたい…”

俺の腕を取り、止血してくれる吉良が近くて遠い。

無意識に、俺は吉良の体を抱き寄せた。

その温もりも、仄かに鼻梁をくすぐる彼女の香りに安堵する。

誰も俺に与えられない、俺自身でさえ見つけ出せない安らぎをくれるのは、吉良しかない。

彼女でなければ駄目なのだ。

俺を傍で見てくれる看護師は…。

§

目が覚めた時、馴染むとまではいかないも、見た事のある天井がまず見えた。ゆっくりと視線をめぐらせれば、ディスプレイも人任せのシヨールーム仕様の寝室。

部屋の装飾になんて一切興味はない。ほとんど、帰って来ることすらない名前だけの家。それでもベッドだけは、寝心地重視で選んだキングサイズのベッドを買った。

眠れるわけがないと分かっているけど、僅かな期待を込めて買ったこのベッドにすら、片手で余るほどしか横になった事はない。

そして、当然の様に心地良い眠りなど迎えた事もなかった。

そんなベッドの上に、俺は居た。

“俺の部屋？”

遮光カーテンの細い隙間から、オレンジの光が差し込む。

窓の方角は東。夕日である筈はない。

どれだけ時間が経過したのか、どうして自分の部屋に居るのが把握できなかつた。

“撮影中に気分が悪くなって、気付いたら病院に居た様な気がしたけど…あれも夢か？”

ぼんやりと宙を仰ぎ見ていた俺の視界の右端に、嫌なものが映る。どうやら俺の右腕には点滴が入っているらしい。

刹那、体の中を這いずり回るように恐怖が湧き上がり、身体が大きく震えた。思わず右腕の管を引き抜こうと、上体と左手を動かした。

が、思わず手を止める。

床に座り込んだ格好でベッドにもたれかかりながら、うつらうつら眠っている女性が居たからだ。

“…吉良？”

俺は彼女の手首を握りしめていた。

彼女は俺の動きに目を覚ましたのか、パツと顔を上げる。

ノーメイクのせいか、目の下にうつすらクマは出来ているのかわかる。

寝ていなかったのか？

「気がつきました？」

空いた手の指で目をこすりながら吉良はそう尋ねて来る。彼女の服は、白衣ではなく、私服。それもかなり簡素でラフな格好だ。機能性重視という感じだけど、服のデザイン性を疎かにしている訳でもなく、趣味は悪くない。

そんな所を冷静に見てはいたけれど、一体何がどうなっているのか、状況が全く分からない。

「…また夢？」

「…何処から夢だと思ってるんですか？」

呆れたようにつぶやいた吉良は、俺が握ったままの手を持ち上げる。

「そろそろ、手を離してくれませんか？夜中からずっと、こうなんですけど」

俺は訳が分からないまま、吉良の手を離す。彼女の手首には、少し赤い痕が残っている。

自由になった手を、吉良はそつと俺の首に伸ばして触れる。

「少しは熱も下がったみたいですね。なにか飲みたいものとか、食べたいものありますか？」

「…それより、どうして貴女が此処に？」

「昨日の昼、貴方が入院した病院に、院長に無理矢理連れて行かれたんです」

「…何のために？」

「暴れている貴方を止めるためにでしょう？」

ああ。あれも現実か…錯乱すると、夢と現実の境界線が解らなくなる。

と言うことは、俺はまた点滴で我を失って暴れたと言う事だ。

「…吉良が俺を止める？無理だろ…男が五人がかり押さえ込むくらいなのに」

病弱だった体を鍛えるために始めた空手で鍛えられた腕っ節と筋力が、自製の効かない状態になると、俺を暴徒に変える。

唯一、一人で俺を止められるのは健斗だけ。

健斗も空手は有段。おまけに、趣味の山登りのために体の鍛錬には余念が無い。

体重を絞り込んで着痩せしてインテリ然と見えるが、その実、健斗は意外に筋肉質でパワー系だ。

ただし、そんな健斗に止められると、力技だから互いに無傷では

済まなくなる。

吉良のように華奢な女性に、その正攻法で俺を止められるわけがない。

「救急外来に配属されていた頃は、痛みで錯乱している人が暴れて処置にならないことがあつて。その対処法が役に立つただけですよ」

こともなげにそう答えて苦笑した吉良に、俺は彼女が何をしたのか思い出す。

「パニック状態を止める為に、強い衝撃を貴方に与えたかつたんです」

「…あれは、痛かつたよ」

確かに、あの一撃は立派な衝撃だ。吃驚して一瞬頭の中が飛んだ。だが、次に放った吉良の言葉のほうに俺には衝撃的だった。

「ですよね…ホントはあの方法じゃなくても良かったんです…ごめんなさい」

「…吉良もドS?」

「違いますから。院長みたいなカテゴリー分けはしないで下さい」

出来る事なら痛みのない手段の方が良かったけれど、今更どうこう言っても仕方がない。ただ、これまでの吉良の言動を鑑みて、俺は吉良の性格が隠れドSだと確信をしている。

「美菜先生に怪我をさせたから」

言われて、大事なことを思い出す。

おぼろげだけど覚えている。俺、美菜様を殴り飛ばしたんだ。

身体から一気に血の気が引く。
理性の無い状態で暴れていたから、かなりの衝撃だったはず。

「美菜様、大丈夫だった?! 怪我は!?!」

思わず吉良の両肩を掴んで、詰め寄る。吉良は困惑した様に笑い、肩にかかった俺の手を離して距離をとる。

「外傷はタンコブだけでしたし、CTも、脳波も異常は無かったです。ただ頭を打っているので、大事をとって一泊入院させるって院長が」

「…良かった」

「ただ、貴方が酷く暴れてしまったので、貴方の方は病院側から強制退院を言い渡されてしまったんです」

「…だろうね」

あれだけ派手に暴れば、当然だ。

頻回に吉良に点滴をされても、多少の怖さはあっても暴れることは無かったから、点滴に対する耐性も付いてきたのだと思い込んで、今回は完全に油断していたのかもしれない。

「だから俺の家に？誰が連れてきたの？」

「院長と私で。院長はリビングのソファで寝ていますよ」

「…此処で治療したの？」

「別の病院、探したほうが良かったですか？」

問われて、俺は答えられなかった。

病院など行きたくないのが本音。だが、弱みを人に晒したくない。吉良はしばらく俺の答えを待っていたようだが、返事が無いので首をすくめた。

「院長が此処で自分が治療すると言って、丸目先生に治療方針を確認していたので、此処で治療するのは確定事項なんです」

「で、俺の世話でも命令された？」

吉良は頷いた。

「とりあえず昨日から、二十四時間体制で貴方の看護を命じられました」

「…泊まるつもり？」

「冗談じゃない。

マスコミにも俺が此処に住んでいることを悟られないように、細心の注意を払っているのに。

恋人だろうが、女を自分の部屋にあげたことも無いし、いくら気を許した看護師でも泊めるつもりなど毛頭ない。

とはいっても、既に一泊しているようだったけれど。
吉良は困ったように首を竦める。

「彼氏でもない人の家に、気安く泊られませんよ。昨日は院長も居
たし、貴方は高熱でうなされているので仕方なくです」

「…健斗が一緒でも良いんだ？」

「院長が一緒でないのなら、昨日だって泊まりませんでしたよ？」

吉良は何がいけないのかとばかりに、不思議そうに首をかしげる。

「健斗も手が早いから、危険だと思うけど？」

理解していない吉良に、率直に問いかければ、彼女は更に首をひ
ねる。

「貴女、男に対して警戒心が弱過ぎるよ」

「突然キスする貴方よりは、ずっと紳士ですよ」

吉良はさらっと、キツイ事を言う。しかも、紳士を強調して。

今でこそ健斗は落ち着いたが、俺より健斗の方が紳士だなんてあ
り得ない。

「もし貴方の熱が落ち着かなければ、今日は院長だけが泊ってい
ますから」

「…それ、俺に死ねと？」

「点滴以外の診療なら、院長はまともですよ？」

その宥め方もどうかと思うが、吉良が泊らないと分かり、ほっと
する。

「健斗、美菜様の方に付いて居なくて良かったの？」

「本当は院長、美菜先生の所に付いて居たかつたみたいなんですけど、美菜先生は貴方を看る様になって、院長を病室から追い出したんです。だから院長、ちよつと不機嫌なんですよね。起きたら気を付けてください」

健斗が相手なら、どう回避しようとも地雷に足を踏み込む気がするが、それは言わずにおこう。今回は、健斗に殴られても文句は言えないのだから。

吉良はゆっくりと腰を上げる。

「とりあえず食事の用意をして来るので、まだ休んでいてください」

踵を返そうとした吉良の手を、俺は思わず止めた。

「…ちよつと待って。ここ、調理器具とか食材は一切置いてないけど？」

「ええ。見事に何もありませんでしたよ、調味料から包丁一本、お茶碗に至るまで。なので、必要なものだけ、簡単に揃えてあります」

手際が良いと言うかなんというか…揃えてもらっても、俺は一切使いこなせないのだけれど。

「それと…今更ですけど、勝手に家の中の物を見たり、物を使っても大丈夫でした？」

「本当に今更だね」

「院長が大方、場所を知っていたので、水場とこの部屋で少し探し物はしましたけど…」

見渡しても、俺が知っている風景と何ら変わりはない。

此処に何度か来た事のある健斗が、ある程度の物の場所は知っているはずだから、探し回る必要もほとんどないはず。

何より、必要最低限の物以外、物は置いてない。使うほど長居もしない。

「…鍵の掛かっている部屋以外なら困らない。まあ…あまり我が物顔でウロウロされるのは嫌だけど、それなりに自由にしてくれていいよ」

そこには、台本とか仕事上で使用したものが収納されているから、誰が訊ねて来ても良いように鍵は常に掛けてある。

それ以外で、家にあるので見つけられて困るものは一切ない。

「水場くらいしか使わないと思います。分からないものや、判断に迷う場所については貴方に確認をします」

「そんなに生真面目にしくなくても大丈夫だよ」

「そうですか？」

そこまで徹底して仕事モードで動く心積もりの吉良なら、大きな過ちも犯さないだろうし、逐一、いろいろ聞かれるのは正直面倒くさい。

「逆に俺が疲れるから」

「わかりました。しばらくお部屋の物をお借りします」

吉良は少しほっとした顔をして、礼儀正しく礼をして寝室を出て行った。

そんな吉良の後ろ姿を、俺はなんだかモヤモヤした気分で見送った。

§

休んでいると言われたけれど、結局俺は吉良の言う事を聞かなかった。

点滴をしたまま一人で居るのが、たまらなく居心地が悪くて怖かったからだ。

俺は五分もしないうちに、点滴を吊り下げた帽子掛けを持って廊下に出る。

十二時間以上を睡眠に費やすと言う、普段ではあり得ない状況のせいか、体中の関節と筋肉が異常に痛い上に体がだるかった。

普段感じない疲労感が、どっと押し寄せたようだった。

“でも、こんなに眠ったの初めてかも”

疲労に追い詰められるように眠っても、二、三時間程度。浅い眠りを繰り返すだけ。

深く意識を落として眠ったのは、どれだけ振りだろう。

そんなことを思いながらリビングに行く、健斗が三人掛けの皮張りのソファの上で窮屈そうに眠っている。

リビングと続きになっているダイニングキッチンを見れば、吉良が料理の最中だった。

大理石のカウンターテーブルを挟み、何かを盛り付けている彼女が、不意に顔を上げて俺を見る。

呆れたような、やっぱりというような顔をして小さくため息を漏

らす。

「…人の言う事を全然聞かないんですね？」

「人が料理する所って、俺、見たことがなくて」

それが目的ではないけれど、嘘ではない。

俺の母親は料理など一切しない女性。榊の家では料理人が作った物を食べるだけ。恋人関係になった女性には、料理などさせたことはない。

だから、どのように料理をしているのか、興味は多少あった。

俺がダイニングテーブルの椅子に腰を下ろすと、吉良は首を竦め、引き出しから何かを取り出した後、冷蔵庫からも何かを取り出して盆に載せて俺の傍に来る。

「良かったらどうぞ」

白磁の陶器の小鉢が一つと、ガラスの小鉢が一つと銀のスプーンが俺の前に出される。

陶器の小鉢の中にはカラメルソースのかかったカスタードプリンと、ガラスのそれにはグレープのゼリーがある。

思わず、吉良を凝視する。

幼稚過ぎてイメージにそぐわないので公に出来ないが、プリンは俺の好物だ。特に、カスタードプリンは。

これは偶然なのだろうか。それとも…。

「もしかして、甘いものは嫌いですか？」

「別に嫌いではないけど、どうしてこれが出てくるのか解らなくて」「食欲がなくても、喉越しの良いものなら食べられるかなと思って、作っておいたんです」

確かに食欲はないけど、吉良が言う様に、これなら食べられそうな気がする。

「…どうして二種類？」

「嗜好の問題もあるので…もし二つとも駄目でしたら、ヨーグルトとアイスクリームもありますよ？」

「いや、これで良いよ」

何だろう、この用意周到さ。かゆい所に手が届くと言うか、嗜好問題まで考慮して人の行動の一手先を考える手の回し方は、俺には無理だし全然思いもつかない。

吉良がこういう行動をとってくれているから、俺は何時も病院で嫌な思いをあまりしないのかもしれない。

俺が思うより先に、いつも吉良が行動して対処してくれるから、嫌とか、怖いと言う感覚をあまり感じなかった。

これまでは全く感じなかったけれど、吉良はやはり凄い人間なのかもしれない。

俺はスプーンを持ち、カスタードプリンから手をつける。

プリン自体の甘さは少し控えめで、カラメル之苦みと甘みがほんのりプリンに絡んで、卵の風味もバニラの香りも程良く活きている。プルンとして喉越しも良い。

俺が食べた歴代のプリンの中でも、お世辞抜きで美味しいと思える。

どこかの店の物と言っても、遜色はない。

気付けばあつという間に容器は空になった。

「お腹、空いてまし…わっ、な、何ですか!？」

傍に居た吉良の手を取り、俺は両手でその手を握ると、彼女に顔を寄せる。

吉良は困惑したように、身を逸らし逃げようとする。

「ち、近いです、榊さん」

「めちゃくちや美味いんだけど、ホントに貴女が作ったの？」

「と、友達にパティシエが居るんです。その子から、洋菓子のレシピを教わったんです。必要なら、レシピ書きましようか？」

「いや、俺作れないから…どうせなら、また作って」

「まだありますから、もうひとつ出しましょうか？」

「あるだけ出して」

手を離し、姿勢を戻した俺がそう言うと、吉良は少し驚いた顔をする。

「あるだけ？あと四つはありますけど」

「全部食べる」

「…気持ち悪くなりますよ？」

「食べる」

俺からしたら、五個くらいは普通なのだけど…

そう言ったら、吉良はどういう反応をするのか気になったけれど、止められそうだからあえて言うのは止めた。

少し考えた後、吉良は冷蔵庫に行き、あるだけのプリンを出して持ってきてくれた。

「知りませんかからね？」

念押しをして、吉良はキッチンに戻り料理を再開した。

俺は久しぶりのクレーム・ランヴェルセを堪能した。

§

部屋の中にお米の炊けたふんわりとした匂いと、魚のこんがり焼けた匂い、空腹感を誘うみそ汁の香りが広がる頃、俺の従兄弟はダイニングにやってきた。

その頃には既に身支度を整え、一部の間もない。寝ぐせの付いた頭の俺とは、対照的だ。

健斗は、ダイニングテーブルの上に置かれた青菜のお浸しと、鮭の切り身の塩焼き、出し巻き卵を見ながら、俺の前にある空の器を見て、渋い顔をする。

「お前、puddingは許すが、朝から気色悪くなる喰い方するな」

無駄に良い発音でそう窘めてくる健斗は、俺の隣に腰を下ろす。

「健斗こそ、朝から胸やけするような量じゃないか」

朝食なんて、寝起きにコーヒー程度の俺には、健斗の朝食量は拷問だ。

「朝しつかり食わねえから、そんな貧相な体力なんだよ、お前は」
「朝からプリン五つも問題ですけど、朝から二人前もどうかと思いませんよ？」

言い合う俺達の傍に、吉良がお盆を持ってやってくる。

健斗には大盛りのご飯とみそ汁。

俺の前には一人前の土鍋に入ったお粥と、別皿で梅干しと焼き鮭の切り身が、蓮華を添えて置かれる。空いた器は綺麗に下げられる。

「まだお腹に余裕があったら食べてみてください…あ、薬だけはちやんと飲んで下さいね」

吉良は食事を強要する訳でもなく、そう言って、後から薬を添える。

俺と健斗の前に食事はあるけれど、吉良の分はそこにはない。

「吉良は食べないの？」

「榊さんのベッドのシーツ交換と、部屋の掃除を先に済ませてきます」

「ママだね。尽くすタイプ？」

「金の分だけ働くのは当然だろうが。…おい吉良、みそ汁の出汁、鰹節から削らずに削り節を使ったな。風味が悪い」

既にもそ汁をすすり始めていた健斗がそう言い放つ。料理の味にうるさい健斗の言葉に、吉良は困ったように首を竦める。

「院長の家なら鰹節を削りますけど、此処にはそう言った調理器具や食材はありませんから諦めて下さい」

「お前の所為か」

味にうるさい従兄弟が、舌打ちしながら俺を睨む。文句を言いながらも、みそ汁を残すつもりはない様だった。

「調理器具ぐらい完璧にそろえておけ」

「使いもしない物は置かない主義」

「生活能力ゼロ男が」

「食通崩れでいちいち、料理に文句付けるのが好きな男よりましだ
る」

突っ掛かって来る従兄弟に、思わずイラっとする。

「まあまあ。私、掃除に入るので、紳さんはお薬忘れずに飲んで下さい。院長、食器は後で片付けますから、終わったらそのままお願いします」

それだけ言っつて、吉良は俺達の返事を待たずに部屋から出て行く。俺はその後ろ姿を何気なく追っつて見ていた。扉の先に彼女が消えてからも、何となく、そちらを見ていた。

やっぱり彼女は精神的に、俺よりずっと大人なのだ。

こういうプロ意識は嫌いじゃない。むしろ好感すら抱く。なのに、心のどこかで彼女のそんな態度が気に入らない。理由が解らないから余計にモヤモヤする。

「次の診療から吉良を外す」

吉良の事に気を取られていた俺は、健斗の言葉に視線を彼の方へ向けた。健斗は食事をとりながら眼鏡の奥から俺を鋭く射抜く。

吉良が居なくなつた途端これだ。

「そんな真似、絶対に認めないから」

俺は蓮華を手に取り、湯気を放つお粥をひと匙掬い口に運ぶ。

“つまっ…”

病院のお粥の様な嫌な匂いも味も、全くしない。お米の甘みと風味がはつきり分かる。

これなら食べられる。どんどん、喉を通っていく。

健斗は、箸と茶碗を机に下ろす。

「昨日の一件で、お前は美菜に怪我をさせた。その制裁は受けてもらうぞ」

「…美菜様を怪我させたのは、悪かったと思ってるよ」

「謝罪をする相手が違っただろうが」

突き放すように健斗は言い放つ。

殺気を帯びた眼光に、健斗が怒りを堪えていたことが容易に知れる。良く、吉良が居る間それを隠していたと思う。

昨日だって、吉良が居なければ病院の時点で容赦なく殴り飛ばされて、俺も怪我をしてもおかしくなかった。

「後で、謝りに行く」

「当然だ。だからと言って、お前への制裁は覆さねえ。吉良は外す」

不意に放たれた従兄弟の宣言に、自分の眉間に深いしわが出来るのが分かる。

「認めないって言ってるだろ」

「お前の意思など知ったことか」

俺は乱暴に蓮華を粥の中に置く。

「吉良より使える看護師が居る訳？俺を暴れさせないで点滴できる

ような人間が、他に居るのかよ」

「居る訳ないだろ」

「何だよ、その嫌がらせ」

「嫌がらせでなければ、制裁にならんだろうが」

鼻で笑った健斗の言うことは尤もだが、気に入らない。

よりによって吉良を俺から引き離すなんて。

「それに仕事中、お前が手を出したくなる程、女を感じさせた吉良にも問題はある」

「…は？何だよ、それ」

「勤務中に女を感じさせるような看護師、患者の傍に置けないだろ。お前もそれだけ飯が食えるなら、点滴も必要ない。吉良をこのまま返す」

俺は思わず、机を拳で殴りつけた。

吉良に非があるような言い方に、俺は無性に腹が立つ。

「ふざけるな。吉良がその類の女じゃないって、お前が一番分かっているだろ！別に吉良が媚を売るような真似をしたから、手を出した訳じゃない！」

「だったら、何で手を出した？吉良が遊びの恋愛に不向きだと、お前にだって分かるだろ。つまみ食いするほど女に不自由もしてないくせに、何をやっている」

淡々と訊ねた健斗に、俺はとっさに返事が出来ない。

…節度を持った吉良の態度が、気に入らなかつたから。

…吉良の優しさが、看護師という職業上の物だから気に入らなかつた。

それは全て、吉良に自分の意思で『俺』という存在に向き合っ

ほしかったからだ。

そう思う感情を、どう言えば良いのかわからない。

健斗は俺をじっと見据え、返事をしない俺に深くため息を漏らす。

「お前みたいな奴が一番面倒くせえ」

「なんだよ、それ。要は俺が吉良に手を出さなければ良いだけの話だろ。お前に点滴を打たれるなんて、絶対嫌だからな。俺が今日、吉良に手を出さなかったら、診療から彼女をはずすなよ」

また健斗に何度も針を刺されて、腕が真っ青になる苦痛に耐えるのかと思うと、全身が粟立つ。それだけは絶対に回避しなければ。

俺の身の安全と精神的なストレス回避の為に、看護師としての吉良を失う訳にはいかないのだ。

意味のわからない吉良への感情に気を取られている場合ではない。そんな俺の焦りとは裏腹に、健斗は嫌味たらしい程に不敵な笑顔を浮かべた。

「この先も手を出すな。あいつは俺と美菜のものだ」

その一言に、俺はまた訳もなく苛々した。

でもその理由は自分でも分からないままだった。

第十章 謎は多過ぎると胡散臭い

「おい、吉良」

シーツの張り替えをしている最中、院長が寢室の入り口に姿を見せた。

手を止めて姿勢を正して院長に視線を向ければ、複雑な顔をして部屋の中に入ってきた。

「今から美菜を迎えに行く。今回の紫苑の行動で、美菜の親父さんがかなり機嫌悪いからそいつも宥めて来る」

美菜先生のお父様は、美菜先生を溺愛しているし、美容業界の首領で榊一族に負けないくらい、各方面に力を発揮できる人。

だから娘が怪我をした上、入院と言う事だけでもかなりの問題。なのに、怪我を負わせた側が院長の従兄弟で、その院長が美菜先生に一晩付き添わなかった事も、きつと機嫌を損ねたのだろう。

いくら美菜先生が榊紫苑を看ると追い立てようと、完全看護で付き添いが要らないと病院側が言っても、我が娘命の美菜先生のお父様には、その辺の事情は通じない。

「…大丈夫ですか？」

「こっちは、どうにかする。夕方までには戻るが、それまでは此処であいつの世話を頼む」

「もしかして、それまで二人つきりでいると…？」

事情は分かるけれど、そうなると心許なくなってしまう。

「変な真似したら、殴るなり縛り上げるなり好きにしろ…そんな顔をするな。多分、手は出さねえよ」

「すみません、信用が置けません」

「お前が診療に立ち会わないのは、あいつにとって死活問題だ。お前が心配するなら、あいつをベッドに縛り付けておいてやるが？」

流石に其処まではと、私は思わず首を大きく横に振った。

§

“…とは言ってもなあ”

洗い終わったシーツを干しながら、院長が言い残した言葉を思い出していた。

院長に何と言われようと、榊紫苑に対しての私の印象は最悪だし、度重なる前科のある男を相手に信用なんて出来ない。

今回は、美菜先生の事があって院長が榊紫苑に手をかけられないから引き受けたけど、出来れば榊紫苑関係の仕事は今後、遠慮したい。

高時給でおいしい仕事で、老後の貯蓄稼ぎにはぴったりだったんだけど、貞操まで売り渡すつもりはないから。残念だけど、これつきり。

院長にも、戻ってきたらつきりそう言おう。

そう決意を新たにし、とりあえずベッドに戻って大人しく寝ている榊紫苑と、極力接触しないように注意して行動しよう。

「…吉良」

呼ばれて慌てて振り返れば、ベルランダの出入り口にベッドへ戻ったはずの榊紫苑が居る。

決意した先から、どうして彼からやって来るのかしら…。

「な、なんで起きていますか」

「Cr?me Ranner ser 作って」

「クレーム・ラン…ヴえるせ?」

流暢なフランス語の名前に、私は首をかしげる。

英語どころかフランス語もいけるらしい相手が放った名前に、馴染がない。初めて聞くけれど、『クレーム』と付くからには、洋菓子の名前なのかしら。

「ああ、ごめん。Puddingのこと」

「…まだ、食べるつもりですか」

「明日食べるから、作っておいて」

内心でほっとする。昼も食べると言いだしたら、どうしようかと思っただ。

これ以上のプリン摂取は、いくらなんでも食べ過ぎだもの。

「わかりました。お昼ごはんの後に作ります」

「お願い」

そう言って、榊紫苑は満足そうに笑って部屋の中へ戻っていき、私は残った洗濯物を干しにかかる。

あの嬉しそうな笑顔だけを見ると、子供みたいでとても無害

そんな人に見えるけど、中身がたいへん危険であることを知っているので、^{ほど}絆されたりしない。

それから掃除をしたり、昼ご飯の下準備に取りかかってみたりしたのだけれど…。

「…あの…どうしてそこにいるんでしょう?」

榊紫苑は寝室には戻らず、掛け布団だけ持ってリビングのソファに寝そべりながら、じっと私の行動を監視するように見ていた。

家主のまわりつく視線に耐えかねて、私は声をかける。

「気になるから」

「心配しなくても、貴方の許可なしに家の物は触りませんよ」

「ただ、吉良を見ていただけ」

色気を含んだ微笑でそう言われ、ぞわっと自分の背筋を這い上がった寒気を堪え、私は愛想笑いを浮かべる。

「…こんな凡庸な容姿をした年上の女を見て、楽しいですか?」

「貴女を見ていれば、何か分かるかと思って」

ソファの上で胡坐をかき、背もたれにもたれかかりながら、この家の主は難しそうな顔をして神妙に答える。

この男の思考パターンだけは、どうしても読み取ることが出来なくて、行動も予測不能。

下手をすると、院長よりも浮世離れた思考の持ち主なのかもしれない。

いや、院長はすることはトリッキーでセクハラ発言も良くするけれど、意外に常識的で守るべき一線はちゃんと守っている。

話をしながら、私は包丁を動かして料理に使う材料をカットする。

「…何かって、何ですか？」

「貴女を抱きたい衝動に駆られる理由」

「っっ！」

良いのは顔だけの男が放ったセクハラな一言に、思わず包丁を持った手がぶれた。

かつら剥きをしていた大根の皮を突き破り、包丁が私の指をかすめる。

親指の腹に縦に赤い線が入り、血が滲んだ。

思わず包丁と大根をまな板の上に置き、左手の親指を押さえて顔の前まで持ち上げる。

「な、何て事を言っんですか、貴方は！」

リビングにいる相手を睨みつければ、既にそこに相手はいない。

“え？居ない…って、近っ！”

気付いた時には、榊紫苑は大股で私の傍まで近付いていた。

警戒して身を引くよりも早く、彼が素早い動きで私の左手を掴んで更に私の腕を持ち上げ、自分の顔の前に私の手を持っていく。

榊紫苑は、じわじわと血が滲む傷を見て眉根を寄せて目を細める。

「女性が傷なんて作ったら駄目だよ」

「貴方が莫迦なことを言うからです！」

誰のせいで手元が狂ったのか、この美青年は全く理解していない。親指が、拍動と共に鈍い痛みをもたらして、余計に気分が悪い。手を振りほどこうとしたけど、相手の手はびくともしない。

「手当てをしないと」

「この程度、舐めておけば大丈夫です！」

見目の優雅さに反して腕の力の強い相手が次の瞬間にとつた行動に、私は絶句した。

私の左手の親指を口に含んだのだ。

“いやあああああーっ！た、食べられ…ゆ、指っ！！！”

しかも、舌で傷口を撫でる。

一瞬にして私の体中の体温が失われ、身体が硬直する。

“あ、あり得ない…あり得ない！なんて真似してるの、この男っ！”

まるで、愛撫するかのように優しく皮膚に舌が絡みつき、時にきつく吸い上げられる。

行為も媚態を帯びていれば、榊紫苑の表情もどこか官能的で痛みなどどこかに吹き飛ぶ。

ただ指の腹に絡む感覚だけが、心臓の拍動と共に私の中で膨れ上

がる。

悪寒なのか、恐怖なのか、甘い痺れなのか、私に満ちてくる感覚が理解できないまま、脳内を駆け巡り、思考はショート寸前。

心臓は破裂するのか潰れるのか解らないくらい苦しい。

声を出そうにも、どうやったら声が出るのかすら分からなくなつて、ただ相手を見上げて行為を見ている事しか出来ない。

相手にされるがままに。

離してほしいのに、それが言えない。

恥ずかしくてどこか怖くて泣きたくなる気持ちと、親指を侵食する危険な艶めかしい感触に溺れて行きそうな自分の体が震えるのが分かる。

長いのか短いのか分からない時間の後、人の指を弄びながらゆっくりと見下ろしてきた年下男の瞳と目が合った。

まるで淫靡な世界に誘うかのような挑発的で熱を帯びた視線が、不意に悪戯っ子の様なものになる。

「大根の味がする」

そう言われた瞬間、ようやく自分が現実に戻され、血液が体中を勢いよくめぐり出したような気分になった。

全身が熱い。

特に顔はもう発火するのではないかと思うくらい。

“こんな嫌がらせ極まりない羞恥プレイ、院長にだってされたことないのに！”

きつと、今の私の顔は真っ赤だ。しかも、泣きそになってるはず。

「…そんな顔すると、襲うよ？」

慌てて相手の手から自分の手をもぎ取り、榊紫苑を睨む。

「あ、貴方には、節操ってものがないんですか」

「どちらかって言うところはないかな？」

「う…このザル頭の工口美青年っ！貴方、脳内が一面お花畑で、しかもシヨッキングピンク一色なんですよっ！だから、節操がないんですよ！」

「俺だって、相手くらいは選ぶよ？」

「そ、それなら、私で遊ばないで下さい！」

「…遊んでいるつもりはないし、手当てをしたのにどうして怒るのが分からないけど？」

「な、何が手当てですか」

「だって吉良、舐めておけば大丈夫って」

「それは傷が大したことがないという意味であって、本当に舐めて治療はしません！」

「あれは、そういう意味か…日本語って表現が湾曲しているから難しいね」

本当に意味を知らなかったのか、見た目は完全に外国人の榊紫苑は、至極真面目な顔をして頷いて納得をした表情を見せた。

「…い、一応、その…手当て、ありがとうございます」

流暢に難しい日本語を喋るから、本当にどこまで真実かはわからないけれど、一応、'手当て'をしてくれたのでお礼を言ってみる。が、榊紫苑は眉間にしわを刻んだかと思うと、片手で口元を押えて顔を逸らす。

「いや、お礼は言わないで。正直、間違えてかなり恥ずかしいから」

しれっとした顔をしていたのに、実は恥ずかしかつたらしい美青年の頬がわずかに朱に染まっている。この人でもこういう顔をするのかと思うと、なんだか頬が緩む。

「…なに、俺の間違いがそんなに面白い？」

「そうではなくて、貴方が自然な表情をするのは珍しいなと思って」「え…？」

むっとしていた彼の表情が、愕然としたものに変わる。心なしか顔色も悪い。

“あ、もしかして踏み込まれたくない部分だったのかしら…”

珍しく、榊紫苑が動揺している。

「榊の人だから、処世術で身に付けているのかもしれないんですが、いつも本心を隠して感情を表情をされるので」

院長も榊のパーティーや診療中と同じ表情をする。診療中に限っては人間が営業用の別物になっている事を患者様は知らないけれど、スタッフの皆は豹変する院長を見慣れていても詐欺行為だと言うくらい露骨。

でも、パーティーの時は、表情の変わる仮面を付けているみたい。それは道化のメイクにも似ている。

常に張り付いた笑顔の奥にある瞳は、全く笑っていない。瞳を見ても心の奥底が分からなくてどこか身構えたくなる。

榊紫苑も表情を良く変えて喜怒哀楽を表現するけれど、瞳の感情までは変わらない。私の前でも、院長の前でも。

付き合いの長い仲の良い相手なら、素になっても良いはずなのに、それが榊紫苑には全くない。

「…それはきつと、吉良が俺を良くも悪くも特別扱いしないから」
「…？それは、榊の人間としてVIP待遇していないと言う意味ですか？」

意外にも、榊紫苑はあっさりとした私の話を肯定した。そして、同時にチクリと言われた気がした。

患者である以上、私は、どのような相手であれ対応の仕方に差は付けないよう心がけている。無論、榊紫苑に対しても。

それを咎められているのだろうかと思っただけけれど、榊紫苑はわずかに笑う。

何処となく自嘲気味に。

「俺をVIP扱いする人間なんていないよ」

何故と、訊ねてはいけない気がして、私はただ相手を見た。

「健斗から聞いているでしょう？俺、一八の時に榊から勘当されたんだ。だから、吉良も普通に接していたんじゃないの？」

「いえ。そのお話は初めて聞きました」

さも私が当然の様に知っているだろうと訊ねる相手に、私は首を横に振る。

院長に榊紫苑の事を聞いても話を逸らすのは、この話を避けて通れなかったからかもしれない。

院長が話したからないことは、私もあえて深くは訊ねなかった。

彼の事を知りたいと言う好奇心も興味もさほどなかったから、私が知る彼個人の情報なんてほとんど無いに等しい。

「貴方個人に一切の興味ナシです」

「…もう少し、俺に興味持ってくれないかな？」

本当に困ったような顔をした相手は、首を竦めた。

嫌いだとはつきり宣告しても応えた様子はないし、興味がないと言うのに興味を持って持ちかけるし。

やっぱり、榊紫苑とはどこか会話が通じない。

「そうしたら、たぶんキスしたりしないと思うんだ。貴女の興味を引きたいが為の行動だと思うから」

「そうなんですか…ん？…えっ！？」

興味を引くためにキスをするとか、その発想が榊の工口遣伝子のなせる技だと危うく納得しそうになった。

「自分のしたことに確信が持てないってどういうことですか？しかも、はた迷惑な興味の引き方をしないで下さい」

「普通のアプローチの仕方は知らない。女性と色恋なしに付き合った事もないから」

「男性のお友達くらい居るでしょう？」

「仕事仲間はたくさんいるけど、プライベートまでの深い関係の間は片手で余るかな…」

「その人とは、どうやって仲良くなったんですか？」

「まあ、趣味が一致したからとか…かな。基本的に、広く浅く付き合い合う主義だから、自分からは踏み込んだ事がない」

要は、自発的に積極性を持って親しい友人は作って来なかったということね。

「…男の人と仲良くなる感じで、女性に接してみてはどうですか？」

「俺、無駄に顔が良いから、女性の方からいつも恋愛感情ありきで寄って来るんだよ。だから、女性とは男の様にはいかない。だから女性とは色恋絡みの付き合いだけしか、した事がないし、言い寄る女が途切れた事がないから、自分から口説く事もなかったし」

榊紫苑のこれまでの、私に対する一連の拙い接し方の原因は、此処にあるのだろう。

ともすれば嫌味に取れる彼の言葉を、私が嫌味と感じなかったのは、彼の声にありありと嫌悪が浮かんでいたから。

「限られた交友関係しか築けないのも、大変ですね」

「そうだね。俺がこんな容姿じゃなかったら、もつと違う人生だったのかもしれない…でも、この容姿だから、家を勘当されても仕事にありつけた。そっくりな顔をくれた事が、母親に対して唯一、俺

が感謝の念を抱けることだよ」

母親と言った彼の表情が、酷く暗いものになる。

あまり母親との関係が良くなかったのか、榊紫苑の酷く憂鬱に沈んだ表情をこの時、初めて見た。

女性にもてそうだけれど、どこか女の人を冷めた目で見ていた印象があつたのは、母親との間に何かあつたからなのかもしれない。

「…ところで、ご飯まだ？」

私が口を開くよりも早く、榊紫苑はそう尋ねて来た。

まるで子供の様な質問をした相手に、私はなんだか脱力する。

「すぐ作りますから…貴方は絆創膏を持ってきてください。傷を保護したいので」

「…あつたかな。探してみるよ」

血の止まった左手の親指を見せて、料理を中断させた張本人をキッチンから追い出す。

行動に一貫性がない榊紫苑を相手に話をするのは、なんだかひどく疲れてしまい深くため息が漏れた。

良く言えば、独特の世界観を持っている。悪く言えば、空気が読めない。

“…でも、手を怪我した時…一応、心配はしてくれたから、たぶんそこまで悪い人じゃないとは思っけど…”

手当の仕方が‘誤解’とはいえ、ものすごく歪んでいたのが、優しさが帳消しなのだ。

手当をされた時の事を思い出し、榊紫苑に触れられていた指が異

常に熱く感じた。

思わず左手を右手で包むように押さえて、私は胸元に引き寄せた。また顔が熱くなり、心臓の拍動数が一気に跳ね上がるのが分かる。嫌なのに、榊紫苑がもたらす快樂に溺れそうになる自分。

“榊さんが変な事ばかりするから、私の頭の中までピンクになってきたのかなあ…それとも欲求不満？…それはやだなあ…”

性交渉に対して自分は淡白だと思っていただけに、不安だった。恋人でもない相手からの行為に、淫らな感覚を誘い出されたから、欲求の為だけに好きでもない相手と交渉するという概念もない、まして自分にその気なんてまるで無かったのに。榊紫苑の行動にうっかり嵌ってしまいそうになった事実は、私の頭を鈍器で殴りつける程の衝撃だった。

“だめだめ。もう、変なことは考えない。仕事に集中しよう”

意識すればするほど、榊紫苑の顔さえ見られなくなりそうだったので、無理やり頭の中から出来事を排除しようとして無理矢理、他事に集中しようとして意識を向けた。

私にとって、仕事をしてお金を稼ぐことが最優先事項だったので、気持ちを切り替えるのにさほど時間は要しなかった。

§

あれから私はうどんを作り、まだかとせかす榊紫苑と二人で食べた。

榊紫苑はたつぷりの野菜と卵の入ったそのうどんを、しっかりと二人前を腹の中に収めた。院長並みの食欲で。

“この分なら、夕食はもう少ししっかりしたものを準備しても大丈夫かも。二、三日分の保存がきく料理も作って念のため置いた方がいいかしら…何にしても、後で買い出しに行かないと…”

食べられないことを前提にしてあまり食材を買わなかったので、良い意味で予想を裏切ってくれた榊紫苑の為に、少し食材の買い足しが必要だった。

この人、あまり食事をしないって聞いたけど、食べると大食漢の部類かも。そうなると、作り置き of 料理の量も増やした方がいいのかもしれないけど、それは後で榊紫苑に確認してからにしようと思った。

食後、榊紫苑はやっぱりベッドで寝る気配がなく、リビングの六十インチを超える大画面のテレビで映画を見ていた。

微熱はあったものの、食事もしっかり食べて薬も飲み、ソファに寝転がって体を一応は休めているので私はあえて何も言わなかった。

見えない所で動き回って安静が保てないのも困るし、仕事をしな

から様子が見ていられると思えば悪くなかった。

“なんだろう…この子供の面倒を見ているような感じ…”

その大きな子供が要望したプリンを作りながら、不意に思い出す。お弁当を食べていた時も唐揚げとか、わりと子供が好きそうな庶民メニューばかり食べていた事を。

感情を隠している普通の榊紫苑から、子供が大好物を前にした時の高揚と嬉々とした様子が見て取れた。だから、好きな食べ物などは単純に分かるけど、彼の容姿だけで判断すれば、もっと高級志向で洗練された料理を食べているイメージがある。

だから、予想外と言えば予想外だけど、庶民的な料理でも文句を言わずに食べてくれるのは、作る側としてはとても助かる。

何より体力回復のためには、まず経口から食事をしっかりと食べてもらう事が、大前提だから。この分なら、榊紫苑の体調もすぐに戻るはず。

ああ、でも今作っているプリンも、また一気に食べてしまうのだからかと考えると、ちよつと心配になる。

何事も、度が過ぎると良い事も悪くなる。

特に、榊紫苑は行動の端々が妙に子供っぽい。天の邪鬼と言えばそれまでだけ。

そう思いながらも、生地をココット型に入れ、オーブンで焼きながらカラメルソースを作りあげて冷蔵庫で冷やす。

プリンが焼き上がるまでに時間があつたので、干したシートを取りこんでアイロンをかけようと思ったけれど、アイロンがない…。

榊紫苑に尋ねれば、「いつもクリーニングに出して済ませているから無い」のだから。

洗濯物は全てクリーニングだなんて、まったくもって不経済な話よね。

洗濯機はあるのに洗剤類が一切なかったり、物干し竿は備え付け

の物があるけどハンガー類が一切ないとか、まるで生活感が無かった。

だから、アイロンがなくてもさほど驚かなかったけど、皺の寄ったシーツはどうしよう。

「…なんでシーツと睨みあってるの？」

顔の前で持ち上げて広げていたシーツを下ろせば、榊紫苑が正面に座っている。

「このままにしたら、絶対に貴方はアイロンをかけないだろうなと思ってる」

「良いよ。最悪、クマ呼んで何とかするから」

「…クマ？」

「ああ、マネージャー…」

榊紫苑は慌てて口を噤んだ。

おそらく、マネージャーと言いつもりだったのだろう。

それを隠すように視線を逸らした相手に、何となくやまじさが窺える。

やっぱり、言い辛い業種の仕事をしているに違いない。

「ホストの？」

医師や医療関連の業種につく榊一族の人間にとって、ホストというウオータービジネスは十二分に言い難い職種のはず。

そう尋ねてみると、相手は明らかにうるたえた様子で私を見る。

「どう見ても、普通のサラリーマンには見えませんし、かといってお医者様特有の雰囲気もありませんし」

「……」
「それに榊一族ですから、女性の扱いはお上手だし、容姿と話術で女性を誑しこむのもお手の物って感じがします」

片手で額を押さえ、深いため息を漏らした榊紫苑は、しばらく沈黙する。

ショックを受けているようだけど、何にショックを受けたのか私にはわからない。

「…榊さん？」

ゆっくりと顔から手を離れたイケメンは、立ち直れない様子で私を見る。

「ホストになったから、厳格な榊の家を勘当されたのかなって、思ってたんですけど」

「…吉良の洞察力と想像力には負けるよ」

そう言って笑った彼には、既に表情の暗さはない。

ただ、嬉しくて笑うと言うよりは不機嫌を隠すように笑っているように見えて、ちよっと怖い。

「これから話す事、口外しないでね？」

院長似の似非紳士スマイルに殺気が籠っていて怖かったので、何度も首を縦に振った。

「俺、いわゆる妾腹だから兄弟仲が最悪で、親父とも折り合いが悪かったんだ」

「…それで反発したんですか？」

「それもあるけど、医療界に入っても、折り合いの悪い兄貴達に医者
の道を潰されるのは目に見えていたから」

榊は医者がほとんどのエリート集団故に、派閥もあるし派閥同士の
確執も多くあったのを、聖心会の本院で勤務していた頃に見てい
る。

例え兄弟でも折り合いが悪ければ、水面下で足を引っ張り合う泥
仕合をしている。

だから、榊紫苑が言うことは、実際に起こりうる事象で否定は出
来なかった。

医者になれば権力闘争どころか、身の潰し合い。

医者にならなければ、榊のヒエラルキーでは最下層になる。

同じ医者でも、専門する科が『外科』に属さないだけでも、冷やかな目で見られると言っのに…。

そう考えれば、辛い選択だったと思う。

「家にも居なくなかったし、あいつらとは関係の無い所で早く自立したかったんだ」

「何時から働いているんですか？」

「本格的に働き出したのは、高校卒業と同時かな。家もその時に出たんだ」

そう告げた榊紫苑の表情は、後悔など一抹もなかった。

むしろ清々しさを感じる笑みを浮かべていた。

「一応、榊を名乗ることは許されているけど、今も本家から末端の分家筋にまで、俺の存在は無い物として扱うように命令が飛んでいるから」

「本家から？」

「榊で医療系や官僚系の職業に従事しないのは俺だけだから。前代未聞の異分子を、徹底的に排除して晒しものにしたんだよ。次の同胞が出ないように」

「医者家業、殊に外科医至上主義の榊一族の統率を保つため…と、言うことなのだろうか。」

ある意味、閉塞的な世界観を持つ榊家なら、あり得るのかも
ない。

院長でさえ、精神科医として今の病院を起こす時に、かなり一族の人たちから嫌がらせやら、揶揄と侮蔑を受けていたし。

「俺としては、あいつらと縁が切れて清々しているし、生活には不自由もしていないからこんな幸せなことはないんだけどね」

「…え？」

思わず疑問の声が出た。彼の言葉に、大きな謎が。

「えっと…何？」

「じゃあ、此処のお家賃は？」

「俺の給料で賄っているけど？」

「…立地とか、部屋の無駄な広さを考えたら、どう見積もっても月百万円近いですよ？」

そう。榊紫苑が住んでいるのは高級住宅街で、しかも一人暮らしには無駄なただっ広さの4LDK。

外観も、内装も安物分譲物件とはわけが違うし、マンション内のセキュリティもハイクラス。

「家賃、そのくらいの金額だったかな？…まあ、大したことはないよ？稼ぎは良い方だから」

私の住んでいるアパートなんて、このマンションのリビングより狭いの。

この広さなら、大家族だって住めるじゃないの。それを一人で済むだなんて。しかも、金額の桁が違うのよ？

「お金の無駄遣いよーっ！！！」

心の底から、私はそう叫んだ。

部屋の広さも、家賃も、もっとと有意義に使うべきなのに。

「…え？無駄遣い？」

榊紫苑は怪訝そうにそう私に尋ね、私は大きく頷いた。

「百万円ですよ？？庶民がそんな大金手にしたら、浮かれて踊っちゃうんですよ！私の給料、何カ月分だと思ってるんですかっ！」

何とも困った顔をして私を見ていた榊紫苑は、突然、笑い出した。しかも遠慮も無く、お腹を抱えて笑っている。

「き…吉良、さいこお…」

拳句には、笑い過ぎて呼吸が出来なくなつて、涙目になりながらもまだ笑い続けている。

いわゆる大爆笑。イケメンが台無しなくらいもがいて笑っている。何が彼のツボにはまったのか分からないけれど、彼は笑いから抜け出すのに五分を要した。

「…満足しましたか？」

「ああ、うん」

目元の涙を手で拭いながら、榊紫苑はようやく姿勢を正して私を見た。

「何が面白かったんですか？」

「いや、浮かれて踊る吉良を想像しちゃったよ」

何であえて私で踊る所を想像してくれたのだろう、この美青年。私が生活感あふれる庶民だから？それとも、滲みでる貧乏症のせい！？

「……すみませんね、庶民飛び越えた貧民で」

努めて愛想笑いで答えてみたけれど、榊紫苑がまた嘖き出した。

「…今度は、何のツボにはまったんですか？」

「吉良つて、もっと真面目ー辺倒な人だと思っていたけど、発想が意外にお茶目だよね」

「…はあ」

お茶目？

何処がどのように？

あえて、自虐的な嫌みで応戦したはずなのに、榊紫苑は、どうしてそう言う解釈にたどりついたんだろう。

「貴女と話していると、なんだか楽でいいや」

「楽？」

楽しいではなく、楽ってどういう意味なのだろう。

首を傾げた私に、榊紫苑は笑いながら頷く。

「普段の様に考えて笑わなくても良いし、俺とは色恋沙汰にならなさそうだから、肩の力が抜けると言うか…」

その割に手を出してきたのは誰？って、言いそうになったけれど、

言ったら変な地雷を踏みそうなので踏みとどまる。

単に、手を出してもあしらうって分かっていてちよっかいを掛けているだけなのだろうから、これは、あえて無視すればいい。

問題は。「考えて笑う」と言う答え。異様過ぎる。

仕事で意図的にそうしていても、日常ではそこまでしない。

彼の言葉は恒常的に多様な場面で、そうして生きていると言う証明だ。

「もしかして榊さん、いつも心で感じる前に頭で考えて反応しています?」

「言われたらそうかもしれないけど…それがどうかした?」

「…榊さん、今ものすごく生き辛いんじゃないですか?」

「どうして?」

「やせ我慢も大事ですけど、ちゃんと弱音を吐く場所を作らないと、気持ちが悪くして心が壊れちゃいますよ?」

自分でも気付いていなかったのか、自覚していたことを指摘された為か、榊紫苑の表情が露骨に変わっていった。

第十一章 存在の証明

『やせ我慢も大事ですけど、ちゃんと弱音を吐く場所を作らないと、気持ちが悪くして心が壊れちゃいますよ?』

何故、彼女がそんなことを言うのか、俺には分からなかった。生き辛いつか、そういうことを考えたことはなくて。けれど、これまでの生活に息苦しさを感じてはいた。

「やせ我慢なんて、結構きつい事言うね?」

「そうではないと言い切れます?」

「俺、脆い人間に見える?」

「見えません」

「俺はずっとこのスタイルで生きている。貴方にどうこう言われる筋合いはないよ」

俺の事をよく知りもしないで、ずかずかと深入りしてくるのが、一番嫌いだ。

特に先程、放たれた彼女の言葉は、男としてのステータスしか見ない他の女と違って、俺の心を酷く抉りつけた。

吉良は、困ったように笑う。

「……ずっと気を張り詰めてばかりだから、貴方は眠れないんですね」
「?」

何をどう辿ってその結果に行きついたのか、俺には見当もつかない。

「貴方、表面上は人当たりが良いですけど、人をあまり信用していないでしょ？だから、いつも人を警戒していませんか？」

その正鵠を射た問いかけに、俺は反射的に仕事用の笑顔を浮かべてしまう。

同時に、吉良の人差し指が、俺の顔近くに突き付けられる。

「それです!」

「それ？」

「本音を言わないで、ずっと建前だけ。言いたいことを我慢して、そうやって愛想笑いを浮かべて誤魔化していませんか？」

そうだ、この人は俺の営業スマイルを見抜いていた。なんだか、吉良に俺の手の内を読まれているようで、診療中の健斗を相手にしているようで、やりづらい。

「なに、健斗の受け売りでもしたいの？」

吉良が今言った言葉は、もう十年近く前、健斗の診療を初めて受けた時に言われた言葉とほぼ同じだった。

従兄弟の時は軽く受け流せたけど、彼女に言われるとなんだか腹が立つ感じだった。

「それとも、貴女に俺の本音でも晒せばいいの？」

「私ではなく、榊さんが気を許せる人間であれば、誰でも良いんです。でも、貴方は仲の良い院長にも本音は言わないようですし…」

「…DSに攻撃材料を渡すわけがないだろ？」

吉良が曖昧に笑う。

「普段なら、そうでしょうね。でも仕事中は人格どころか人間が別物ですから、優しくて頼りになりますよ」

それは健斗を褒めているのか？

とりあえず、吉良が健斗を医者として認めていることは分かる。

だが生憎、俺の診療中は普段の従兄弟の性格のままだ。彼女の言葉が鵜呑みに出来ない。

それに、今の健斗を頼りにする吉良の言葉は気に食わない。

「だとしても、健斗にだけは絶対言わない」

不覚にも露骨に不快感をあらわにしてしまった俺に、吉良は不思議そうに首をかしげる。

「そもそも、吉良は俺に進言しながら、自分は俺の話を聞く気はない訳？」

「貴方にその気があるのなら、仕事中にカウンセリングとして伺いますよ？」

「プライベートではお断りってこと？」

「患者さまとプライベートの共有は一切しません。それに、仕事中の私には守秘義務と言う制約があります」

「それは、吉良は俺との話を秘密にしてくれるってこと？」

「ええ」

「健斗にも？」

「…貴方がそう強く望むのなら、院長にも言いませんし、他言は一切しません。ただ、貴方が何かしらの犯罪で警察沙汰になった場合、

警察などに貴方の情報を提供する場合があります」

「いや、別に警察に世話になる様な事はしていないから、大丈夫だけれど……」

流石に、間違っても警察沙汰になる事態はないだろう。

世話にならない様に、細心の注意を払って生きてきたのだから。

「問題は、貴方を大嫌いと言言した私を、貴方が信頼して初めて成立する話だということです。私は貴方に無理強いするつもりはありませんし、貴方の意思にお任せします」

つまり、仕事上なら話は聞くけれど、それ以外はお断り。

守秘義務で秘密は最低限守られるが、貴方は好きじゃないから相應の覚悟をして望め。

ということか、もしくは、自分からは断れないから、俺が断るよ
うに仕向けているのか。

そんなことを言われなくても、俺の答えは決まっている。

「悪いけど、吉良だろうと健斗だろうと、弱音を吐くつもりも本音を吐きだすつもりもないよ」

吉良はただ、頷いた。その答えを予期していたかのように。

「だけど、吉良と話をしたいと思う」

彼女の大きめのダークブラウンの双眸が一瞬大きく見開いたあと、
何度も瞬いて長い睫毛が揺れた。

予想外の事に、どうすれば良いのか分からない様子で。

「前に言っただろ、貴女と話していると楽だって」

「…はあ」

要領を得ない感じで、吉良はそう答えるがまだ頭の上にクエスチヨンマークがいくつも浮かんでいるような顔をしていた。

「…それとも、貴女の事が知りたくてたまらないから、貴女の全てを教えてって率直に言った方が良い？」

俺の前に突き出されたままの吉良の手を取り、上坂伊織の口説きモードでそう告げ、軽く手の甲に口づける。

途端に、吉良の大きめの瞳が更に驚きで大きくなり、頬に朱が差す。

「な、なななななんで、て、手に、キスをつ！？」

言葉よりも行動に反応した吉良は、俺よりも四つも年上だなんて全く思えない程、うろたえて恥ずかしくがっているのがまるわかりだ。つい、もつとからかってみたくなる。

「食後のデザートがなかっただろ？」

「え？あ…ゼリーなら有りますよ？」

この期に及んで、吉良はそんな見当違いで真面目な言葉を返して来る。

「そんなものより、貴女の方が良い…甘くて淫靡な貴女が食べたい」

そんな真似をしたら、健斗は有言実行で吉良を俺の診療から外すだろう。けれど、彼女が乗り気になってくれるなら、このまま抱いてしまっても良い。

口説き落とす手段は、言葉だけではない。完全に俺に溺れさせるなら、身体に教え込む方が手っ取り早い。理性的で恋愛の話になると途端に鈍くなる吉良には、こちらの手段の方がより効果的で、背徳であればあるほど、落ちた後は溺れやすい。

俺に溺れれば、吉良の方から俺の診療に付きたいと言わせるのは容易いから。

「俺に食べられてみる？」

間合いを詰めながら、耳まで真っ赤に染めた吉良に、俺は誘う様に熱っぽく囁いた。

「け、結構ですっ！食べても美味しくありません！賞味期限切れでお腹壊しますから、絶対食べないで下さいっ！」

半ば涙目になって、必死に頸を何度も横に振って拒否の意を露わにする。

他の女なら、熱のこもった期待の眼差しを込めて俺を見つめて来るのに、吉良には一切それがない。

年齢に添わず初心過ぎる反応だけれど、何となく彼女らしくて嫌ではない。

むしろ、吉良のスレていない反応に対して更に加虐心を煽られると言うか、このまま抱き寄せてしまいたくなる。

思わず彼女に手をのばしそうになり、慌てて自制する。

“だから、吉良にはその気がないだろ。何で、手を出しそうになるんだ”

その気の無い女は抱かない主義なのに、どうもその自分の意思が吉良の前では崩れそうになる。

内心で自分を諫め、自問自答してみた所で、答えなどやはり分からない。

「…冗談だよ。仕事が忙しくて、人と約束をして出かけることも最近は全くなかったから、こうしてゆっくり話するのが楽しいんだよ」

「も、弄ぶの間違いじゃないですか」

「弄ばれたいの？それなら、吉良が賞味期限切れじゃないって、証

明してあげるよ?」

「きよ、拒否します!」

「残念」

俺に靡かない吉良に、どこかほっとする半面、本当に残念だと思
う自分が居る。

あまり苛め過ぎるのも、良くない。

「…ところで榊さん。夜のお仕事を少し減らせないんですか?」

ホストと勘違いしたままの吉良が、不思議そうに問う。

まったく、彼女は鋭いのだか鈍いのだかわからない。

俺としては、都合よく間違えてくれて助かるけれど、俺がどうし
てホストに見えるのか謎だ。

「アルコールだってたくさん呑むから長く続けていれば、肝臓を壊
しますし…指名を獲得するために、睡眠時間を削ってお客さんに連
絡を取ったり、同伴出勤のためにデートしたりするし」

そう言う理由で俺が不眠症なのだと、吉良は思っているらしい。

だが、吉良はどうしてそんな内情に精通しているのだろう。

「…吉良、どうしてそんなにホストの事詳しいの?」

「う、え、あ…そ、それは…し、知合いがその…ホストに入れあげ
て、借金の為に風俗に行っちゃったので…」

身ぶり手ぶりを用以て、必死になってそう答えた吉良のオクター
ブが、一つばかり上がっていた。しかも目が泳いでいる。

この狼狽ぶりは、少なからず嘘をついている。

多分、吉良はホストの様なウオータービジネスの内情を少なから

ず知っている。

それも他人から聞いた情報ではなく、恐らく、自分が見聞いた知識だろう。

俺と違って、吉良は嘘をつくのが苦手なようだ。

この分なら、俺の本業を知っていてあえて知らぬふりをするというような策を弄すことは出来ないだろう。

“今は騙されたふりをしておいてあげるけどね？後々、じっくり聞かせてもらおうかな”

吉良が他の男に入れあげていたとしたら、かなり気に入らない話だ。この俺にすらこの程度の反応しかしない吉良を夢中にさせるなんて。

けれど俺にとって、職業を勘違いしてくれていた方が都合だから、今は何も言わないでおこう。

「この仕事は人気商売だからね。努力以上に、多少の無理をしないとすぐに干されるから、手抜きなんて出来ないよ」

「…でも、体あつての仕事ですよ？」

「家族も家も捨てて、この世界で骨をうずめるつもりで踏み込んだ仕事だから、妥協はしない」

「…心がけは立派ですけど、今みたいに体を壊すまで頑張るのは駄目です。良い仕事が出来なくなるじゃないですか」

吉良の様にあまりすれた所がない人間は、ホストや俳優の様に安定性の無い仕事について否定的な見方をするのかと思っていた。

けれど、吉良は仕事自体を否定するつもりはないようだった。

「仕事を止めるって、説教するのかと思ったよ」

「止めた方が良かったですか？」

逆に問われて、俺は首を竦めた。まさか、そんなことを聞かれるとは思わなかったから。

「いいや。吉良みたいな堅い人なら、この手の職種を否定するかと思っただから。だから、言わないのはどうしてかなと」

「相当な覚悟をして飛び込んだ道なら、とことんやればいいと思っただので」

随分とあっさり、吉良はそう答えた。

「それに、労働をしてお金を稼ぐって、どんな仕事でも綺麗事で済まされる事ばかりじゃないし、楽なことでもないですから」

「それでも吉良の仕事は社会的な立場もあって、安定した職業だろ。俺とは違う」

刹那、吉良の双眸が俺を鋭く見据える。

怒りを湛えている訳ではない。彼女の瞳は俺の心を見抜こうとしているようだった。

「…榊さん、今のお仕事、嫌なんですか？」

「…どうして？」

「自分の仕事に誇りをもって臨んでいるのなら、そんな台詞は出ませんよ？」

その一撃は、俺の脆い部分を大きく抉った。

俺は血の繋がった家族と訣別し、榊という家を捨てて俳優の道を選んだ。

『榊紫苑』という己自身を完全に捨て、『上坂伊織』として生きていくことを決めた。

後悔はなかった。

ようやく窮屈な檻から抜け出して自由を得たのだと、安堵した。

最初、仕事は容易かった。ただ、望まれるままにそれを演じれば良かった。

演じることは楽だ。

子供の頃から、周囲の大人たちの目を気にして『演じる』ことを身につけていた。

だからなんの苦勞もせず、役に入り込むことが出来た。

母親似の容姿も相まって、勝手にイケメン俳優などと持ち上げられてくれ、仕事も順調に増えて生活は不自由もなくこれまでできた。

でも、それだけだった。

何時しか『上坂伊織』である事さえ苦しくなっていた。

それは、『上坂伊織』の人生が公私の区別なく、自分を作り続ける生き方だったからだ。

捨てて切り離れたはずの『榊紫苑』の窮屈な生き方そのものが、『上坂伊織』としての俺にも常に纏わりついていてた。

気付いてしまっってから、その先は地獄。

逃げた籠の先は、更に大きな籠の中。それも、昔の様に逃げ場はない。

普段の生活にも制限が付き、人目に触れる所では『上坂伊織』を演じ、途切れない緊張が苦しくて、辛くて、息の仕方さえ分からなくなる。

一人になればその孤独が、母親に捨てられ敵意むき出しの見知らぬ『家族』の中に投げ込まれた頃を思い出させる。

肉体的な暴力も、精神的な暴力もただ黙って耐えるだけの日々。いつ何をされるか分からず、夜さえ満足に眠る事が出来ない。

俺に興味を示さず無視をするか、悪戯に俺を貶める敵意を持つかどうかどちらかにしか属さない人間達の中で何年も過ごして、気付けば人間が信用できなくなつた。

だから何時も誰かが傍にいなければ、それを思い出して不安になる。

けれど同時に、傍に寄せることは恐怖だった。

利害の一致した仲間とつるんで夜を明かし、その場限りで後腐れの無い女を抱いて、心の中に巢食う不安と孤独をやり過ごした。

親切な顔をして近付いて俺を貶めた義兄のような人間は要らない。俺に真つ当な情を傾ける様な人間も居るはずがなかった。

下半身の緩い女でも、『上坂伊織』と言う名前に付いた付加価値との利害関係を望む奴でも良い。露骨な慾を晒しても、俺に深く関わらない、薄っぺらい関係を望んでくる奴の方が幾分増して、付き合ひやすかった。

人が居れば気が紛れる。確かに楽だが同時にそれは、『上坂伊織』の仮面が外せない。

時折、一人で眠れば毎回のように子供の頃の夢を見る。

孤独に不安を煽られ、浅く短い眠りから覚める。

眠りたくないと願ったのは何時からだろう。

不安と恐怖の綱渡りで、誇りとかそんな感情を抱いて仕事に向き合ったことはない。

仕事に追われることで、逃げ続けているだけ。

そんな脆く弱い自分を見せるのが嫌で、誤魔化して隠し続けているだけなんだ。

“誇りなんて、何処にもない…逃げて、逃げて、更に追い込まれているだけだ”

どうして吉良は俺の弱さを簡単に見破って、心を揺さぶるのだろうか。

「…大して俺の事を知らないのに、俺の事見透かしたつもり？」

「見透かせる訳ないじゃないですか。何となく、今の貴方は昔の私に似ている気がしただけです」

露骨に不快感を露わにした俺に、吉良は首を竦めて苦笑する。

「俺と貴女が？」

「何となく、そんな気がするだけですよ…私、院長の許で働く前、

公私で煮詰まっただうにもならない時期があったんです」

「…貴女が？何でもそつなくこなせるのに？」

「…私が器用なら、どうにかなっただんでしょうけどね」

吉良はただ、困ったように笑う。

「誰にも弱い所を見せたくなくて、自分の心に嘘ついて…無理に笑って仕事をして苦しい気持ちから逃げていたら、不眠症になった拳句に院長たちに迷惑をかけて…」

「…何があつたの？」

「睡眠薬の飲み過ぎ（オーバードーズ）で、危うく死にかけちゃっただんですよ」

俺が尋ねた意味とは別の答えを、吉良は冗談にもならない言葉で告げる。

意図的に話の内容を避けられたのか、別解釈で捉えたのか判然としない。

だがそれ以上に、あまりに飄々とした様子で吉良が危うい事を言うので、俺は言葉に詰まった。

「深く長くずっと眠っていたかっただんですよね…だけど、薬は増えるのに全然効かなくて。眠りたくて、現実から逃げたくて、処方された薬を一気飲みしちゃっただんです」

吉良の言うことは、少しわかる。

安定剤も睡眠薬も服用期間が長くなれば効かなくなり、次第に薬は強くなり、量も増える。

健斗に診察を受ける前までは、別の精神科の医者に過剰に薬を与えられ、その用量でも効かずに、それ以上の量の薬を多飲した。

目は冴えたままなのに頭は朦朧として、まるで夢を見ている様に

現実の中を生きていた。

薬が効かない癖に、服用しないと禁断症状みたいな変な症状に悩まされて、必要のない薬を飲む無限ループ。

日常生活に支障が出るほどの依存状態だった俺を、健斗が薬抜きをして依存状態からは脱出させてくれた。

それからずっと健斗に治療を任せて、薬の量は驚くほど減った。

健斗曰く、『効きもしない薬を飲むほど莫迦莫迦しい事はない。いつそ飲まずにいた方が体に良い』のだとか。

でも時々、今でもどうしても眠りたくなって睡眠薬と安定剤を大量に飲む時がある。

結局、大して眠ることも出来ずに迎えた翌朝は、薬の副作用で気分是最悪。何時も後悔する羽目になる。

眠れない焦燥と苛立ちで、処方以上の量の薬を一階に飲む。知らず知らず薬に依存してやってしまいがちなその行為は、一歩間違えれば死ぬ。

薬が強ければ強い程、そのリスクが高くなる事を健斗は俺に教えてくれた。

薬剤の過剰服用の危険性を当然熟知しているであろう、看護師の吉良がやったなんて。

しかも、彼女は健斗のお気に入りだ。そんな危ない看護師を従兄弟が傍に置くのか？

「そうしたら丸二日も昏睡状態だったみたいで…目が覚めたら病院で、美菜先生は号泣しているし、院長は激怒していてもう大変」

何が面白いのか、吉良は笑顔でそう話す。それは、自嘲の様でもあった。

一歩間違えれば、死んでいたのだ。

「いや、笑い事じゃないでしょ。それ」

「そう、笑い事じゃ済まないんです」

急に真顔になった吉良に、俺は息をのむ。

「誰にも頼らず、仕事に逃げて。榊さんの不眠症はどんどん悪化してる…何時か貴方は私と同じことをしそうな気がするんです」

「別に俺がどうなるうと、貴女には関係がないと思うけど」

「私はもう二度と、美菜先生と院長にあんな顔をさせたくないんです」

「だから、どうかかしたいって？美菜様や健斗の為に」

俺の言葉に素直に頷いて見せた吉良に、どろりとした嫌な感情が心の中を這いずる。

吉良の行動は、美菜様と健斗を主体になされている。

吉良のダークブラウンの双眸に俺は映っているのに、彼女の瞳は俺を通した先の別のものを見続けている。

俺が此処にいるのに。

「…ちよつと…」

迫った俺から逃げるように座ったままの吉良が後ずさろうとし、俺は彼女の片腕を掴んでそれを止める。

狼狽と不快感を堪えることなく表情にした彼女は、空いた手で俺の手を振りほどこうとする。俺が強い力で握れば、彼女は視線を逸らさないまま、無言で俺を牽制する。

「俺をその気にさせたいなら、言葉が違うだろ？」

「は？」

何だと言わんばかりに、盛大に眉間にしわが寄った吉良に顔を寄せれば、吉良は慌てて腕で俺の胸を押し退けようとする。

が、バランスを崩した吉良はそのまま後ろに勢い良く倒れる。咄嗟に無防備に倒れていく吉良の後頭部を守る様に手を伸ばし、片手を床について身体を支えたものの、吉良と一緒に倒れ込む。

絨毯が引いてあったので、さほどの衝撃にはならなかったが、吉良は自分が倒れた事に驚いていたのか、やや放心状態で俺を見ていた。

「痛い所、無い？」

「…あ…はい」

怪我也痛い所もなさそうなので、とりあえず安堵する。

女性に怪我をさせるのも、目の前で傷を負うのも好きじゃないし、

美菜様の事があつたから余計にその辺に過敏になっていた。

“こうして見ると、吉良、睫毛が長い…”

何となく彼女を見つめていると、いつの間にか薄化粧をしている事に気付く。大きめの瞳が俺をじっと見据えて瞬きを繰り返す度、くるりと弧を描く睫毛が揺れてその長さを強調する。

取り立てて美人ではないけれど、いつ見ても俺より年上には見えない彼女の童顔は、女を誇張することなく、つつましい女性らしさを表現する愛らしさが目を引く。

何と言つか、見ていて安らぐ。

「あ、あの…ど、退いてもらえませんか…」

気を取られていると、不意にそんな声が聞こえる。

我に返れば、彼女を押しつぶす真似はしなかったけれど、俺は吉良に馬乗りなるような形のままで彼女を見下ろす形で見つめていた事を思い出す。

「お、押し倒すなら、彼女さんだけにしておいてください」

「…このまま吉良が、俺の彼女になってくれたら問題無いよね？」

甘く誘うようにそう告げれば、こげ茶の綺麗な瞳が零れおちそうなほど、吉良の双眸が見開かれた。

「な、何の嫌がらせですか」

警戒した様な視線を向ける吉良の頬を指先でなぞり、俺は薄く笑う。

そう。彼女が言うように俺のしていることは確かに嫌がらせだ。

「こうでもしなければ、吉良は俺を男として見ないから。」

「彼女のお願いを、無下にはしない主義だから、吉良としても良いと思うよ?」

「…どういう意味ですか?」

「美菜様や健斗の為に、俺の不眠症がこれ以上悪化してほしくないと、吉良は思っているんだろ?その為に、俺に色々改善してほしい事があるだろ?」

「…そ、それはまあ…そうですね…」

「それって、吉良の個人的な願いであって、看護師としての枠を外れたものだよね?それを看護師としての立場で、彼女でもないのに、俺に押し付けるのはどうなの?」

俺の問いかけに、彼女の目が泳いだ。

彼女は、嘘や誤魔化しが下手以前に出来ない人種なのだろう。

露骨すぎるほど、俺への対応に困っているのがわかる。

そして、彼女が看護師の立場を逸脱するほどに、美菜様や健斗の存在が大きく、大事なのだと思知らされる。

余計に俺の胸の中を、不快な感情が黒く染める。

俺ばかりがこんな気持ちになるのはフェアじゃない。吉良も少し、困ると良い。

「…俺の気持ちを知りながら、随分、酷い事するよね?」

憂いた様に呟けば、吉良が息をのんで俺を見る。

「あ、貴方の気持ち?」

「まさか…知らないなんて言わないよね?」

戸惑いがちに意味深な言葉を投げかけてみれば、吉良は再び視線

を泳がせた。

「な、何の話ですか…」

ばつの悪そうな顔で、俺の言葉の意味を模索して心は此処にあら
ずと言った感じだった。

「俺は吉良と親しくなりたいのに、貴女はそれを拒絶ばかり…これ
でも、結構傷ついているんだよ？」

「嘘…反応を楽しんでいるようにしか…」

“余計な所だけ、どうしてこつも目ざといんだ”

ほぼ即答した吉良に、思わず内心で舌打ちした。

だが、そんなこと表には一切見せず、俺は寂寞を募らせるように
言葉が続ける。

「誤解だよ。俺、自分から女性に手を出すの初めてだから、良くわ
からないんだよ」

「ど、どう見ても、て、手慣れてますけど…」

「…どの辺が？」

「…無駄にエロい…スキンシップ過剰なコミュニケーションが」

率直に答えた吉良に、俺の唇の端が挑発するように淫靡に歪む。

刹那、吉良の体が強張り、彼女の色白な頬が朱に染まる。

上肢を屈め、吉良の耳元に顔を寄せて俺は囁く。

「言葉を重ねるより、体を重ねた方がより早くより親密になれるだ
ろ？」

耳朶に唇が触れるか触れない程の距離で、挑発するように言葉を紡いだが、彼女は身じろぎ一つ、言葉一つ返すことが出来ないでいた。

いや、反応さえできない程、彼女は動揺していた。

耳まで真っ赤に染め、瞬きどころか呼吸さえも忘れるほど、彼女の心には響いたらしい。

本当に彼女は俺より年上なのか、こういう所を見ると俄かに信じがたくなる。

房事に不慣れな感じが、俺の嗜虐心を煽る。

「吉良はそう思わない？」

「お、思いませんっ！」

途端に吉良が俺を引き離そうと、身じろぎする。

間近でなければ分からないほど弱々しい、ラベンダーの優しい香りが俺の鼻梁をつく。

この香りが心地良い。

調香され無機質に噴霧されただけでは感じることもない、温もりを帯びた感覚。

目の前の女性から伝わる、甘さと柔らかさを帯びた香りをもっと感じていたい。

「さ、榊さん、な、仲良くなる方法が、お、おかしいです！」

「そう？普通だと思っよ？」

「み、耳元で喋らないで下さい……」

暴れる吉良の両手を押さえこみ、彼女の耳朶に唇がかすめる距離で囁けば、羞恥と怯えの混じった吉良の声が聞こえた。

逃げられないのに俺の下で必死に身じろぎする相手が、妙に可愛らしくて。もっと、意地悪くしてみたくなる。

「吉良は反応が初心で面白いね」

上体を少し起こして年上とは思えない相手を見れば、相手は真っ赤な顔のまま渋い表情を作る。

「……やっぱり、からかってるだけでしょ、榊さん」

「可愛くてつい、苛めたくなるんだよ」

「と、年上を捕まえて言う台詞じゃありません」

「赤い顔して照れながら怒る所も、ものすごく可愛いよ？」

「可愛くありませんっば！あ、貴方、ホントに誑しですね」

泣き出しそうなくらい恥じ入りながら細く呟いた彼女の姿に、心臓が掴みとられたかのように締め付けられる。

恥じらいの中に庇護したくなるような弱さと、劣情を駆り立てるような色香が混じり、俺に息苦しいほどの動悸を与える。

抱きしめ、キスをして、彼女と一つになりたい。

吉良という存在の全てを、手に入れたい。

俺から逃れられないように、他の男など目に入らぬほど心を縛りつけたい…

不意に己の脳裏をかすめた衝動に、一瞬にして心が冷えた。

急浮上した独占欲という感情に、体から血の気が引く。

“この俺が誰かを占有したい？しかも女を？”

あり得ない現実を目の前に突きつけられ、頭の中が真っ白になる。確かに彼女を気に入ってはいた。

でもそれは、看護師としての彼女が好ましくて、善いと思っただけにすぎない。

決して、今の様な男としてはつきりと吉良を求める感情ではなかった。

性質の悪い冗談だ。

「…榊さん？顔色が悪いですよ」

近くにいるのに、遠くに感じる吉良の声。

「…まだ体調が良くなってないんですから、ちゃんとベッドで安静にしてください」

どうして彼女は組み敷かれても尚、瞬間的に看護師という立場に戻れるのだろうか。

あれほど動揺していた女性の姿は何処にもない。

何時もクリニックで見せる仕事の顔が、今は酷く嫌だと思う。

何故、他の女の様に俺に囚われたままでいてくれないのか。

「嫌だ」

「い、嫌って…」

「俺の為に言ってる訳じゃないんだろ？」

なんだ、その構ってくれないな子供発言は。と、言った直後に俺は後悔した。

でも、衝動的に口をついていく言葉を止められなかった。

「俺の調子が良くても悪くても、さっさと俺を置いて帰る癖に」

不意に、俺を置いて突然消えてしまった母親を思い出して、酷く胸の中がドロドロと焼けただれた感覚に陥って、眉間に深い皺が寄った。

吉良をみれば、彼女は可哀想なものを見るような目で俺を見る。

あまりに低俗過ぎることを口にして、吉良の視線にも耐えられなくなり、俺は彼女を押さえつける手を緩め離れようとした。

が、次の瞬間、俺の体がぐらりと揺れて気付けば俺は天井を見ていた。

バランスを崩した訳でも、めまいを起こした訳でもない。

「…吉良？」

彼女が俺の両肩を押さえつけるようにして、俺を覗きこむ。

その表情は、酷く冷やかだった。

吉良に押し倒されたのだ。

「何、欲求不満？」

刹那、俺の額が叩かれた。

いや、叩かれるように額に吉良の手が添えられたと言った方が正しい。

心なしか、吉良の手が冷たく感じる。

「…減らず口ばかり言わないで下さい。変なことを言うと思ったら、やっぱり熱が上がってるじゃないですか」

「熱？」

「貴方は病人なんですから、もう大人しく休んで下さい」

「…添い寝してくれるなら寝るよ」

「しません」

即答で答えた吉良は、俺から離れ傍で綺麗な正座をする。

「でも、話の相手だけならしますよ？昨日の夜みたい」

俺を見下ろしながら苦笑する吉良の言葉を、俺は理解できなかった。

「昨日？」

「覚えてないんですか？私の手を掴んで、話の相手になれって言ったの。榊さん、手を離さないまま、喋りながら寝てしまったんですよ」

ああ、そうだ。朦朧とした意識の中で、誰かの手にすがって何かを喋っていた。その最中、俺の顔に滲む汗を拭い、喉が乾けば飲み物くれた。

でも、その相手の顔を覚えていなかったし、まして夢なのか現実なのか高熱のせいで分からなかった。

あれは、吉良だったのか。

俺が腕を掴んでいたとはいえ、この女性は朝までずっと傍で看病していたのだろう。

どんな人間でさえ俺の不眠症を癒せなかったのに、吉良だけが熟

睡し心地よく長く眠らせてくれた。
そう思うと、黒く澱んだ胸に潜む感情が温かいものになんて変わって
いく。

「…今度は覚えておくよ」

「ただし、お触りは禁止ですよ？」

「今時、小学生でもキスぐらいするのに？」

「どんな理屈ですか：分かりました。手を握るのだけは特別に許可
します。でも、それ以外は認めませんし、貴方に特別料金を要求し
ます」

「特別料金？」

「特別料金で私を満足させられない場合と、手を握る意外の事をし
た場合は、即刻、院長と美菜先生に今日これまでに貴方が私にした
全ての行動を、全て報告します」

俺が絶対に勝てない天敵を切り札にした吉良に、心底、俺は畏敬
の念を抱く。

健斗的にはグレーゾーンの行動でも、派手な容姿に反して女性の
貞操観念に厳しい美菜様判定では、俺がさっきまで吉良にした行為
はレッドどころかデッドゾーンだ。

美菜様に知られたら、俺は間違いなく社会的に抹殺される。そし
て、高校生の頃に体験した、地獄の様な美菜様流の「躰」で、しば
らく再起不能にさせられるだろう。

しかも、特別料金の適正基準が分からない。下限値を下回る事な
どあつてはならないが、吉良の事だ。高額過ぎても家賃の時の様に
絶叫するのだろう。

仮に、手を握り特別料金を支払ったとして、吉良を料金的に満足
させられなかったら、もれなく美菜様からの懲罰コースだ。

俺に好き勝手させない包囲網が、知らぬうちに出来上がっている。
これまで俺に好き勝手にさせたのは、この脅し文句を言う為だっ

たのかと思うほどの策士だ。健斗が吉良を自分の傍に置いて働かせる理由が、少しわかった気がする。

「…美菜様だけは困る」

「では、病人は大人しくベッドへ戻ってくださいね」

くすりと吉良が笑った。

それは仕事に見せるさし障りの無い人好きのする笑みではなく、悪戯っ子を見守るような優しく包容力のある女性らしい笑みだった。見るだけで安堵出来る温かい笑顔を、もうずっと、どの人からも見ていなかった。

“そうか。俺は吉良にこういう顔をして傍にいて欲しかったのか”

そんな事を考えた俺は、きっと吉良の言う様に熱に浮かされていくだけなのかもしれない。
それでも…

吉良なら、傍に居ても良い。

第十二章 芽吹く心の種に

月曜日。

慌ただしい午前の診療が終わった後、絢子^{あやこ}さんと結城^{むすし}さんと私の三人で、私服に着替えて近くのカフェへランチに来ていた。いえ：これは拉致に近いのかもしれない。

「あげはちゃん、今からちよつとお姉様達に顔かきなさいね？」

昨日は土曜日からほぼ徹夜状態で榊紫苑の看病をした為か、家に帰った途端、ベッドにダイブして眠っていた。

肉体的よりも精神的にかなり疲れていた所為か、目覚ましのアラームにも気付かず、眼が覚めた時には予定の時間よりも一時間も遅かった。

遅刻はしなかったけれど、お弁当の下準備もしていなかったし、作る時間門もなかったなので今日はお弁当なし。

なので、今日はどこかに食べに行くか、コンビニでお買い物でもしようかと考えていた時、両サイドをお姉様二人に挟まれて有無を言わずこの場に連れてこられた。

お昼の時間帯も後半に差し掛かった頃だったので、カフェの忙しさのピークは少し過ぎていた。でも、お洒落なカフェテラスもあるそのお店はまだ、店内にたくさんの女性客がいる。

私たちは、テラス間際の丸いテーブル席に案内され、其処に腰を下ろした。

三人ともメイン違いの日替わりのランチを注文し、料理を待つ事になったのだけど、二人の私を見る視線がとても痛い…。

何故だか、二人とも楽しそうに私を見ているのだけれど…私、何かしたかしら…。

特に絢子さんの目が輝いている…。

「あ、絢子さん、何か良い事でもあったんですか？」

「またまた。良い事があったのは、あげはちゃんでしょ？」

良い事？悪い事しか思い浮かばない私に、絢子さんがにやりと笑う。

「身持ちの堅いあげはちゃんがキスマーク付けて出社してくる日が来るだなんてねえ。オネエさんは感激したわ」

思わずまだ痕の残る首を押さえる。

見えにくい絆創膏を貼っていたし、人の居ない時間を見計らって更衣もしていたのに、何処でばれたんだろう。

「い、何時みたんですか？」

「ふふっ。あたしの目は誤魔化せないわよ？」

「あげちゃんが急に色っぽうならはったから、彼氏でも出来はったんとちがうやるかって、絢ちゃんと言ったんよ」

おっとりとした口調でそう言った結城さんは、絢さんと目くばせして笑う。

「…色っぽい？」

言われ慣れない言葉を聞いて、私は首をかしげる。

「やだ、自覚なし？」

「はあ…それに彼氏もいないんですけど…」

「なに、じゃあ彼女!？」

大げさに驚いて見せた絢子さんの声が、ランチタイムで混雑し始めた店内に響き、お客さんのいぶかしげな視線が私たちに集中する。

「ち、違います！彼氏も彼女もいませんから」

私は絢子さんの腕を掴んで、首を何度も横に振った。

「それなら、首のそれはどないしたん？」

小首をかしげる結城さんに、言葉が詰まる。

あれをどう説明したらよいのだろう…。

「あげはちゃん…よもや、院長じゃないでしょうね？」

昔取った杵柄で、身震いしたくなるような鋭い視線を向ける絢子さんに、首がもげそうなくらい首を横に振った。

絢子さん、どういう訳か院長と仲が悪くて、敵意むき出しなのよね。仕事中には支障がないのだけど、プライベートだと犬猿の域。

「ち、違います。こ、これは院長の従兄弟のせいです」

考えるよりも早く私の口をついた言葉に、絢子さんと結城さんが顔を見合わせる。

「院長の従兄弟ってことは、榊一族？」

「そら、口より手の方が先に出はりますなあ」
「榊の誰よ。そいつ、三枚に下ろしてやるわ」

舌打ちをしながら呟いた絢子さんに、結城さんが苦笑いする。

「…絢子さん、会った事ありますよ？」

「何時？」

「先週の水曜日に、外人さんに私が絡まれてた日です」

「あ、ちよい伊織似の年下超絶美形な外人？」

「その人がお探しの榊さんです」

「あれが！？思いつきり外人じゃない！何処に日本人の血が混じってる訳？」

「…行動は、まるつきり榊一族です」

「やだ：あんなイケメンなら食べられてみたい…いえ、伊織に置き換えて妄想しながら余すことなく食べちゃうわね」

「もう、絢ちゃんたら肉食女子やわあ。そんな折は、うちも仲間に入れてくれはりますか？」

さつきとは全く違う、夢見る乙女のように妄想を抱いて恍惚とする絢子さんに、結城さんが品良く笑って恐ろしい事をさらりと言う。

「もちろんよ、希美^{きみ}ちゃん！美味しい物はみんなで頂かないとね！」

そうだ…この二人、年下のイケメンが好みだって言うのを、すっかり忘れてた。

この話が先に進んだら、めくるめく下ネタ話に突入して、二人は現実世界に小一時間は余裕で帰って来ない。

断固、阻止しなければ。

「そ、そう言えば、絢子さんの大事な伊織さんはどうなったんです

か？」

その瞬間、絢子さんの表情が一変する。とても険しい表情へと。

「あげちゃん、そら聞いたらあきまへん」

結城さんが悲壮な顔をする。

「え???重病なんですか??」

「そやのうて…」

「あの女、マジムカつくっ!」

突如、絢子さんが激怒して立ち上がる。

その鬼気迫る怒りに、思わず結城さんと身を寄せる。

周囲も一瞬静まり返って、一斉に絢子さんに視線が注がれた。

「な、なななな何があつたんですか？」

「ネットで、今撮影中の映画の主演女優の女の子と、伊織が付き合
うてる言う噂が昨日から流れてますのんよ」

そつと、結城さんが囁くように私に教えてくれる。

絢子さんは周囲を気にすることなく、再び椅子に腰を下ろす。

「なにが献身的な看護をして、愛を深めたよ！絶対に、あの書き込
みはあの女本人よっ！」

毒舌を放った絢子さんはグラスを掴み、氷の入った水を一気に飲
み干した。

「あの小娘、共演者キラーの上、自分からありもしない熱愛情報を
リークして、話題集めをするって有名なんだから！」

「例の噂を消すのに必死なんと違います？」

「噂？」

芸能関係に疎い私は、噂が何か分からなかった。

「ひと月くらい前に麻薬所持で捕まった俳優が居ましたやろ？」

「…そう言えば、そんな話を聞いた様な…」

「そのお人と、今、伊織と噂になってはる子が交際してはった言う
噂がありましたなあ」

「小娘は否定してるけど、ネットにはそいつのはめ撮り写真が何
枚も掲載されて、ネットが炎上したのよ」

「はめ撮りって…もしかして、情交現場の生写真？」
「やだ、あげちゃん。その言い方の方が卑猥に聞こえます」

結城さんは、楚々と笑った。暗に肯定されたスキャンダラスな内容に、私の方は思わず言葉を失う。

誰と付き合おうと自由だけれど、もう少し自分を大事にしたらいいのに…。

「で、その女の子にも麻薬の使用疑惑が出てるんよ」

「へえ…だから、新しい交際話でイメージを変えようとしてるってことですか？」

「でしようね。しかも、よりもよって伊織を使うなんて…」

「…伊織さん、とんだ災難ですね」

「それを言うのなら、希美ちゃんもよ？」

「え？」

「演技力もいまいちで視聴率もとられへん性悪娘が芸名でも結城を名乗るやなんて、うちの大事な旦那はんの名が穢れますえ！」

珍しく、結城さんがプリプリと怒りを表現する。

結城さんのご主人は名の売れたミステリー作家。結婚して八年になるけど、彼女には倦怠期なんて言葉が存在しないらしい。結城さんは、旦那さんの事が大好きすぎて時々、周囲が見えなくなる。

「希美ちゃんの所は、未だにラブラブよねえ」

「そうでもあらしまへんのよ。旦那はん、うちより十も年上やから子供扱いで女扱いしてくれはらん事もあるし、夜かてそっけないし…」

突然爆弾投入をしてきた結城さんに、絢子さんが微笑む。

「で、ジエラってもらう為に、意趣返しに年下の伊織のファンクラブ入ったら、旦那さんが策略通り嫉妬して、ラブラブ再燃なのよね？」

「ふふっ、伊織に張りおうてくれはる所が、可愛いんよ。ほんまに伊織様々やわあ。勿論、伊織は若いのに礼儀正しいし、ファンを大事にしはる良い男やから旦那はんの次に好いてますえ？」

「そう、そうなのよ！伊織は礼儀正しくて誰にでも優しいから、その気がなくても女に誤解されやすくって言い寄られるのよね」

「絢ちゃんの言う通りやわ」

「希美ちゃんもそう思う？」

「勿論やわ。あないに良い男、他にいてはりまへん」

違う話に火が付いてしまった二人の『伊織べた褒め』マシンガントークには、院長すら口を挟めない。

其処に芸能人音痴な私などが口を挟める訳もなく、食事もそぞろに二人の熱烈トークを一时间頷きながら聞く事になった。

§

結局、伊織話で私のキスマークの理由を追求すると言う、本題の話は忘れられた。

午前のパート業務だけの結城さんと、夕勤までフリーの絢子さんとはカフェを出て別れ、私は一人でクリニクに戻った。

追及されなかった事にほっとしたものの、お姉様二人の滾り溢れる上坂伊織への愛情を激しくぶつけられ、なんだかどっと疲れてしまった…。

ドルビーで上坂伊織の良さを語られたけど、私には顔がさっぱり浮かんでこない。

「ただ今戻りました…！何っ…！」

休憩室の扉を開けた瞬間、私の目の前に大きな薔薇の花束があり、危うく衝突する所だった。

「…薔薇？」

しかも全てが深紅色の薔薇の花で、見たこともない巨大な花束に思わず魅入ってしまう。

一体、どれだけの本数をまとめたら、扉を塞ぐような大きさになるのだろう。しかも、このひと束で幾らになるんだろう…なんて、下世話なことを考えてしまった。

「遅い」

上を見上げれば、薔薇の花の先に院長の顔が見える。

しかも、ものすごく不機嫌な顔で、私を見下ろしている。

ワイシャツ姿で花束を抱える院長の姿が、様になり過ぎている。

容姿の良い人間は、何をしても似合う。院長の職業をモデルと言っても、十分通用する様な気がする。

「うわぁ…気障ったらしくて、似合い過ぎですね院長」

院長が鼻で笑う。

「お前の褒め言葉に棘が見えるが？」

「気のせいですよ。で、そんな大きな花、どうしたんですか？美菜先生へのプレゼントですか？」

「お前宛てだ」

「はい？」

院長は私にその花を押し付け、強引に私の腕の中におさめさせた。私の腕の中でかなりの重量を主張する、横幅も私の倍はあるそれは大きすぎてバランスがとりにくい。思わずふらつとよろけて、院長に片腕を掴まれて支えられる。

「い、一体だが、こんなに大きな花束を？」

院長が花束の中からメッセージカードを取り出して開くと、流暢な英語でそれを読む。

「Thank you for yesterday. Love
I love you with love」.

“…えつと…昨日はありがとう。素敵なあなたに愛を込めて!?”

脳内で訳された言葉に、薔薇の花の贈り主が瞬時にして分かる。

「これ…もしかしくなくても、榊紫苑ですか？」

「身に覚えがあるようだな？」

「知合いでこんな真似をするのは、院長か榊紫苑くらいです」

彼ならば女性に対して普通に薔薇の花を贈りそうだし、こんな歯の浮きそうな台詞を直に言うイメージがある。

榊一族ならば尚の事、この程度は普通にしていまうから。

「俺はその気もない女に、こんなデカイ花なんざ贈らないぞ」

「…昨日、手を握ったら手当を請求しますって脅したにも関わらず、手を握ってきたんです。その慰謝料に贈ってきたんじゃないんですか？」

「握手程度で慰謝料とは…お前、守銭奴に磨きがかかったな」

まじまじと私を見つめて眉をひそめた院長に、私は頭が痛くなる。榊紫苑から特別手当が欲しくて、そんな事を言った訳じゃないのに。

「セクハラを牽制しただけです」

「どうせなら、金品を要求すればいいだろ。芋蔓式にむしり取れるぞ」

「む、むしり取るって…阿漕な事言わないで下さいよ。それに、金品なんて貰ったらセクハラに生々しく同意したと思われるじゃない

ですか」

むしろ、金出したんだから触らせるみたいなの、水商売の客にありがちなエロ親父対応をされても困るから、‘手当て’にいろいろ条件を付けて、相手の行動抑制を促すための脅しをかけてみたのに…。まさか、本当に対価の‘特別手当’を用意するなんて。

「それに、ご自分の従兄弟を金蔓みたいに表現するのはどうかと思うんですけど」

「美人局戦法で、俺があいつからいくらでも強請ってやるぞ？」

「はい？院長の思考、ホントに意味不明ですけど…」

榊紫苑張りに会話が繋がらなくなり、私は頭が痛くなる。

昨日、人の言うことを聞かない天の邪鬼をベッドに送り込んだは良いけれど、代わりに片腕を奪われた。

しっかりと人の手を握り締めた拳句、榊紫苑は子供の様に延々と喋り続けてくれた。

普段の彼からは考えられない程に多弁だったのは、熱で浮かされたいなのかもしれない。

結局、榊紫苑は喋りつつ眠気と格闘しながら、ことりと眠りに落ちた。

“まあ、病気になるると心が弱くなって、誰かにいて欲しくなるものだから…”

相手の強引なペースにはまりながら、そう思った時点で私は手を握られたことに対する怒りはなくなっていた。

何時も、張り付けたような笑顔を見せる榊紫苑の、安堵したような寝顔を見れば尚更。

病人を前にすると下手な慈悲が生まれてしまうのは、私の悪い癖

かもしれない。

それに榊紫苑の方も、美菜様に告げ口されるのが嫌だったのか、それ以上の行為はなかったから、それだけは本当に安心した。

「紫苑の奴も、何をやっているんだかな」

「？何か言いました？」

考え事をしていてほとんど聞きとれなかった院長の言葉に首を傾げれば、院長は私を一瞥しただけだった。

コーヒーマーカのコーヒートを二人分注いだ院長は、休憩室の机に一つを乗せて一人掛けのソファに腰を下ろす。

そして、コーヒートをすすりながら指で空いているソファに腰をかけるように促して来る。

私は花束を抱えたままそのソファに座り、横に花を下ろす。

「ところでお前、どうやってあいつを眠らせた？」

「どうって…あの人、好き放題喋って、喋りながら勝手に寝落ちしましたけど」

「なんだ、その言葉を覚えて浮かれ過ぎた餓鬼みたいな寝方は」

「話をすることで憂さ晴らしが出来て、すっきりしたと思いますよ？」

机の上のマグカップを取って、コーヒーに口をつける。

院長専用のブルーマウンテンのコーヒー豆だけあって、インスタントとは比べ物にならない程、香りも良ければ味も深くて美味しい。

「愚痴を言ったり、何でもない話が出来る環境があの人には必要だったから、土日私をあそこへ泊らせたんですよね？」

「…何の事だ」

「簡易で安全、後始末不要な感情をポイ捨て出来るゴミ箱役をやれ

と言うことだったんですね?」

榊のプライドで吐き出せない彼が本音を吐いても、それが外に漏れず、後腐れなくストレス発散ができる環境が、榊紫苑には必要なのだ。

彼の気持ちを受け止める役割を、院長はずっと前から私に要求していたのかもしれないと、昨日、ようやく気付いた。

性格からして絶対に言わないであろう、『話をしたい』、『話をしている』と『だ』と言った榊紫苑の言葉が引き金で。

自嘲気味に笑えば、院長は不愉快そうな目を細める。

「お前、その自分を貶めるかのような毒舌は止める。それとも何か、紫苑のメンタルケアがそんなに気に入らなかつたのか」

「いえ。院長の意図をくみ取ることが遅れた自分への揶揄ですから重要なことを院長は殆ど口頭指示しない。しかも重要なことであればあるほど言わない。

院長の一挙手一投足を見て、院長の考えを汲み取らなければこの職場では仕事が務まらない。

本当は、もっと早くに気付いて対応をしなければいけなかつたのだ。そのために、院長は榊紫苑の治療介助に私を選んだはずだ。

彼の症状と似たものを体験した私を。

情けない。私情でそんなことも見失っていたなんて。

「済みませんでした。カウンセラーの代わりに務めなければいけなかつたのに」

「…お前にしては、気付くのが遅かつたな」

怒ってはいないけれど、多少呆れてはいるようで、院長はため息を吐きながらそう呟く。

私には返す言葉もない。

「だが、そのおかげで警戒心の強い紫苑の方が、お前に興味を持ったようだから。治療目的の経過結果としては申し分ない…お前への無駄な手出しがなければな」

確かに、出逢って二年、つい先日まではありふれた看護師と患者のやり取りしかしてこなかったのに。何が彼の琴線に触れたのか、今は向こうからの過剰なスキンシップに、毎回驚かされる。

「本当に、あれだけはどうかならないかなって思いますけど…あれでストレス解消している感じがあるんですよ…」

私の動揺する姿を見て楽しんでいるのは、榊紫苑の作りものではない表情を見ているらば明らか。ただ、普通は女の人にあんな口説き文句みたいな台詞を言って迫ったら誤解すると思うのよ。

榊紫苑ってば、私が見てきたどの榊一族の男よりもエロフェロモンが垂れ流しで、私でさえ、うっかりドキドキするくらいなのだから。

「…で、あいつは自分のことを何か話したか？」

確認をするように訊ねてきた院長に、私は一瞬答えを考える。どの程度の話をしたか、自分の記憶を辿る。

「生い立ちや、家との確執の話を簡単に…」

「仕事の話は」

「ホストの話ですか？」

「…ホスト？」

不審そうな顔をした院長に、何か間違ったことを言ったのかと内心で冷や汗が出る。

「職名はハッキリと言われていないんです。ただ、話の内容からホストかと思っ…榊さんも否定しませんでしたから…」

「…あの莫迦」

深いため息とともに額に手を当てた院長は、大きく首を横に振る。

「生い立ちと、家の確執についてはどの辺りまで聞いた？」

答えるか否か、守秘義務があるので迷ったけれど、榊紫苑と仲の良い従兄弟の院長なら、榊紫苑のことは深い内情まで知っているはず。

榊紫苑も院長は知っていると言っていたから、これは話しても問

題はないだろう。

「妾腹だから兄弟とも父親とも折り合いが悪いと。あと、医者になりたくないから榊の家を出て勘当されたとか…」

私の報告を聞き終えるや、院長は再び深いため息を漏らす。

“ な、なんで???? ”

多少のことでは動じない院長が、どうしてこんなに呆れたような溜息を洩らすのか、私には全く理解ができない。

「もしかして、私、榊さんに嘘つかれてたとか!？」

「あ?紫苑は嘘なんぞ言つてねえ…お前らに呆れているだけだ」

「…私たち?」

どうして複数形?一人称じゃなくて。

しかも院長が何に対して呆れているのか、解らない。

「まあいい。あいつがそれだけ自分から言えば十分だ」

「十分?」

「女を信用しない紫苑が、お前に気を許し始めているって事だ」

「確かに榊さんつて、女の人をどこか冷めた目で見ていますよね」

「…お前、もつと気にする所があるだろうが」

「え?」

「あいつは女遊びが派手な上、上っ面だけは女にフェミニストだが、その実、女に強い不信感を抱いている。その男から信用をお前は得たということだぞ」

「そんな大げさな」

笑いながらそうかわせば、院長は至極真面目に私を見据える。

「しばらく俺と一緒に暮らしていた時でさえ、あいつは俺の前で寝たことがない」

その真摯な眼差しに咎められ、私も姿勢を正して院長を見据える。

「人の気配がすればすぐ目を覚まして飛び起きるあいつが、あれほど熟睡している所を、一昨日、初めて見た」

「高熱のせい…」

言いかけた瞬間、鋭く睨まれ、私は言葉を飲み込んだ。

「熱であれ、体調不良であれ、あいつは人に隙を見せたかからない。それを晒したのがお前でなければ、とっとと既成事実で手に入れると紫苑に進言してやる所だ」

「進言って…勝手に変な事を勧めないで下さいよ」

「だから、お前以外ならと言っただろうが」

「…院長って、榊さんのことが好きなんですネ」

鋭い院長の視線が、私の一言で更に剣呑さを増した。

「俺はバイセクシャルでもホモでもないぞ」

「そう言う意味ではなくて…仲の良い兄弟みたいですよネ」

「出来の悪い奴ほど、可愛いだろうが。あいつがどう思っているかは知らねえが」

本質は面倒見が良い兄貴肌の院長は、表向きDSで全くそうは見えないのだけ。

「榊さんの病気を治したいんですね」

院長は鼻で笑う。

「お前が紫苑を快く思っていないのは承知の上だ。だが、紫苑の不眠症の治療は、お前の今後の行動が大きく関わることになるはずだ」

「…私は、出来ればあまり接触したくないんですけど。あちらはおふざけかも知れませんが、手が早い所とか、無駄にフェロモン垂れ流して迫って来るのは、どうしても苦手と言っか…迷惑で困ります」

「勤務中に手を出すなど、釘をさしてやるから心配するな」

「…仕事中だけですか？」

「privateまで干渉なんざするか」

「できたら、榊紫苑の件に限り干渉してほしいんですけど」

「お前が俺の愛人になればそうしてやる」

「お断りします」

鼻で笑った院長は、仕返しの様にそんな仮定話を持ちかけて来た。

「あり得ないと思いますけど…そんな事態になったら、厚かましいですが丁重にお断りします」

「紫苑だからか？」

「…いえ。単にお一人様生活の気楽さを知ってしまったので」

血の繋がった両親さえ見捨ててしまった自分には、誰かを好きになる資格も、誰かに愛される価値もなければ、新しい家族を持つ事さえ赦されない気がして。

一人で生きていた方が、罪の意識にさいなまれることもないし。そんな事を思っていたら、院長の片方の眉尻がピクリとつり上がる。

「…お前、まさか家で干物女になってねえだろうな？一度、家庭訪問するぞ」

「！なんですか、家庭訪問って！学校の先生ですかっ！？」

「何だその狼狽ぶりは。抜き打ちで行ってやるから覚悟しろ」

「結構ですっ！別に干物化してませんからっ！」

そう叫んだ私に、院長はただ不敵に笑うだけだった。

§

その後、ロッカーにもおさまりきららない、存在感絶大な薔薇の花束について、散々、夕診の為に出勤した同僚に冷やかされた。

ありつたけの職場の花瓶にその薔薇の花を飾っても、まだ自己主張甚だしい大きな花束を抱えて、フラフラと徒歩十分の場所にある自分が間借りしているアパートに戻った。

本当は午後に出勤してきたスタッフにおすそ分けしようと思ったのだけど、一斉に皆から叱られた。

バラの花の花言葉を説かれ、男からの贈り物を無下に人にあげてはいけないとか、大事に愛でなさいと言われて、やっとの思いで家に持ち帰った。

だけど当然、家の花瓶に入れてもおさまりきらない量なので、バケツに花を活けてみた。

恐ろしい事に、それでも薔薇があぶれてしまった。

悩んだ挙句、余った花は思い切ってお風呂に散らしてみることにした。

湯を張ったバスタブに、ローズのアロマオイルを数滴垂らし、贅沢に薔薇の花弁を千切って浮かべれば、何気なく高級スパみたいな雰囲気になった。

せっかくだつたので、電気ではなく蠟燭の明かりで幻想的にして、湯船の中でまったりモードに。

“は、なんだか疲れたなあ……”

よく考えたら土日もほとんど寝てなかったし、今日は今日で変な気疲れをしてしまった。

今日はゆっくり休もう。

“ 榊紫苑も彼の知合いが介抱しているみたいだから、大人しくしているだろうし ”

花束のお礼も兼ねて、昼休憩中に院長の携帯電話から榊紫苑に連絡をして体調を確認したら、割と元気そうだった。

レンジでチンすれば食べられるように、日持ちする食事を作って冷蔵庫に入れたから、しばらくは飢え死にすることも無いはず。

“ 院長も、仕事の帰りに覗きに行くって言うていたから大丈夫…って、なんで榊紫苑の心配をしているのかしら…”

彼がくれた薔薇の花を目の前にしているから？

目の前にぶかぶかと浮かぶ薔薇の花を両手ですくい上げ、じっと眺める。

彼が贈ってくれた花束の一部であった、深紅の花だったその一片たちを。

お金や物ではなく、度は越したサイズではあるけれど花束をお詫びにした榊紫苑に、どこかほっとしていた。

金品なんて持ってきたら、彼を間違いなく軽蔑していた。人間として。

しかも、昨日の今日という行動の速さもそつがない。まだ熱があるのに。

このあたりの気遣いは、DNAにまでしみ込んだ榊の女好きのなせる技だと思う。

“でも、榊紫苑も色々大変だったのねえ…家名が大きいと、その分苦労も多いだろうし…”

榊の暗黙の掟とも言える『医師』の道を拒絶して、生きていくなんて容易なことではないって分かる。

外科医至上主義の榊は、それ以外のジャンルの医師を蔑視するきらいがある。

医師であってもそんな態度の榊が、医師以外の職種を選んだ人間にどのような事をするのか考えるだけで怖い。

医療系以外にも、財閥の榊には一般の企業にも顔がきく。

榊紫苑が勘当されたとは言っていないでも、普通の社会人として生きてても、何らかの干渉を榊はして来るだろう。

きつと榊紫苑には、彼らの手の届かない分野でしか生きる道がない。

狭められた枠の中で選んだ仕事。

覚悟を決めたとはいえ、自分の意志とは別に生きるために選んだ仕事だとしたら…

そう思ったら、少し前の自分を思い出してしまった。

高額な負債を背負ってやりたい事さえ捨てて、ウオータービジネスの中で生きていた自分を。

誰にも何も言えずに、少しずつ心を病んで眠れなくなって、体を壊して潰れてしまった自分に、榊紫苑が重なって見えた。

私が運よく回避できた最悪な結末になど、辿りついて欲しくない。嫌いで苦手な榊紫苑であれ、どんな人であれ、あの苦しみを味わってほしくなかった。

だから、榊紫苑が話をすることで心安らかに眠れるなら、話をするくらいの優しさを安売りしても良いのかもと思った。

看護師としてではなく吉良あげという個人の意思で。

“…え…あれ…どうして個人的???”

自分の思考が導き出したものに、私は凍りつき、掌からお湯が零れ花弁だけが手に残る。

会うのも遠慮したいくらい嫌いだと思っていたのに、今はそこまですで嫌いじゃない。

それは、少しだけ榊紫苑という人間を知ったからかもしれない。多分、一過性に同情的なものを榊紫苑に抱いているだけだ。

“…感情移入のし過ぎは良くないわよね…気を付けよう”

再び両手でお湯を掬い、雑念を振り払うように顔にかける。

『俺は吉良と親しくなりたいのに…』

不意に榊紫苑の言葉が脳裏をかすめ、顔を覆うように当てた手が止まる。

明らかに私の反応を楽しむためのものであるう、誘惑を導く言葉なのに。

どうして今、思い出して激しい動悸がするんだらう。

どうして看護師として一線を引こうとする自分に、後ろめたさがあるんだらう。

『お前、紫苑が本気で口説いてきたらどうするつもりだ？』

追うように、院長の質問がよみがえる。

あり得ないはずの事なのに、院長が言う現実と現実に起こりそうで怖い。

「院長が変な質問するから、訳わかんない事がぐるぐるするのよっ
」！

ずると身を下げ、頭の先まで湯の中に潜り込む。

恋も愛も要らない。考えたくもない。

もう人に裏切られて悲しくなるのは嫌だから。

誰かを特別な思いで見ること、見られることも怖いから、心をきつく閉じて蓋をしたの。開かないように頑丈に幾重にも封をしたの。

だから、誰もこの蓋をこじ開けてしまわないで…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3185x/>

Parfum

2011年12月7日06時48分発行